静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第181集

井通遺跡Ⅱ

井伊谷川流域の遺跡　Ⅲ

平成8～19年度　二級河川井伊谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第181集

井通遺跡Ⅱ

井伊谷川流域の遺跡　Ⅲ

平成8～19年度　二級河川井伊谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００８

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第181集として『井通遺跡Ⅱ』をここに刊行する。

井通遺跡は、静岡県浜松市北区細江町に所在する。この周辺は銅鐸分布圏の東端にあたることで著名であり、東海地方において歴史的に重厚な地域である。

静岡県埋蔵文化財調査研究所は、井伊谷川河川改修工事に伴い、井伊谷川流域の遺跡を1996年度より継続的に調査を実施してきた。特に井通遺跡では律令期の建物群や大溝、墨書土器等が確認され、引佐郡家が直接管理する港湾施設としての機能を有していたことが判明した。

本書は、2001年から2004年にかけて井通遺跡で実施した弥生時代中期～古墳時代前期の発掘調査成果を報告するものである。これらの調査成果が、静岡県西部における本格的な農耕社会成立の解明に寄与されることを願って止まない。さらに、本書が多数の方々に活用され、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば、誠に幸甚である。

最後に、発掘調査ならびに本書の作成にあたり地元の皆様、静岡県浜松土木事務所、細江町教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位に、多大な御理解と御協力をいただいた。さらに、多くの方々から御指導・御助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。また、現地作業、資料整理に関わった調査員・作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表す次第である。

2008年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎藤　忠

例　　言

1　本書は静岡県浜松市北区細江町広岡に所在する井通遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は井通遺跡における弥生時代中期～古墳時代前期の調査を報告するものである。
古墳時代中期以降の調査は、『井通遺跡』本文編１・本文編２・図版編・文字資料編として報告している。

3　調査は、二級河川井伊谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、細江町教育委員会の協力を得て、財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4　本書で報告する現地調査、及び一部の資料整理は、蔵本　俊明　調査研究員を担当者として実施した。
なお、調査体制・調査期間等については第１章に記した。

5　本書の執筆分担は次の通りである。
　平塚　智久　　第１章・第２章
　丸杉俊一郎　　第３章・第４章

6　現地の基準点測量、空中写真測量・空中写真撮影は、株式会社　フジヤマ、及び大成エンジニアリング株式会社に委託した。また、石器の実測・トレースを株式会社　パスコに委託した。
なお、理化学的分析結果は付載として掲載し、実施機関は文中に記した。

7　遺構の写真撮影は、蔵本　俊明　調査研究員が行った。遺物の写真撮影は、当研究所写真室担当者が行った。

8　現地調査において篠原和大氏（静岡大学准教授）からご指導を得た。
また、石器組成について禰宜田佳男氏（文化庁）からご指導を得た。記して謝意を表します。

9　本書で使用した座標値は、日本測地系（旧測地系）に準拠した。

10　本書に掲載した遺構は、発掘調査段階の名称を変更した。本書をもって正式名称とする。

11　本書の編集は、財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

12　発掘調査資料、及び出土遺物は、静岡県教育委員会が保管している。

13　本書作成以前に井通遺跡の内容について中間的な報告を行ったが、それらと内容が異なる場合は本書をもって正式報告とする。

井通遺跡 Ⅱ

目　次

序
例　言

第1章　序　論 …… 1
　第1節　調査経緯 …… 1
　第2節　調査組織と調査経過 …… 2

第2章　遺跡の位置と環境 …… 7
　第1節　地理的環境 …… 7
　第2節　歴史的環境 …… 8

第3章　調査成果 …… 11
　第1節　調査概要 …… 11
　第2節　遺　構 …… 12
　第3節　遺　物 …… 17

第4章　総　括 …… 23
　第1節　都田川流域における弥生時代中期の諸問題 …… 23
　第2節　井通遺跡の歴史的変遷 …… 28

引用・参考文献、図出典
付　載　理化学的分析
図　版
写真図版
報告書抄録

図　版　目　次

PL. 1　井通遺跡　全体図
PL. 2　井通遺跡　遺構図割付
PL. 3　調査区北部　検出遺構図
PL. 4　調査区南部　検出遺構図
PL. 5　検出遺構図（1）
PL. 6　検出遺構図（2）
PL. 7　検出遺構図（3）
PL. 8　検出遺構図（4）
PL. 9　検出遺構図（5）
PL.10　SH4001・4005実測図
PL.11　SH4002～4004実測図
PL.12　SH4006・4007実測図
PL.13　SH4008～4010実測図
PL.14　SH4011～4013実測図
PL.15　SH4014～4016実測図
PL.16　SK4001～4004実測図
PL.17　SX4001～4005、SD4001・4002実測図
PL.18　SH4017実測図
PL.19　SH4018実測図
PL.20　SH4019・4020実測図
PL.21　SH4021・4022・4026実測図
PL.22　SH4023～4025実測図
PL.23　SH4027実測図
PL.24　SH4028・4029実測図
PL.25　SH4030・4031実測図
PL.26　SH4032・4033実測図
PL.27　SH4034～4036実測図
PL.28　SH4037実測図
PL.29　SH4038～4040、SK4005実測図
PL.30　SK4006～4008、SD4003実測図
PL.31　SH4001他出土土器実測図
PL.32　SH4018（1）出土土器実測図
PL.33　SH4018（2）・SH4019（1）出土土器実測図
PL.34　SH4019（2）・SH4020（1）出土土器実測図
PL.35　SH4020（2）他出土土器実測図
PL.36　SH4037出土土器実測図
PL.37　SK4002他出土土器実測図
PL.38　SK4006出土土器実測図
PL.39　SK4008他出土土器実測図
PL.40　SD4002出土土器実測図
PL.41　SX4001・4002出土土器実測図
PL.42　SX4003他出土土器実測図
PL.43　包含層出土土器実測図（1）
PL.44　包含層出土土器実測図（2）
PL.45　石器実測図（1）
PL.46　石器実測図（2）
PL.47　石器実測図（3）
PL.48　石器実測図（4）
PL.49　石器実測図（5）
PL.50　石器実測図（6）
PL.51　石器実測図（7）
PL.52　石器実測図（8）
PL.53　石器実測図（9）
PL.54　土製品実測図（1）
PL.55　土製品実測図（2）

写真図版目次

PH. 1　1　井通遺跡と浜名湖（南西から）
　　2　調査地区遠景（南から）
PH. 2　1　井通遺跡　北部全景（北から）
　　2　井通遺跡　南部全景（北から）
PH. 3　1　SH4001・4003（西から）
　　2　SH4005（東から）
　　3　SH4006（北から）
PH. 4　1　SH4007（東から）
　　2　SH4008（東から）
　　3　SH4009（東から）
PH. 5　1　SH4013　検出状況（東から）
　　2　SH4013（東から）
　　3　SH4015・4016（西から）
PH. 6　1　SH4017（西から）
　　2　SH4018　検出状況（東から）
　　3　SH4018（西から）
PH. 7　1　SH4019　検出状況（東から）
　　2　SH4019（東から）
　　3　SH4020（西から）
PH. 8　1　SH4022・4023（北から）
　　2　SH4022～4025（北から）
　　3　SH4022～4025（東から）
PH. 9　1　SH4022～4025（西から）
　　2　SH4026　検出状況（西から）
　　3　SH4027（西から）
PH.10　1　SH4027（東から）
　　2　SH4030（西から）
　　3　SH4031（西から）
PH.11　1　SH4032（東から）
　　2　SH4033（北東から）
　　3　SH4034～4036（北から）
PH.12　1　SH4037　検出状況（西から）
　　2　SH4037（西から）
　　3　SH4039（北から）
PH.13　1　SK4002　遺物出土状況（北から）
　　2　SK4003　遺物出土状況（南東から）
　　3　SK4004　遺物出土状況（東から）

PH.14　1　SK4006　遺物出土状況（東から）
　　2　SK4008　遺物出土状況（北東から）
　　3　SK4009　遺物出土状況（南から）
PH.15　1　SD4001（東から）
　　2　SD4002（東から）
　　3　SD4003（東から）
PH.16　1　SX4003（北東から）
　　2　SX4004（南西から）
　　3　SX4005（東から）
PH.17　出土土器（1）
PH.18　出土土器（2）
PH.19　出土土器（3）
PH.20　出土土器（4）
PH.21　出土土器（5）
PH.22　出土石器（1）
PH.23　出土石器（2）
PH.24　1　出土石器（3）
　　2　出土石器（4）

挿　図　目　次

Fig. 1　井通遺跡の位置 ---------- 1
Fig. 2　グリッド設定図 ---------- 3
Fig. 3　調査区の位置（1） ---------- 4
Fig. 4　調査区の位置（2） ---------- 5
Fig. 5　井通遺跡の立地環境 ---------- 7
Fig. 6　都田川流域出土青銅製品集成 ---------- 9
Fig. 7　井通遺跡周辺遺跡分布図 ---------- 10
Fig. 8　西遠江出土主要石器 ---------- 23
Fig. 9　竪穴建物集成 ---------- 25
Fig.10　置石炉の諸例 ---------- 26

表　目　次

Tab. 1　井通遺跡調査体制 ---------- 2
Tab. 2　都田川流域出土青銅製品一覧 ---------- 8
Tab. 3　出土石器観察表 ---------- 21
Tab. 4　東三河・遠江置石炉一覧 ---------- 26

第１章　序　論

第１節　調査経緯

井通遺跡は1993（平成５）年12月、静岡県引佐郡細江町（現静岡県浜松市北区細江町）広岡字井通において井伊谷川の河川改修工事に伴う工事掘削により土器が出土したことから、初めて存在が明らかになった遺跡である。

この工事の契機となったのは、1974（昭和49）年７月７日における台風８号、いわゆる“七夕豪雨”である。細江町では連続降雨量299㎜、時間最大降雨量73.5㎜の激しい雨に見舞われ、町域中央部を流れる二級河川・都田川の流域では、死者１人、負傷者５人、全壊21戸、半壊31戸、流失５戸、床上浸水681戸、床下浸水1,678戸、流失田畑124.87ha、冠水田畑759.15ha、決壊道路506箇所、堤防決壊20箇所、山崩れ915箇所の記録的な被害が生じた。

この災害により静岡県土木部では、新堤防の建設、流路付け替え工事などを中心とする都田川の全面改修工事を計画し、1976（昭和51）年より着工した。関連して都田川水系に属する井伊谷川の下流域においても整備計画が進められ、都田川との合流付近の新堤防建設に付随した河川幅を拡幅工事が行われた。井通遺跡の存在は、その工事の最中に確認された。

そこで、静岡県浜松土木事務所と静岡県教育委員会・細江町教育委員会が協議した結果、1994（平成６）年から1995（平成７）年の間に計５次にわたり範囲確認調査、及び新堤防の工事に伴う事前調査を実施し、その成果に基づき1996（平成８）年より本調査が実施されることになった。調査は静岡県教育委員会文化課の指導のもとに細江町教育委員会の協力を得て、財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所が行うこととなった。

本遺跡の古墳時代以降の現地調査は2002（平成14）年をもって完了している。計画的に配置された掘立柱建物や大溝等を検出し、多数の墨書土器・硯等の出土を確認した調査成果は、古代遠江国引佐郡家の郡津につながるものとして2007（平成19）年に報告書を刊行している（丸杉ほか2007）。本書は一連の事業に伴い、弥生時代の調査成果を報告するものである。

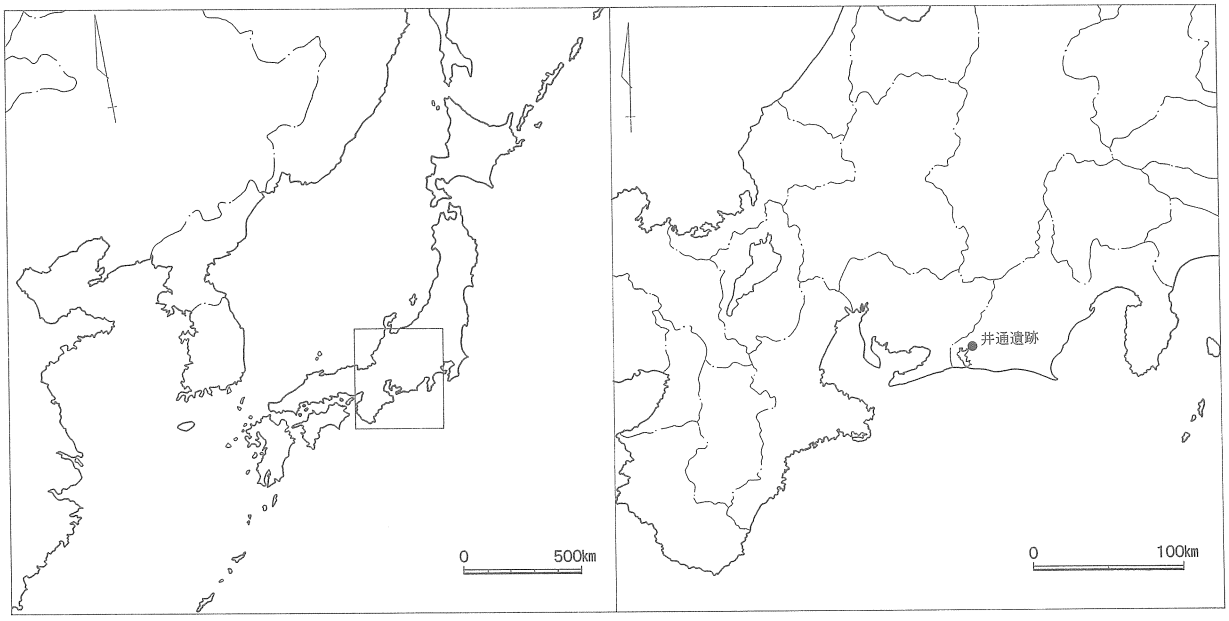


Fig.1　井通遺跡の位置

第２節　調査組織と調査経過

１　調査組織

現地調査は1996（平成８）年から2004（平成16）年まで９カ年にわたり実施された。古墳時代以降の調査成果については2007（平成19）年に報告書が刊行されている。

本書では、2001（平成13）年から2004（平成16）年にかけて行った、主に弥生時代の発掘調査成果を報告する。調査組織はTab.１の通りである。

２　調査方法

調査の進展を考慮して、調査区全体に10m四方のグリッドを設定した。グリッドは日本測地系に準拠し、グリッド名称は北西角のポイントに従って呼称した。全調査区は古墳時代調査終了後に埋め戻しを行ったため、その土壌は重機（バックホウ）を用いて除去（以下、盛土除去）した。重機のバケットには平爪を着装し、包含層の上面まで掘削した。包含層は人力で主に鋤簾を用いて掘り下げ、遺構検出に努めた。包含層及び遺構検出面、遺構埋土の土質は極めて似通っており、調査には大きな困難を伴った。そのため遺構検出に多くの時間を割かざるを得ず、今回の調査結果にも様々な影響を及ぼすこととなった。主要な遺構にはセクションベルトを設定するなどして埋土の把握に努めながら掘り下げた。

遺構の全体図は1/100で作成した。個々の遺構図については1/20を基本とし、出土状況が良好な遺構は1/10の図面を作成した。写真撮影は中型カメラを用い、フィルムにはモノクロ・カラーリバーサルの双方を使用した。また必要に応じてローリングタワー・ラジコンヘリコプターを用いた撮影を行った。作業工程記録写真には35㎜判カメラで対応した。なお、現地調査と並行して基礎整理作業（出土遺物洗浄・注記等）を現地事務所にて進めた。

Tab.1　井通遺跡調査体制

	総務部※1									
	所長	副所長	常務理事兼事務局長	常務理事兼総務部長	次長兼課長※2	次長※3	担当			
							総務係長	会計係長	副主任	主事
平成13年度	斎藤　忠	山下　晃		粂田徳幸			山本広子			
平成14年度	斎藤　忠	飯田英夫		粂田徳幸					鈴木訓生	
平成15年度	斎藤　忠	飯田英夫		粂田徳幸					鈴木訓生	
平成16年度	斎藤　忠	飯田英夫		平松公夫	鎌田英巳	鎌田英巳			鈴木訓生	
平成17年度	斎藤　忠			平松公夫	鈴木大二郎	鈴木大二郎		野島尚紀		望月高史
平成18年度	斎藤　忠			平松公夫	鈴木大二郎	鈴木大二郎				望月高史
平成19年度	斎藤　忠		清水　哲		大場正夫	稲葉保幸				望月高史

※1　平成19年度より総務課　　※2　平成19年度より事務局次長兼総務課長　　※3　平成19年度より事務局次長

	調査研究部※4				
	部長	次長　※5	担当課長※6	係長※7	調査研究員（◎は弥生時代調査の主たる担当者）
平成13年度	佐藤達雄	栗野克己　及川　司	篠原修二		◎蔵本俊明　小川和彦　丸杉俊一郎
平成14年度	山本昇平	栗野克己　佐野五十三	足立順司		◎蔵本俊明　小川和彦　岡部貴之　丸杉俊一郎
平成15年度	山本昇平	栗野克己　佐野五十三	足立順司		◎蔵本俊明　小川和彦　丸杉俊一郎
平成16年度	山本昇平	栗野克己　佐野五十三	足立順司		◎蔵本俊明　中村雅之　丸杉俊一郎
平成17年度	石川泰久	栗野克己　佐野五十三	佐野五十三		◎蔵本俊明　丸杉俊一郎
平成18年度	石川泰久	佐野五十三　及川　司	及川　司	富樫孝志	◎蔵本俊明　中村雅之　丸杉俊一郎
平成19年度		佐野五十三　及川　司	及川　司	富樫孝志	丸杉俊一郎　平塚智久

※4　平成19年度より調査課　　※6　平成19年度より事務局次長兼調査課長
※5　平成19年度より事務局次長　　※7　平成19年度より西部調査係長

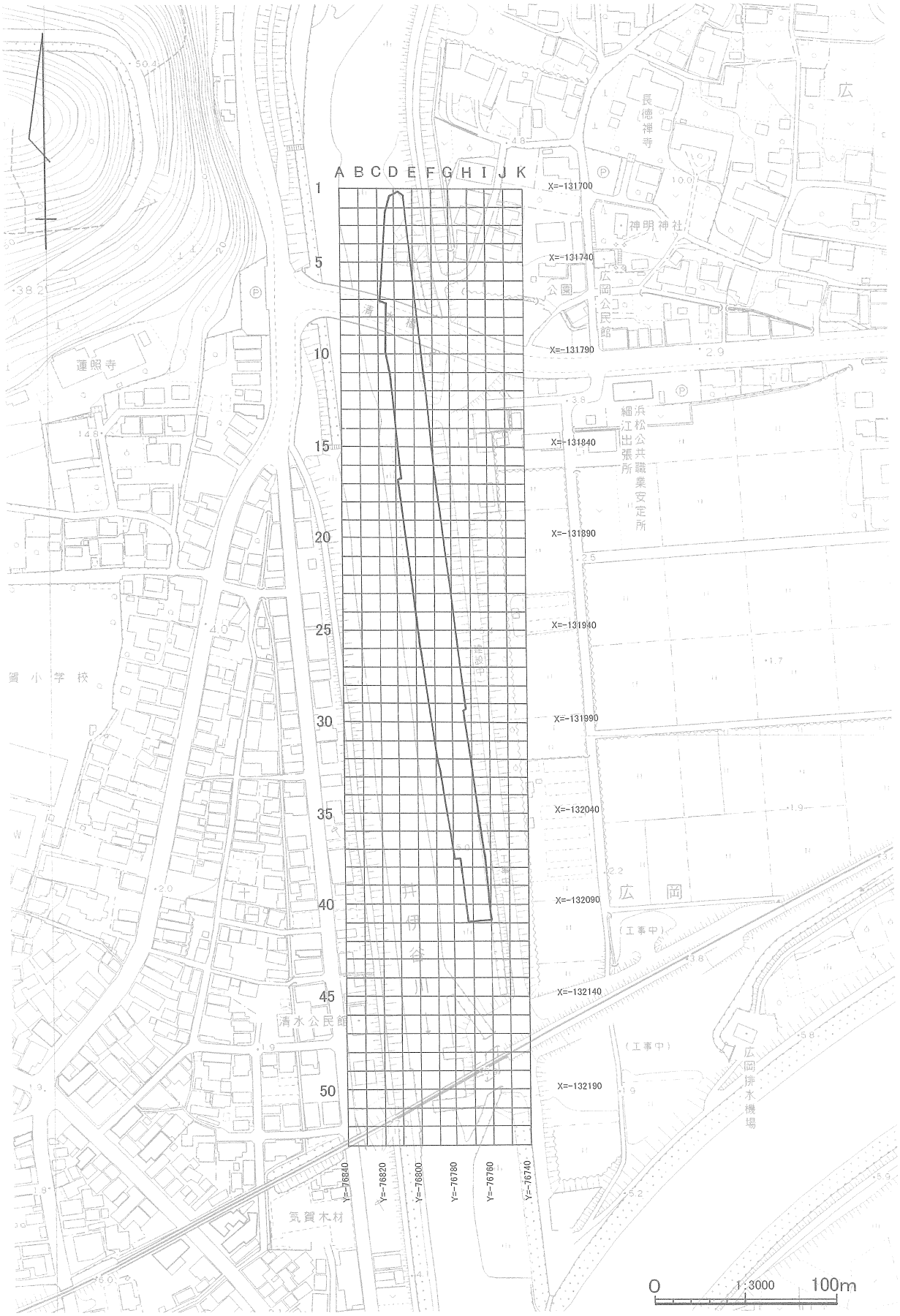


Fig.2　グリッド設定図

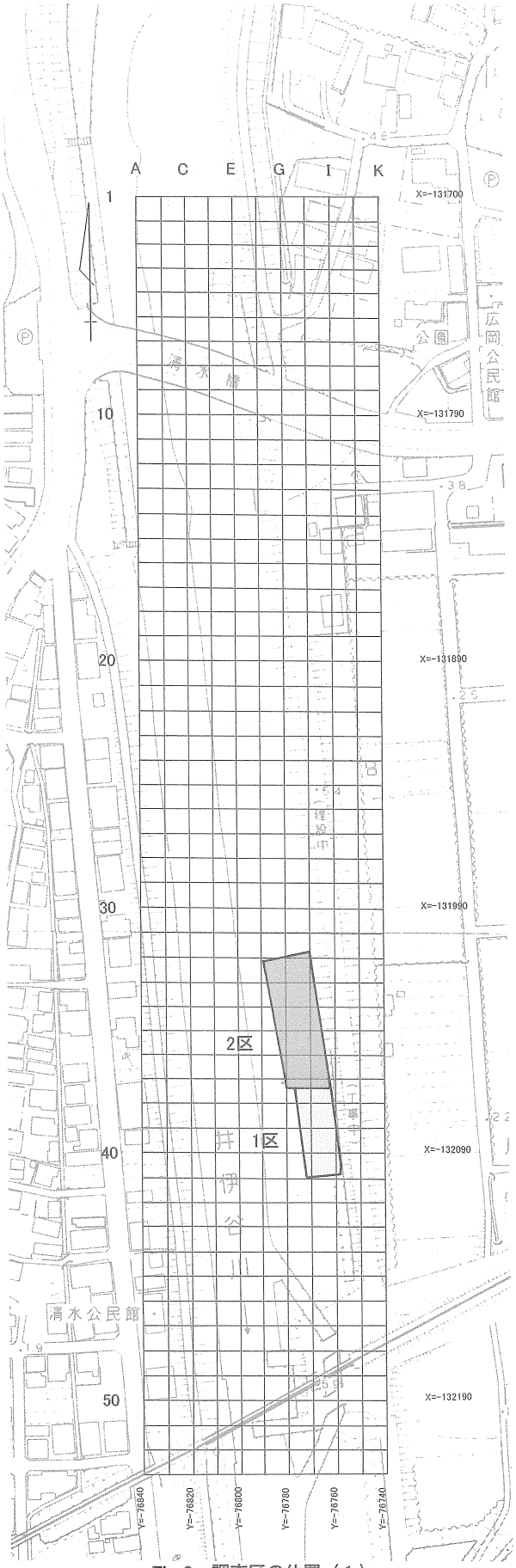


Fig.3　調査区の位置（１）

3　発掘調査の経過

平成13年度

調査担当 ◎蔵本（◎は主たる調査担当）

調査期間 平成13年８月６日～平成14年１月17日

調査面積 220㎡

調査対象 １区

弥生～古墳時代の調査は、調査区南端の区域から進めた。各種の制約から調査予定区西半で調査を中断することとなり、集落が展開する東半区は遺構検出作業のみとして、本格的調査は次年度に持ち越した。作業の概要は以下の通りである。

８月６日～　準備工
８月10日～　盛土除去。この間、台風のため作業は度々中断する。
８月29日～　遺構検出、実測、写真撮影等
９月３日　グリッド杭打設
９月20日　浜北市立麁玉小学校　発掘体験
10月５日～12月２日　矢畑遺跡の調査に重点を移したため、この間作業中断。井通遺跡では基礎整理等の作業を進める
12月３日～　調査再開。遺構検出、実測、写真撮影等
12月３日　三重大学名誉教授　八賀　晋氏　現地来訪
１月17日　調査完了

平成14年度

調査担当 ◎蔵本、小川、岡部

調査期間 平成14年10月7日～平成15年3月31日

調査面積 1,500㎡

調査対象 １区（東半面）、２区

前年度の調査で残された１区の東半面と２区の調査を進めた。多数の竪穴建物跡を検出し、溝・土坑等を確認した。

10月７日　調査開始
10月15日～　遺構検出、遺構掘り下げ、実測、写真撮影等
10月15日～　盛土除去
10月25日～　包含層掘り下げ
10月28・29日　グリッド杭打設
12月25日　湖西市立岡崎小学校教諭１名、児童４名遺跡見学
２月７日　静岡大学准教授　篠原和大氏　現地指導
２月25日　報道機関　現地公開。向坂鋼二氏　現地指導
３月14日　愛知県内民間市民歴史公開講座　遺跡見学（約40名）
３月27日　空中写真測量
３月31日　調査完了

平成15年度

調査担当 ◎蔵本、小川

調査期間 平成15年４月９日～平成16年３月29日

調査面積 3,550㎡

調査対象 ３・４・５区

３・４・５区の調査を実施した。前年度に続き多数の建物跡の存在が予想されたが、弥生～古墳時代の大規模な旧河道が検出されたのみで、明確な居住施設は検出できなかった。

（３区）

４月９日～　盛土除去

４月28日～　包含層掘り下げ

５月23日～　遺構検出、遺構掘り下げ、実測、写真撮影等

５月13日　浜松市立初生小学校児童　体験学習

７月７～11日　降雨による冠水のためベルトコンベアー等が被害を受ける。復旧に時間を費やす

７月31日　細江町立中川小学校教諭３名　遺跡見学

８月１日　空中写真測量

８月４日～　埋め戻し

（４区）

９月２日～　盛土除去

９月12日～　包含層掘り下げ

10月３日～　遺構検出、遺構掘り下げ、実測、写真撮影等

10月14日　グリッド杭打設

12月11日　空中写真測量

12月15日～　埋め戻し

（５区）

１月６日～　盛土除去

１月20日～　包含層掘り下げ

１月20日～　遺構検出、遺構掘り下げ、実測、写真撮影等

１月27日　グリッド杭打設２月10日　空中写真測量

３月８日～　埋め戻し

３月29日　調査完了

平成16年度

調査担当 ◎蔵本、中村

調査期間 平成16年４月１日～平成16年10月29日

調査面積 3,080㎡

調査対象 ６区

６区は井通遺跡の北端部に相当する。遺構の遺存状況は良好で、竪穴建物跡・土坑・土器棺墓等を検出した。検出に当たっては弥生時代遺構検出面の上面において遺構プランの把握を試みている。しかし、

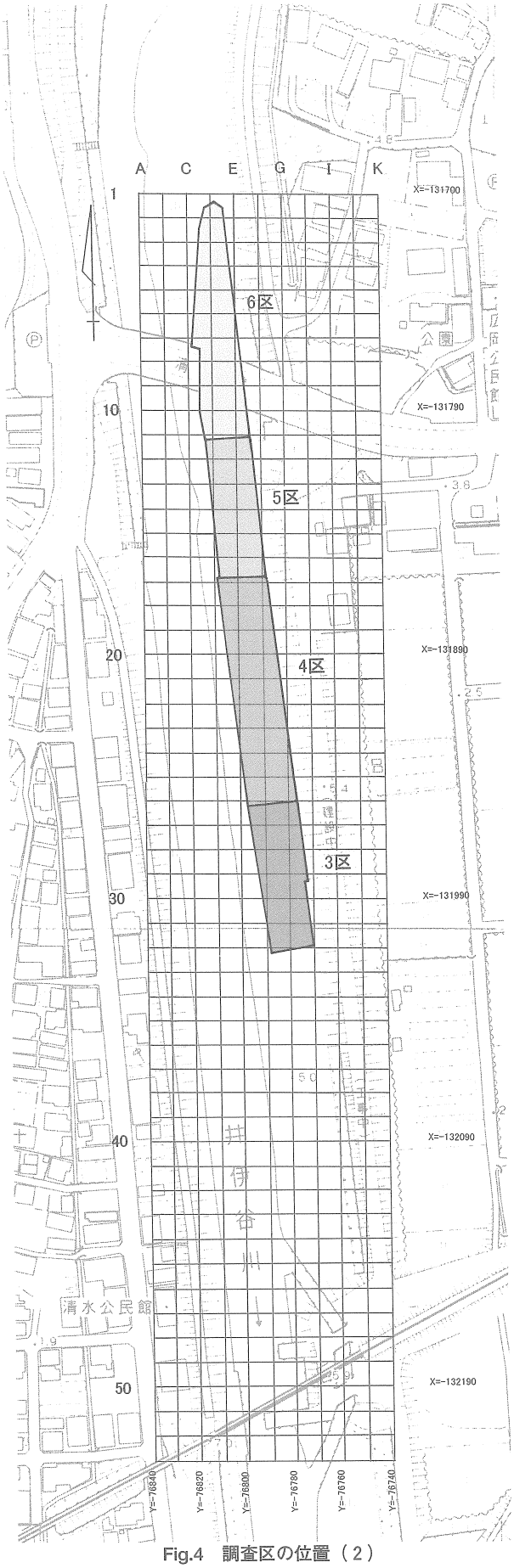


Fig.4　調査区の位置（２）

他の調査区と同じく包含層と遺構検出面・遺構埋土の峻別が困難であり、精査を繰り返すこととなった。多くの遺物が出土しており、攪乱内から出土しているが鳥形土器を確認している。

4月1日～　準備工
4月5日～　盛土除去
4月5日～　包含層掘り下げ
4月8日～　遺構検出、遺構掘り下げ、実測、写真撮影等
4月22日　グリッド杭打設
5月17日　浜松市立初生小学校　発掘体験
5月19日～　包含層掘り下げ
6月14日　空中写真測量
8月10日～　包含層掘り下げ
8月27日　浜松市立天竜中学校教諭1名　遺跡見学
9月16日　報道機関への現地公開
9月19日　現地説明会　約220名参加
10月18日　細江町教育長他　約15名　遺跡見学
10月29日　調査完了

4　資料整理・報告書作成の経過

平成17年度　平成17年4月～平成18年3月（資料整理）◎蔵本
平成18年度　平成18年4月～平成18年10月（資料整理）◎蔵本
　　平成18年11月～平成19年3月（資料整理）中村
平成19年度　平成19年7月～平成20年3月（資料整理、報告書作成）丸杉、平塚

井通遺跡の現地調査は平成16年10月をもって終了し、平成17年4月から静岡県周智郡森町一宮に所在する財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所森現地事務所において資料整理を開始した。

それに先立ち資料整理を効率よく進めることができるよう、現地事務所において調査記録･出土遺物等の基礎整理を進めた。現地における発掘調査によって作成された図面･写真等は番号等を付加した上で分類し、台帳を作成して保管した。また出土した遺物は水洗し、遺物1点ずつに遺跡名･取り上げ番号等の注記を行った。

平成18年3月までは、遺物の接合など基礎的な作業を中心に進めた。その後、平成18年4月から平成18年10月まで静岡県島田市旭町に所在する財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所島田整理事務所において分類･仕分け･接合･復原と遺物実測を行った。また、石器の実測･トレース委託、理化学的分析の契約を締結した。平成18年11月から平成19年3月は、現地で作成した調査図面の整理を中心に遺構図版の作成に努めた。さらに遺物実測を本格的に開始し、石器は実測･トレース委託、理化学的分析の成果品検査を行った。

平成19年7月に再開された報告書作成作業では、遺物実測、各種版組･トレース、原稿執筆、編集作業を行った。遺物写真撮影は静岡県静岡市駿河区谷田に所在する財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所本部において行った。遺物や図面･写真はそれぞれ台帳を作成し、必要に応じて検索することができるよう整理して収納した。報告書刊行とともに静岡県教育委員会文化課に資料の引き渡しを行い、作業を完了した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

井通遺跡が所在する静岡県引佐郡細江町（現静岡県浜松市北区細江町）は、静岡県西部の浜名湖北東岸に位置する。面積約34.18㎢、人口22,072人（平成17年12月現在）を擁し、浜松市北区役所が所在する浜名湖北岸の政治的中心都市となっている。細江町の年間平均気温は約15℃と温暖であり、隣接する浜名湖では１年を通してマリンスポーツが楽しまれる穏やかな気候の地域である。

町域の北には三岳山（423.8m）を中心とした引佐山地、南は緩やかに遠州灘に向けて傾斜している平坦な三方原台地があり、この二つに挟まれるように東西約10㎞、南北約２㎞の沖積平野が広がっている。この平野部は古くから水田が広がる地域であり、現代においても広い範囲で稲作が営まれている。平野部中心には東から西へと都田川が大きく蛇行しながら流れ、流域の広範囲に自然堤防を発達させている。周囲の地勢に大きな影響を与えてきた都田川は、引佐山地北部にある鳶巣山を源流とする全長約50㎞の二級河川である。天候によって流水量が大きく変化するため、かつて流域住民の生活は度々水害に脅かされていた。本遺跡調査の契機となったのは治水を目的とした河川改修事業であるが、同様の事業は戦前にも大規模に行われている。

都田川は、市街地東側において井伊谷川が合流し、浜名湖最奥部の支湖・引佐細江へと注ぐ。井通遺跡はこの合流地点において両川に挟まれるように立地している。

Fig.5　井通遺跡の立地環境（国土地理院発行１：50,000地形図「浜松」に加筆）

第２節　歴史的環境

縄文時代　浜松市都田町から細江町に広がる都田川の沖積平野の周囲に発達した河岸段丘面において、縄文時代中期から晩期に営まれた遺跡が見られる。三方原台地北縁部の段丘上には岡の平遺跡、宿名遺跡が存在する。岡の平遺跡では縄文時代晩期後半の資料が報告されている（栗原2005）。引佐山地南麓では石岡遺跡、北に位置する引佐町では井伊谷遺跡、栃窪南遺跡において縄文時代晩期の資料が確認されている。細江町の東に位置する浜松市都田町では、前平Ⅲ遺跡において縄文時代中期の環状集落跡が、前原Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ遺跡では縄文時代中～後期にかけての住居跡が検出されている（太田1989）。都田川流域の沖積平野最東部の段丘上に位置する川山遺跡では打製石斧・磨製石斧・石鏃等の石器類が出土している。（向坂・辰巳1991）。向山遺跡では樫王式に比定される土器棺墓が確認されている（漆畑1982）。こうした遺跡の存在は沖積平野周辺の段丘部が中心であり、平野部における生活の痕跡はほとんど確認されていない。

弥生時代　前期から中期にかけての都田川下流域では、わずかに土器の出土が報告されるのみであり、その全体像は明らかではない。中期以降になると集落遺跡が自然堤防上に成立し始め、後期には数多く展開する。都田川流域においては、川久保船渡遺跡・森遺跡・茂塚遺跡・提花遺跡・祝田遺跡・椿野遺跡などの集落跡が確認されている（辰巳1981b）。段丘面を中心にしていた生活圏が水稲耕作の拡大とともに都田川流域や平野部へと広がる様子が看取できる。椿野遺跡では方形周溝墓が検出された他、銅鏃の出土数においても際立った存在である。段丘面においては向山遺跡や岡の平遺跡において集落が展開し、向山遺跡では磨製石鏃、岡の平遺跡では遠賀川系土器が報告されている（漆畑1982、栗原2005）。

都田川流域は銅鐸・銅鏃などの青銅製品が数多く出土することで著名な地域である。静岡県西部は銅鐸分布圏の外縁部と指摘されており、これまでに約20点の銅鐸の出土が確認されている。さらに、破片・伝承まで含めると29点にのぼる。そのうち10点が前原・船渡・小野などの都田川流域であり、特に岡の平遺跡・宿名遺跡を入り口にもつ奥行き2.5kmほどの谷には、悪ヶ谷銅鐸・滝峯七曲り１号鐸・同２号鐸・不動平銅鐸・穴ノ谷銅鐸・滝峯才四郎谷銅鐸の６点の出土が確認されている。これらの銅鐸は、近畿式銅鐸４点・三遠式銅鐸が６点である。銅鏃は椿野遺跡の９点をはじめ、川久保船渡遺跡１点、岡の平遺跡２点の出土が報告されている（足立・佐野1985、鈴木1986、栗原ほか1993）。

古墳時代　古墳時代中期以降は既に概要を記しているので（丸杉ほか2007）、ここでは古墳時代前期の

Tab.2　都田川流域出土青銅製品一覧

銅　鐸　名	種　　別	図番
穴ノ谷銅鐸	突線鈕３式　近畿式　ⅡC	1
滝峯七曲り１号銅鐸	突線鈕３式　近畿式　ⅡA	2
不動平銅鐸	突線鈕３式　近畿式　ⅡA	3
滝峯才四郎谷銅鐸	突線鈕３式　近畿式　ⅡC	4
小野銅鐸	突線鈕３式　三遠式	5
悪ヶ谷銅鐸	突線鈕３式　三遠式	6
滝峯七曲り２号銅鐸	突線鈕３式　三遠式	7
前原銅鐸	突線鈕２式　三遠式	8
船渡１号銅鐸	突線鈕３式　三遠式	
船渡２号銅鐸	突線鈕３式　三遠式	

遺　跡　名	種　　別	図番
椿野遺跡	銅鏃	9
椿野遺跡	銅鏃	10
椿野遺跡	銅鏃	11
椿野遺跡	銅鏃	12
岡の平遺跡	銅鏃	13
岡の平遺跡	銅鏃	14
椿野遺跡	銅鏃（単孔銅鏃）	15
椿野遺跡	銅鏃（単孔銅鏃）	16
椿野遺跡	銅鏃（単孔銅鏃）	17
川久保船渡遺跡	銅鏃（単孔銅鏃）	18
椿野遺跡	銅鏃（多孔鏃）	19
椿野遺跡	銅鏃（多孔鏃）	20
椿野遺跡	銅鐶	21

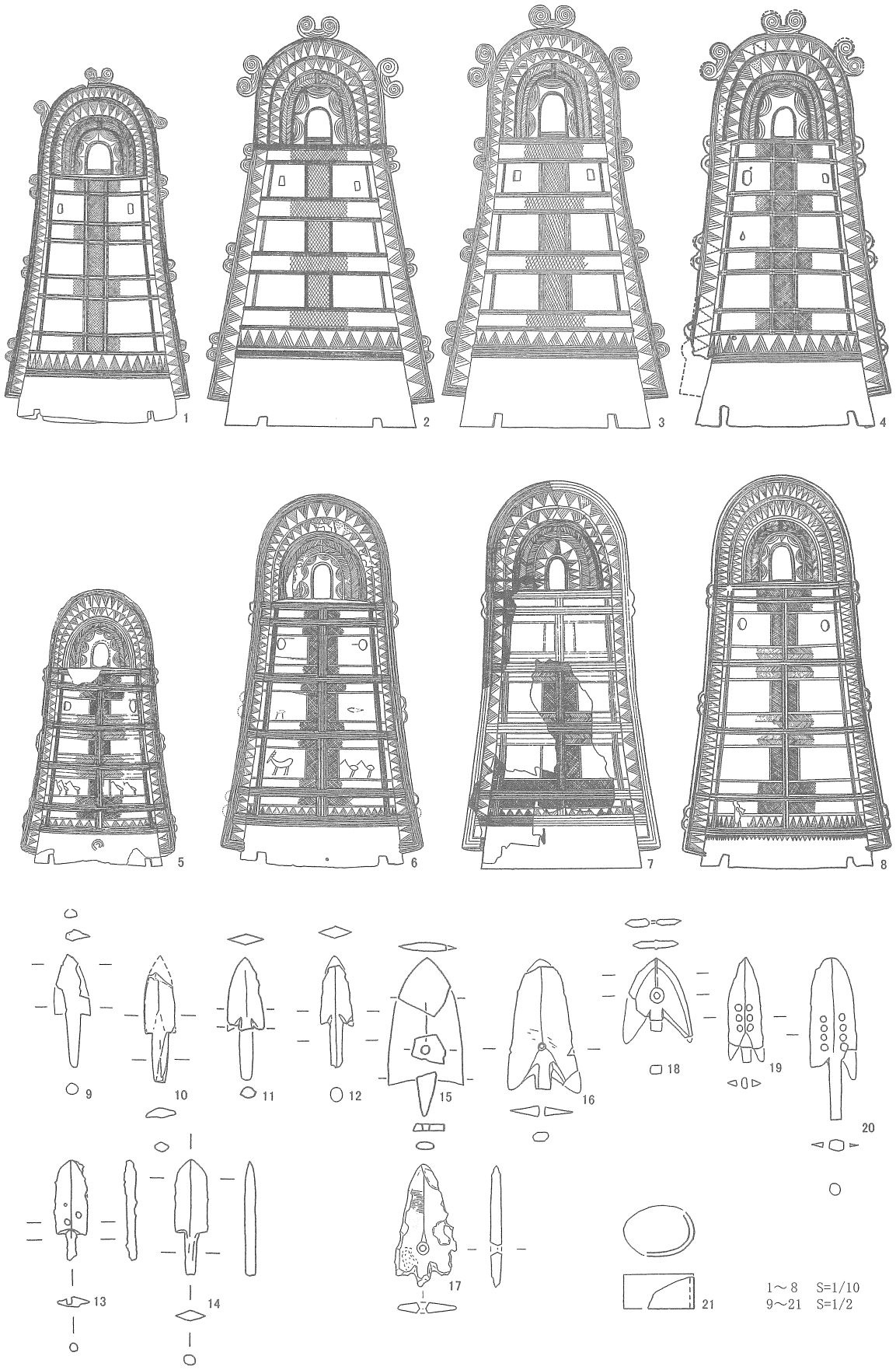
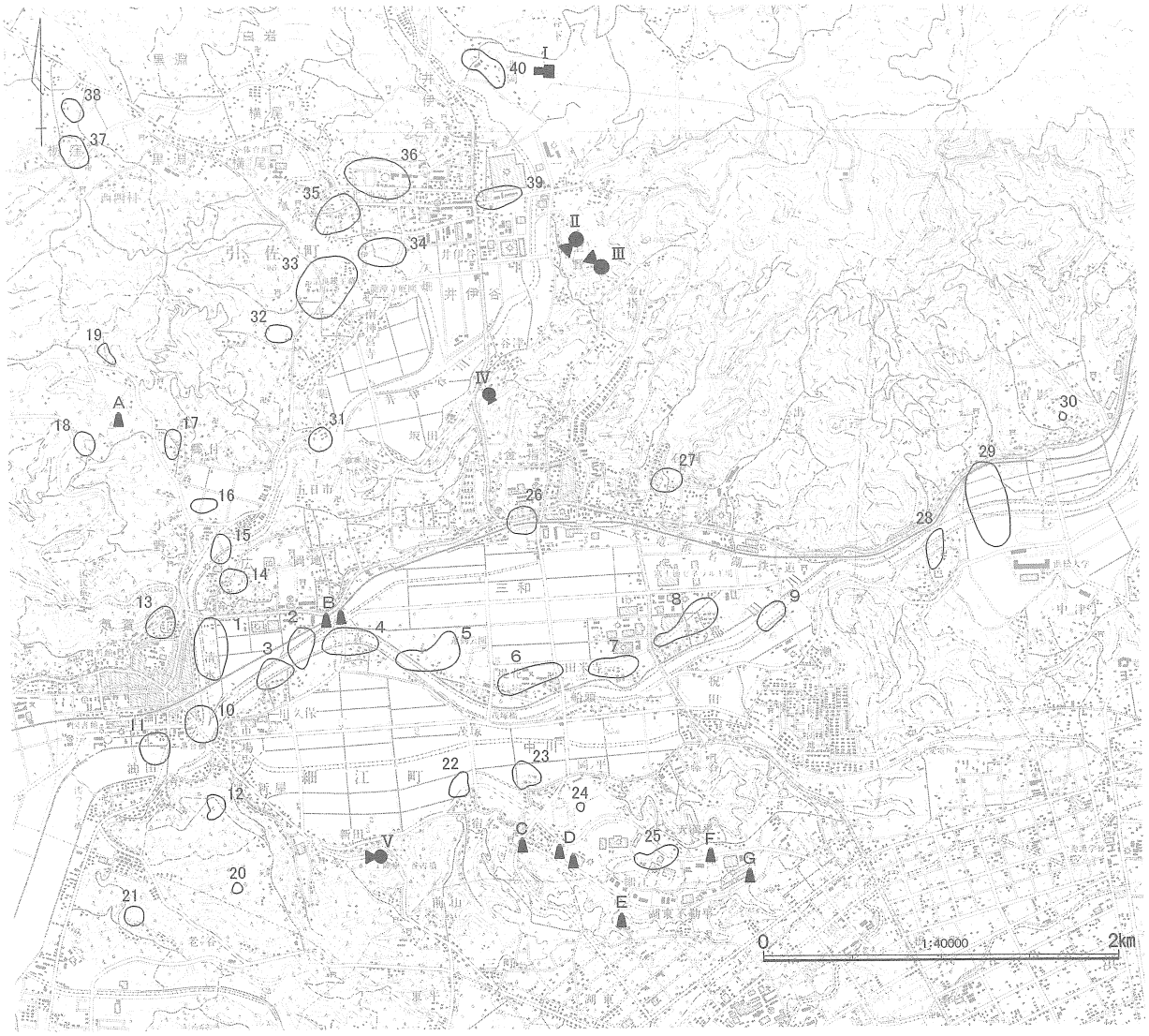


Fig.6　都田川流域出土青銅製品集成



1 井通遺跡
2 川久保船渡遺跡
3 川久保遺跡
4 森遺跡
5 茂塚遺跡
6 提花遺跡
7 田米寺遺跡
8 祝田遺跡
9 青木遺跡
10 市場遺跡
11 曳舟遺跡
12 猿平遺跡
13 上平遺跡
14 広岡遺跡
15 宇藤遺跡
16 永田遺跡
17 小野遺跡
18 小野山遺跡
19 堂道遺跡
20 老ヶ谷遺跡
21 西平遺跡
22 宿名遺跡
23 岡の平遺跡
24 障子ヶ谷遺跡
25 天満平遺跡
26 本屋敷遺跡
27 石岡遺跡
28 一色遺跡
29 椿野遺跡
30 片瀬遺跡
31 前岡遺跡
32 正楽寺南遺跡
33 正楽寺遺跡
34 矢畑遺跡
35 北神宮寺遺跡
36 井伊谷遺跡
37 栃窪南遺跡
38 栃窪北遺跡
39 大明神遺跡
40 北岡遺跡

A 小野銅鐸出土地
B 船渡銅鐸出土地
C 悪ヶ谷銅鐸出土地
D 滝峯七曲り銅鐸出土地
E 不動平銅鐸出土地
F 穴ノ谷銅鐸出土地
G 滝峯才四郎谷銅鐸出土地

Ⅰ 北岡大塚古墳
Ⅱ 馬場平古墳
Ⅲ 馬場平３号墳
Ⅳ 谷津古墳
Ⅴ 陣座ヶ谷古墳

Fig.7 井通遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院発行１：25,000地形図「伊平」「気賀」に加筆）

み記す。

この地域の古墳は井通遺跡の北に位置する井伊谷盆地周辺において、前期古墳の存在が確認されている。井伊谷盆地北東丘陵には前方後方墳である北岡大塚古墳が築造される（辰巳1981a・1996）。井伊谷盆地東側丘陵上には５世紀初頭の前方後円墳である馬場平古墳、５世紀前半頃の馬場平３号墳、さらに南に５世紀中葉頃の谷津古墳が継続的に築造されている（辰巳1983・1988）。都田川下流域では、井通遺跡南側の三方原台地上に陣座ヶ谷古墳が築造される。このほか岡の平遺跡・川久保船渡遺跡では同時期の集落が確認されている。しかし地域全体の様相は調査例が少なく明らかではない。

第３章　調査成果

第１節　調査概要

基本層序　井通遺跡の基本層序はすでに報告している（丸杉ほか2007）。ここでは古墳時代に関するこれまでの成果の他、本書に関連する事項・新たな知見を記す。

Ⅳ層は調査区全域に及ぶ堆積層であり、古墳時代中期～８世紀代にわたる遺物を包含している。調査においては構成粒子・色調などの差異からⅣａ～Ⅳｃ層に大きく分層し、それぞれ第３調査面の遺物包含層と判断した。

第３調査面であるＶａ層は、調査区中央部に向かい標高が高まる。Ｖａ層上面では各種遺構が顕著に確認でき、古墳時代中期～８世紀にかけて安定した微高地を形成していたことが窺える。Ｖｂ層は褐色粘質土であり、32～42グリッドに認められる。古墳時代前期～中期前半の遺物を含む。

Ⅵ層は暗褐灰色粘土であり調査区中央部を中心に認められ、Ⅵ層上面で遺構検出を行っている。Ⅵ層は粘性が非常に強く、Ｖａ層とは対照的に北側に向かい標高が緩やかに低くなることから、Ｖａ層とは異なる要因により形成されたものと捉えられる。

Ⅶ層は黒褐色粘質土で、構成粒子・遺物包含状況からⅦａ層とⅦｂ層に細分した。Ⅶａ層上面が第３調査面となり、遺構検出を行っている。Ⅶｂ層は粘性がやや強い傾向にある。

Ⅷ層はⅦ層より砂質が強く、色調が暗い黒褐色粘質土である。Ⅷ層上面で第３調査面の遺構検出を行っており、建物・土坑など諸遺構が確認される。

弥生時代の遺物を包含する土層は、北部では黒褐色粘質土のⅧ層・南部では褐灰色粘質土のⅨ層である。これらの下層のＸａ層上面で弥生時代～古墳時代前期の遺構検出を行っている。Ｘａ層は褐色粘質土であり、調査区北側から南側に向かい傾斜して堆積している。調査区中央部と44グリッド以南では、自然流路の影響で流出しているため、調査区北部・南部において確認される。調査区中央部では、青灰色粘土であるＸｂ層の上面で遺構検出を行っている。

Ⅸ層上層は褐色粘質土のＶｂ層であり、古墳時代前期の遺物包含層である。多数の土器が出土しており、第３調査面で出土した内行花文鏡片は時期的にＶｂ層に帰属するものと推定される。

遺跡の概要　本書で報告する遺構には弥生時代中期後葉を中心としたものと、少数ではあるが古墳時代前期の遺構がある。

弥生時代の遺構は、竪穴建物･土坑･溝･自然流路･土器棺墓などを検出した。遺構群は古墳時代中期以降と同様、調査区北部と南部に集中して検出されている。周辺地形とこれまでの調査成果から勘案すると、調査区中央部の自然流路を挟み、北部は遺跡北側の丘陵裾部・南部は都田川微高地上に展開したものとみられる。

竪穴建物は北部・南部ともほぼ全域にわたり検出されている。溝は北部のＳＤ4001･4002、南部のＳＤ4003がやや規模も大きいが、帰属時期･位置関係などから機能は判然としない。土器棺墓は北部から主に検出されている。遺構群が示す集落の形成時期は、弥生時代中期後葉を中心にしたものと捉えられる。

自然流路は調査区中央部と南部に確認されており、特に南部では弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路により、弥生時代中期の多くの遺構が失われている。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺物は、調査区中央部・南部から多量に出土している。これらは遺構に伴うものではなく、包含層出土遺物として捉えられている。都田川微高地上に立地する集落の中心域は、この時期に微高地上の高位面に移動したものと推定される。

第２節　遺　構

１　北部遺構群

（１）竪穴建物

ＳＨ4001

Ｃ・Ｄ－４・５グリッドに位置する竪穴建物であるが、建物西側は古墳時代中期以降の自然流路により失われている。平面形は隅丸長方形と推定でき、短軸は5.4mである。主柱穴は判然としない。壁溝は南側を除いて確認されており、中央部東側で焼土が検出されている。

ＳＨ4002・4003・4004

ＳＨ4002･4003･4004はＣ・Ｄ－４・５グリッドに位置している。遺構検出状況・古墳時代中期以降の自然流路やＳＤ4001により失われた部分も多いため、建物の詳細を知り得ない。ＳＨ4002・4003は壁溝が検出されたことにより平面形が隅丸長方形と推定でき、ＳＨ4003は短軸5.5mの規模である。柱穴は不明瞭であり、焼土が検出されているが、いずれの建物に帰属するか判然としない。ＳＨ4004はわずかに壁溝を確認したのみで、規模など竪穴建物にかかわる諸属性を提示することはできない。

ＳＨ4005

Ｄ－６グリッドに位置する竪穴建物であるが、建物東側は調査区外である。平面形は隅丸長方形を呈するとみられる。検出状況から判断して、建物の全体規模を明確に窺うことができない。炉の痕跡が中央部に分散して確認されている。

ＳＨ4006

Ｃ・Ｄ－５・６グリッドに位置する。壁溝の一部を検出したことによって存在を確認した竪穴建物である。平面形は隅丸長方形と推定されるが、全体の規模は判然としない。切り合い関係からＳＨ4005が新しいと判断できる。主柱穴・炉跡は不明瞭である。

ＳＨ4007

Ｃ・Ｄ－８・９グリッドに位置する長軸6.9m・短軸5.6mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。建物南東側はＳＤ4002により失われている。主柱穴は不明瞭であり、貼床は認められていない。建物の四周には壁溝が明瞭に巡る。炉の痕跡とみられる焼土が中央部西側２箇所に分散して確認されている。

ＳＨ4008・4009・4010

Ｃ・Ｄ－６・７グリッドに位置する竪穴建物である。ＳＨ4010→ＳＨ4009→ＳＨ4008の前後関係と判断したが、詳細な特徴を窺うことは難しい。

ＳＨ4008は長軸推定6.0m・短軸4.5mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。壁溝は全周しており、中央部には焼土が確認されている。ＳＨ4009は長軸8.6m、平面形は隅丸長方形と推定される竪穴建物である。南東部・南西部で壁溝が複数巡る部分があり、建替えがあった可能性がある。中央部西側には炉とみられる位置に礫が設置され、南東部には白色粘土が検出されている。ＳＨ4010は北半部が攪乱により失われているが、壁溝が検出されたために竪穴建物と認定されている。平面形は隅丸長方形と考えられ、長軸は5.6mである。いずれの建物も検出状況からは主柱穴が判然としない。

ＳＨ4011

Ｄ－３グリッドに位置するが、壁溝が確認されたのみで、規模など竪穴建物にかかわる諸属性を明確に提示することはできない。柱穴・焼土を検出しているが、建物に帰属するものであるか明確ではない。

ＳＨ4012

Ｃ－７グリッドに位置しており、壁溝の検出によって存在を確認できた竪穴建物である。建物の大半は古墳時代中期以降の自然流路により失われたものと捉えられている。壁溝が建物東側に遺存している

ものの、規模・柱穴など建物の諸属性は明確ではない。

ＳＨ4013

Ｃ・Ｄ－７・８グリッドに位置する長軸5.7m・短軸4.5mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。主柱穴は判然としない。壁溝は全周するが、一部で重複する部分があり、建替えがあった可能性がある。中央部西側で焼土と礫が検出されており、石置炉と考えられる。

ＳＨ4014・4015・4016

ＳＨ4016→ＳＨ4015→ＳＨ4014へと変遷したものとみられるが、検出状況から断定することは困難である。３軒とも西側を弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路により失われているため、規模の詳細を明確に提示できない。いずれも平面形が隅丸長方形を呈すると推定される。

ＳＨ4014は短軸4.4m、壁溝は南辺・東辺の一部に確認されている。ＳＨ4015は短軸5.2m、壁溝が二重に巡る部分があるため、建替えがあった可能性を指摘できる。建物中央部で焼土が広範囲に散在して検出されている。ＳＨ4016は短軸3.4m、壁溝は西辺を除き検出されている。いずれの建物も主柱穴を判断することができない。

（２）土　坑

ＳＫ4001

Ｄ－３グリッドに位置する土坑である。平面形は円形を呈するが、やや不定形である。規模は直径1.8m程である。遺物は土坑西側で散在して出土している。

ＳＫ4002

Ｄ－３グリッドに位置する平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。規模は長軸2.8m・短軸2.0mである。遺物は土坑北側を中心に散在して出土している。

ＳＫ4003

Ｃ－７グリッドに位置する土坑である。平面形は長楕円形を呈するが、北西部は遺構の輪郭を捉えきれていない可能性を指摘できる。規模は長軸1.8m・短軸1.5mである。

ＳＫ4004

Ｄ－８グリッドに位置する平面形が長楕円形を呈する土坑である。規模は長軸1.9m・短軸1.3mである。土坑東側を中心に遺物が多く出土している。

（３）溝

ＳＤ4001

Ｃ・Ｄ－４グリッドにおいて検出された溝である。検出された規模は長さ約8.0m・幅約2.0mである。溝の底面は比較的幅広いため、横断面は逆台形状を呈する。切り合い関係からは、ＳＨ4002・4004より新しいことが判明する。

ＳＤ4002

Ｃ～Ｅ－８・９グリッドに位置する溝である。西側は弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路により失われたものと捉えられており、検出できた規模は長さ約14.2m・幅約2.0mである。切り合い関係から、ＳＨ4007よりも新しいことが判明する。

（４）土器棺墓

ＳＸ4001

Ｄ－１・２グリッドに位置する。土坑は不整形な円形を呈し、規模は0.6m程である。頸部から肩部ま

での壺破片以外出土遺物がなく土坑も小規模であることから、別の性格である可能性が高い。

ＳＸ4002

Ｃ－７グリッドに位置する土器棺墓である。土坑は不整形な長楕円形を呈し、規模は長軸1.0m・短軸0.9m程である。土器棺の身は壺を使用しており、壺の口縁部側を北東に向け設置されていた。壺の胴部付近にやや扁平な石材が検出されている。

ＳＸ4003

Ｃ－７グリッドに位置している。土坑は不整形な円形であり、規模は直径0.7m程である。土器棺の身は壺を使用しており、やや南西方向に傾けて設置されたものと推定できる。

ＳＸ4004

Ｄ－８グリッドに位置する土器棺墓である。土坑は西側のみ検出できた。土器棺の身は甕を使用しており、口縁部側を東側に向けて設置されていた。土器棺の蓋も甕を使用している。

ＳＸ4005

Ｄ－９グリッドに位置している。土坑は不整形な円形を呈し、直径0.7m程である。口縁部側を南東に向け横位に設置されており、出土した壺を土器棺の身として使用したものと捉えられている。

２　南部遺構群

（１）竪穴建物

ＳＨ4017

Ｆ－33・34グリッドに位置する長軸6.7m・短軸4.4mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。床面には貼床は認められなかった。主柱穴と捉えられる位置に柱穴は検出されているが、やや不明瞭である。壁溝は南辺の一部を除き存在する。炉の痕跡は分散して確認されている。

ＳＨ4018

現地調査ではＳＨ4019と重複し、切り合い関係からＳＨ4018が新しいと判断している。しかし、炭化材検出状況・遺物出土状況・出土土器から不自然な点を否定できないが、ここでは現地調査段階の認識のまま報告する。

Ｆ・Ｇ－33・34グリッドに位置する長軸6.7m・短軸5.4mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。床面に貼床は認められず、柱穴も不明瞭である。建物北西部の柱穴からは柱根が検出されたが、対応する柱穴は判然としない。壁溝は西辺の一部を除き存在する。中央やや東側で炉縁に礫が検出されており、石置炉と捉えられる。

ＳＨ4019

Ｇ－34グリッドに位置する長軸5.2m・短軸3.6mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。主柱穴は判然としない。中央やや西側で石置炉が検出されている。

前述したように、本来はＳＨ4019がＳＨ4018よりも新しいと判断できる。

ＳＨ4020

Ｆ・Ｇ－34グリッドに位置する長軸5.3m・短軸4.2mのやや不整形な隅丸長方形を呈する竪穴建物である。柱穴は不明瞭であり、壁溝は検出されていない。中央やや西側で焼土が検出されている。

ＳＨ4021

現地調査における所見ではＧ－33・34グリッドに位置し、柱穴・壁溝の一部を検出したとされている。しかし、竪穴建物にかかわる諸属性・切り合い関係を明確に提示することに躊躇せざるを得ない。

ＳＨ4022

Ｆ－34・35グリッドに位置し、建物主軸は南北方向を採用するものと捉えられている。柱穴は不明瞭

であり、壁溝は検出されていない。焼土が建物北側の壁際で検出されているが、ＳＨ4022に伴うものかは判然としない。

ＳＨ4023・4024・4025

Ｆ・Ｇ－34・35グリッドに位置している。切り合い関係からＳＨ4025→ＳＨ4024→ＳＨ4023へと変遷したものと判断したが、対応関係を明確に提示できる調査資料は得られていない。

ＳＨ4023は東半部分のみが検出されたものと推定されている。ＳＨ4023に帰属する柱穴・焼土は明確に捉えられない。壁溝が複数検出されており、建替えが行われたとも考えられる。ＳＨ4024は長軸推定7.0m･短軸5.6mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。主柱穴は判然とせず、炉の痕跡も確認されていない。建物四周には壁溝が明瞭に巡る。ＳＨ4025は壁溝の検出によって確認できた竪穴建物である。この他、壁溝とみられる遺構を検出しているが、現地調査段階で得られた成果からは建物の存在を復原できない。

ＳＨ4026

Ｇ－34・35グリッドに位置しており、東半は調査区外である。やや不整形な竪穴建物で、明確な柱穴･炉跡は検出されていない。南辺の一部に壁溝が確認されている。

ＳＨ4027

Ｆ・Ｇ－35・36グリッドに位置する長軸6.7m・短軸4.9mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。主柱穴は判然としない。壁溝は東辺で一部途切れる箇所が認められている。建物東辺では壁溝が二重に巡る部分が検出されている。炉の痕跡は中央部に分散して確認されている。

建物の外縁、及び内部にも壁溝が検出されており、別の竪穴建物が存在する可能性がある。

ＳＨ4028・4029

Ｆ－35・36グリッドに位置する竪穴建物と捉えられており、西半は調査区外である。検出状況から、ＳＨ4028はＳＨ4027よりも古いものと考えられている。ＳＨ4028からは壁溝が複数検出されているが、建替えの可能性、若しくは複数の建物の存在を峻別できないため、規模等を判断できない。

ＳＨ4029もわずかに壁溝を確認したのみで、諸属性を明確に提示できない。

ＳＨ4030

Ｇ－35グリッドに位置する竪穴建物とみられているが、わずかに壁溝を確認したのみで、規模など竪穴建物にかかわる諸属性を明確に提示することはできない。壁溝は複数検出されているが、建物との対応関係・切り合い関係などは捉えきれていない。柱穴は不明瞭であり、炉の痕跡も確認されていない。

ＳＨ4031

Ｇ・Ｈ－36グリッドに位置している。建物西半のみ検出されており、短軸4.9mの規模である。柱穴は判然とせず、焼土も検出されていない。壁溝は北辺中央部が途切れているが、明瞭に確認されている。

ＳＨ4032・4033

Ｆ・Ｇ－36・37グリッドに位置しており、２軒とも隅丸長方形を呈するものと推定されている。壁溝の検出によって存在が確認された竪穴建物であるため、建物の諸属性を明確に示すのは困難である。ＳＨ4032・4033ともに柱穴は不明瞭である。ＳＨ4032では焼土が検出されている。

ＳＨ4034・4035・4036

Ｇ・Ｈ－37・38グリッドに位置する竪穴建物と推定されているが、調査結果から建物の規模等を正確に報告することは躊躇せざるを得ない。壁溝の形状から推測すると、３軒とも隅丸長方形を呈するものと考えられる。柱穴はいずれも不明瞭である。

ＳＨ4037

Ｇ－38グリッドに位置する長軸7.3m・短軸4.4mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。床面には貼床

は認められなかった。主柱穴はやや不揃いであり、規模も他の柱穴との差は見出し難い。壁溝は全周している。焼土が建物内で散在して検出されている。

ＳＨ4038

Ｇ－37・38グリッドに位置するが、わずかに壁溝とみられる遺構と焼土を確認したのみで建物と認定された遺構である。ここでは竪穴建物として報告するが、確実に諸属性を提示できない。

ＳＨ4039

Ｇ・Ｈ－38・39グリッドに位置する長軸5.3m・短軸2.8mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。柱穴は明瞭ではない。壁溝は北･東･西辺の一部に検出されており、焼土は中央北側で確認されている。

ＳＨ4040

明瞭な壁溝の検出により存在が推定されたＧ－39グリッドに位置する竪穴建物である。しかし、柱穴は不明瞭であり、焼土も検出されていない。

（２）土　坑

ＳＫ4005

Ｆ－32・33グリッドに位置する平面形が長楕円形を呈する土坑である。規模は長軸2.7m・短軸1.0mである。遺物は土坑北側を中心に出土している。

ＳＫ4006

Ｇ－38グリッドに位置する平面形がやや不定形な土坑である。検出された規模は長軸3.0m・短軸1.6mである。

ＳＫ4007

Ｇ－38・39グリッドに位置する平面形が長楕円形を呈する土坑である。検出された規模は長軸2.9m・短軸1.5mである。遺物は土坑内から散在して出土している。

ＳＫ4008

Ｈ－39グリッドに位置する平面形がやや不定形な土坑である。検出された規模は長軸1.6m・短軸1.2mである。土坑内から礫がやや多く出土している。

（３）溝

ＳＤ4003

Ｆ・Ｇ－35・36グリッドに位置する溝である。西側は弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路により失われたものと捉えられている。検出できた規模は長さ約15.8m･幅約1.7mである。出土土器として図示できる資料はなく、時期認定に明確な根拠をもちえない。出土した土器細片と周辺遺構から判断して、弥生時代中期後葉でも新しい時期と考えたい。

３　自然流路

ＳＲ4001

調査区中央部、及び南部において自然流路を検出したが、本来は同一の可能性があるため、ＳR4001として一括した。断片的な調査資料からは遺構の詳細な特徴を捉えきれないが、大きく蛇行する流路であることから現在の遺跡西側を流れる井伊谷川と考えられる。流路は浸食作用を受けて形成され、氾濫による埋没や再浸食・新たな流路形成を繰り返していたと推定される。出土土器として図示できる資料はないが、弥生時代中期～古墳時代前期頃の土器が出土している。

第３節　遺　物

１　土　器

出土した土器は弥生時代中期が中心である。以下からは集落変遷の指標となる主要な遺構の出土土器に重点をおいて報告する。出土遺物が少なく、帰属時期を明確に捉えられない遺構については割愛した。

北部竪穴建物出土土器　ＳＨ4001からは１の広口壺、２の台付甕の脚台部が出土している。３の甕はＳＨ4007、４の台付甕脚台部と５の甕はＳＨ4009から出土している。ＳＨ4013からは６の受口壺、７の甕が出土している。８は口縁部が突帯状となる甕であり、ＳＨ4015より出土している。ＳＨ4016からは９の広口壺、10の鉢が出土している。10は口縁部に２個一対の浮文が遺存部分では５箇所、復原すると６箇所付すものと推定される。

ＳＨ4018出土土器　ＳＨ4018からは11～21に図示した土器が出土している。11～19は壺であり、11は受口細頸壺、12は受口壺である。13～18は広口壺と捉えられ、口縁端部に面をもつものが多い。19の細頸壺は波状文を縦方向に垂下させて施文されている。20は口縁端部に面をもち、刻目が施される甕である。21は無頸壺に類似するが、器形から鉢と推定される。

ＳＨ4019出土土器　ＳＨ4019からは22～34に示した土器が出土している。22は広口壺、23は口縁部から頸部が欠損しているが細頸壺とみられる。24の細頸壺は口縁部が浅い受口状となる。25～27の甕は胴部の張りが弱く、口縁部が緩やかに開いているため台付甕の可能性がある。28は台付甕の脚台部である。29は口縁端部に面をもち、刻目が施される甕である。30・31は体部が内彎して開き口縁部が緩やかに外反する高杯である。32は胴部が張り、口縁部が短く外反する鉢である。33・34も鉢であるが口縁部が外反する33と、直線的に開く34がある。

ＳＨ4020出土土器　ＳＨ4020からは35～45の土器が出土している。35は広口壺、36は細頸壺である。37・38はいずれも広口壺の胴部・底部と推定される。39～45は甕である。口縁部の形態により、突帯状の突出をもつ39～41・44・45、外下方に拡張される42、端面をもつ43に分類できる。

ＳＨ4026出土土器　46～49がＳＨ4026から出土した土器である。46は広口壺、47・48は細頸壺である。49の甕は、口縁部が突帯状に突出している。

ＳＨ4037出土土器　ＳＨ4037からは53～64に図示した土器が出土している。53は細頸壺、54･55は広口壺である。56･57の壺は腰部がやや張る形態である。58は壺底部であり、56･57と同様に腰部が張る形態と推定される。59は比較的高い脚台部をもつ台付甕である。60～64はいずれも口縁部が緩やかに外反し、端部に刻目を施す甕であるが、台付甕が含まれる可能性がある。

南部竪穴建物出土土器　50はＳＨ4031、51･52はＳＨ4032から出土している。いずれも甕であり、口縁部には突帯状に突出する50、外下方に拡張される51、丸く収める52がみられる。

ＳＫ4006出土土器　ＳＫ4006からの出土土器は73～85である。73～76は壺肩部片、77は細頸壺、78～81は広口壺である。82は口縁部が受口状となり、外面に棒状浮文・端部に刺突を施した広口壺である。83は口縁部を丸く収め、内面に断続的な短い横線文を施す甕である。84･85の甕・口縁部は、端部が外下方に大きく拡張されている。

土坑出土土器　ＳＫ4002から65の広口壺、66･67の甕及び68の台付甕脚台部が出土している。69･70はＳＫ4004から出土した壺、71･72はＳＫ4005から出土した甕である。71･72はいずれも口縁部が突帯状に突出する。86はＳＫ4008、87はＳＫ4007から出土した甕である。88～90はＳＫ4009から出土した土器であり、88は広口壺、89･90は口縁部が丸く収められ刻目を施す甕である。91はＳＫ4011、92はＳＫ4012から出土した受口状口縁となる壺である。92は口縁部内面に有刻棒状浮文・端面に刺突を施しており、屈

曲部の外面が頸部へとのびるため、屈曲部の内面が突帯状に残る特異な形態である。93はＳＫ4015から出土した広口壺、94はＳＫ4010から出土した長い頸部が特徴の細頸壺である。95はＳＫ4014から出土しており、腰部が強く張り算盤玉状を呈していることから細頸壺と考えられる。96はＳＫ4013から出土した鉢であるが、口縁部に複合鋸歯文を施し、相対する位置に２個一対の浮文が付くと推定される。片口となっており、これに対する位置の浮文には横方向の穿孔がみられる。

ＳＤ4002出土土器　ＳＤ4002から出土した土器は97～100に示した。97は腰部が強く張り算盤玉状を呈する壺である。文様は区画沈線とやや乱れた斜格子文が施されている。98～100の甕はいずれも口縁部が丸く収められ、刻目を施されている。

ＳＸ4001～4005土器棺　101はＳＸ4001の単純口縁の細頸壺である。文様は施されておらず、器面にはハケ調整が顕著に認められる。調査段階では土器棺と捉えられているが、積極的に評価できない。

102はＳＸ4002における土器棺の身として使用された壺である。口縁部は受口状となり、端部内面には押圧を加え、屈折部には押引を施す。頸部には３本一単位のヘラ縦線文と区画沈線、下位に連弧文を施す。肩部には櫛横線文に山形文が施されている。山形文中央部に縦位の櫛波状文が１箇所確認される。

103はＳＸ4003における土器棺の身として使用された壺である。口縁部は欠損しているが、腰部が強く張る形態であることから広口壺と推定される。肩部には無文帯を挟んで櫛横線文と櫛縦線文の文様帯が施されている。文様帯には区画沈線が認められない。

104はＳＸ4004の土器棺として使用されたと捉えられる甕である。

105はＳＸ4005の土器棺に使用されたとされる細頸壺である。頸部には羽状文を挟んでやや幅広の沈線を施す。体部には条痕調整が観察できる。形態・文様構成などから嶺田式の細頸壺と判断できる。

包含層出土土器　106～108は弥生時代中期の包含層出土土器を図示した。106は口縁端部に凹線文、体部には廉状文･波状文･直線文が施された細頸壺である。107は口縁端部に斜格子文が施された受口壺、108は台付壺の脚台部である。

109～126は調査区北部・中央部の包含層出土土器である。

109は口縁部がやや内彎傾向を示す広口壺である。110は柳ヶ坪型壺、111･112は直口壺である。112は内彎傾向が強い短い口縁部をもち、瓢壺の系統を引くものとみられる。

113・114は浅い椀型を呈する杯部をもつ小型高杯、115は杯部に弱い稜線をもつ有稜高杯である。116～119は小型器台である。116は受部と脚部が貫通しない、117～119は貫通する小型の器台である。受部は屈曲して立ち上がる116と漏斗状の118・119がみられ、特に119は受部が深い形態である。120～123は鉢である。いずれも扁平な形態であり、底部は丸底である。口縁部には屈曲して大きく開く120と口縁部が２段に屈曲する121～123がみられるが、近畿地方における特徴に比べ屈曲は小さい。

124～126は甕である。124･125はＳ字状に屈曲する口縁部をもち、脚台部を有するＳ字甕である。126は外反する口縁部に体部外面に右上がりのタタキが施されており、形態・調整の諸特徴から畿内の影響を強く受けて成立した甕と捉えられる。搬入品の可能性があるが、製作地を限定することは困難である。

127～140は調査区南部包含層出土土器である。出土土器の殆どは褐色粘質土のＶｂ層であり、古墳時代前期の遺物包含層と捉えられる。

127は二重口縁壺、128は広口壺であるが口縁端部を折り返している。

129～131は小型高杯、132は柱状をなす脚部が屈折して外反する屈折脚高杯である。133は受部と脚部が貫通する小型器台、134は内彎する受部をもち脚部が直線的に広がる小型器台である。135～137は鉢である。135・136は平底の鉢、137は扁平な形態であり口縁部は屈曲して大きく開く。

138～140は甕である。138はく字状に屈曲する単純口縁の甕であり、肩部には沈線が施されているが、表現内容は判然としない。139は形態的特徴から北陸系の甕と判断できる。140はＳ字甕である。

141は大型の広口壺である。口縁端部は折り返し、外面の面取りが明瞭である。球形の体部には縦方向のミガキが施される。遺存した部分では口縁端部･口縁部･肩部に焼成前に穿孔が確認できるが、配置は判然としない。色調は浅黄橙色であり、胎土に細かい白色粒子が多量に含まれる。これら諸属性は駿河地域に特徴的であり、一般的に「大廓式」と呼称されるが検討の余地がある。なお、141は調査区北部における古墳時代中期以降の各層位に混入していたが、時期的に帰属する本書で報告することとした。

２　石　器

打製石斧（142～155）打製石斧は142がＳＤ4002から出土した以外は、全て包含層より出土している。石材は142が角閃岩、143･153がホルンフェルス以外は緑色岩を使用している。大型の154･155は短冊形の形態をしており、石製耕作具としての石鍬と捉えられる可能性がある。

打製石鏃（156～206）156～159は凹基無茎鏃。156は黒曜石、157･158は下呂石、159はチャートを使用している。出土した石鏃の殆どは有茎式であり、包含層から出土したものが多い。石材はチャートと安山岩が多く、黒曜石･下呂石･凝灰岩･流紋岩などが少数ではあるが使用されている。194･195はＳＨ4018より出土しており、最大長・最大幅の比率は近似した数値を示す安山岩製の石鏃である。ＳＨ4018からは安山岩製の192も出土している。

196～206は整形段階の石鏃未製品と考えられ、使用される石材は156～195と同様の傾向を示す。しかし、206は別の機能・用途の可能性がある。

スクレイパー（207～209）207･209は包含層より出土した緑色片岩製、208はＳＫ4016より出土し、石材には凝灰岩を使用している。208は明瞭な刃部を有するが、207･209は若干の調整を加えたのみである。

石　錐（210～212）３点を図示したが欠損部分が多く、形態的にもやや疑問がある。石材には210･211がチャート、212が凝灰岩を使用している。

石　匙（213）頭部につまみ状の形態を有するが、突起は顕著ではない。ＳＨ4018から出土しており、石材には流紋岩を使用している。

磨製剥片石器（214）包含層より出土しており、緑色岩製である。静岡県内では大山Ｉ遺跡（舞阪町1995）、鶴松遺跡（袋井市1993）などで類例がある。顕微鏡観察の結果では、刃部以外に強い光沢が認められる。機能は判然としないが、何らかの植物を対象とした収穫具（贄1995）・砥石（山田ほか1992）である可能性が指摘されている。

太型蛤刃石斧（215･216）215･216は変玄武岩製。215はＳＨ4039、216は包含層から出土している。ともに破損品であり、刃部周辺部分が出土している。

柱状片刃石斧（217～219）いずれも小型の柱状片刃石斧であり、包含層より出土している。

扁平片刃石斧（220～225）220は包含層、221はＳＨ4009より出土した。欠損しているが、形状から扁平片刃石斧とみられる。222はＳＨ4005、223は包含層より出土した緑色片岩製扁平片刃石斧である。224は包含層、225はＳＨ4008より出土した。石材は224が角閃岩、225が緑色片岩を使用している。

磨製石鏃（226～233）226～228は無茎式磨製石鏃。226はＳＫ4013から出土したホルンフェルス製平基式磨製石鏃。穿孔を片面で貫通しないままである。227･228は包含層より出土した凹基式の有孔磨製石鏃。黒色片岩製であり、穿孔は両側から施されている。228は基部の抉入が発達している。

229･230は有茎式磨製石鏃。229はＳＨ4016より出土した凸基式磨製石鏃。石材は黒色片岩を使用している。230は緑色岩製である。

231は流紋岩製であるが破損が著しい。232･233の石材はともに黒色片岩を使用しており、未製品の可能性がある。

磨製紡錘車（234）緑色片岩製であり、包含層より出土している。直径は48㎜、厚さは７㎜の扁平な形

状を呈し、穿孔部は直径11㎜である。

勾　玉（235・236）235はＳＫ4017、236は包含層より出土したが、混入したものと捉えられる。

敲　石（237・238）ともにＳＫ4004より出土しており、石材は凝灰岩質砂岩を使用している。

砥　石（239～244）石材は239･240･244が凝灰岩質砂岩であり、泥質凝灰岩（241）・緑色岩（242）･砂岩（243）が使用されている。

3　土製品

台盤状土製品　台盤状土製品については、森泰通氏の分類案（森1996・1998）に従い報告する。

245～256は森分類・Ａ類であり、形状は厚い円盤状である。245はＳＨ4018、246～249はＳＨ4020、250はＳＨ4037、251･252はＳＫ4006から出土している。253～256は調査区南部包含層から出土している。

257～265は森分類･Ｃ類と捉えられ、脚状を呈するものである。しかし、脚部の器壁が厚く低い257～259の資料も確認できる。これら一群は森分類・Ｂ類の片面をやや脚状に意識したものと、森分類･Ｃ類との過渡的状況を示すものと考えられる。257はＳＨ4006、258はＳＨ4020、259はＳＫ4006、260はＳＨ4034より出土している。261～265は調査区南部包含層から出土しており、ここで図示しえなかった資料も含め台盤状土製品は調査区南部に分布が集中している。

土製紡錘車　266･267は土製紡錘車である。266は大部分が欠損しているが、267は貫通孔が一部確認できる。266はＳＤ4003、267は調査区南部包含層より出土している。

鳥形土器　268は調査区北部包含層から出土した鳥形土器である。土器上部に鳥の頭部を表現しており、嘴は粘土塊の貼付・目は竹管状の工具で表現している。胴部以下を完全に欠損するものの口縁部の形状から細頸壺と考えられる。壺頸部には櫛描横線文に刺突列点文が施されている。

帰属時期は周辺の検出遺構･出土遺物から弥生時代中期後葉と推定される。愛知県朝日遺跡では、鳥の頭部を除く胴・尾部が表現された鳥形土器が出土している。当資料の機能・性格、器形自体が鳥形である土器との差異については判然としない。

Tab.3　出土石器観察表

番号	遺構名	器　種	石　材	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
142	SD4002	打製石斧	角閃岩	(7.90)	5.80	1.40	98.9	
143	包含層（北部）	打製石斧	ホルンフェルス	8.75	4.30	0.95	39.6	
144	包含層（北部）	打製石斧	緑色岩	9.20	4.70	1.20	75.5	
145	包含層（南部）	打製石斧	緑色岩	(9.40)	5.60	0.95	60.7	
146	包含層（北部）	打製石斧	緑色岩	9.60	4.70	1.30	70.4	
147	包含層（北部）	打製石斧	緑色岩	10.30	4.50	1.45	107.5	
148	包含層（北部）	打製石斧	緑色岩	10.60	4.90	1.85	125.1	
149	包含層（北部）	打製石斧	緑色岩	10.60	4.40	2.30	146.0	
150	包含層（南部）	打製石斧	緑色岩	11.00	5.40	1.80	143.4	
151	包含層（北部）	打製石斧	緑色岩	11.50	4.10	1.40	85.3	
152	包含層（北部）	打製石斧	緑色岩	12.10	4.60	1.50	100.4	
153	包含層（北部）	打製石斧	ホルンフェルス	(13.30)	5.60	1.70	153.3	
154	包含層（北部）	石鍬	緑色岩	20.75	5.70	3.00	431.9	
155	包含層（南部）	石鍬	緑色岩	19.40	7.65	2.50	547.9	
156	包含層（北部）	石鏃	黒曜石	1.60	1.38	0.27	0.4	
157	包含層（中央部）	石鏃	下呂石	1.90	1.30	0.40	0.7	
158	包含層（北部）	石鏃	下呂石	2.20	2.05	0.50	1.3	
159	包含層（北部）	石鏃	チャート	2.00	1.20	0.45	1.1	
160	SH4001	石鏃	チャート	1.85	1.48	0.42	1.0	
161	SH4013	石鏃	チャート	(1.90)	1.75	0.35	1.2	
162	包含層（北部）	石鏃	チャート	2.00	1.68	0.45	0.8	
163	包含層（北部）	石鏃	下呂石	(2.03)	1.32	0.40	1.0	
164	SK4002	石鏃	安山岩	(2.05)	1.50	0.38	1.0	
165	SK4001	石鏃	安山岩	(2.05)	1.78	0.55	1.9	
166	包含層（北部）	石鏃	チャート	2.10	1.40	0.55	1.3	
167	包含層（北部）	石鏃	チャート	(2.20)	1.70	0.73	2.0	
168	SH4006	石鏃	チャート	2.20	1.80	0.60	1.9	
169	包含層（北部）	石鏃	チャート	2.55	1.50	0.50	1.5	
170	SH4007	石鏃	チャート	(2.58)	1.65	0.60	2.0	
171	SH4003	石鏃	チャート	2.80	1.30	0.50	1.5	
172	包含層（北部）	石鏃	溶結凝灰岩	2.85	1.40	0.55	1.8	
173	包含層（北部）	石鏃	溶結凝灰岩	2.90	1.70	0.50	1.5	
174	SD4003	石鏃	安山岩	(3.00)	1.65	0.60	1.8	
175	包含層（南部）	石鏃	流紋岩	(3.00)	1.90	0.68	2.6	
176	包含層（北部）	石鏃	チャート	(3.02)	1.50	0.60	2.2	
177	SH4001	石鏃	チャート	3.05	1.45	0.60	1.9	
178	包含層（北部）	石鏃	チャート	3.10	1.55	0.70	2.4	
179	包含層（南部）	石鏃	安山岩	3.20	1.30	0.55	2.1	
180	SK4002	石鏃	安山岩	(3.20)	1.28	0.50	2.2	
181	包含層（北部）	石鏃	チャート	3.35	2.18	0.70	4.9	未製品？
182	包含層（北部）	石鏃	チャート	3.55	1.62	0.70	3.6	
183	SH4037	石鏃	安山岩	3.57	1.70	0.53	2.9	
184	包含層（北部）	石鏃	緑色片岩	3.78	1.84	0.50	3.5	未製品？
185	包含層（南部）	石鏃	溶結凝灰岩	(3.92)	1.75	0.62	3.2	
186	SD4003	石鏃	溶結凝灰岩	(3.95)	1.70	0.72	4.5	
187	SH4020	石鏃	安山岩	(3.95)	1.78	0.78	4.6	
188	包含層（北部）	石鏃	安山岩	4.72	2.00	0.60	4.5	
189	SK4004	石鏃	安山岩	4.85	1.65	0.70	4.3	
190	包含層（南部）	石鏃	安山岩	4.50	1.26	0.60	2.7	
191	包含層（北部）	石鏃	チャート	5.00	1.62	0.95	5.4	
192	SH4018	石鏃	安山岩	5.02	1.80	0.72	5.1	
193	SK4001	石鏃	溶結凝灰岩	5.22	1.70	0.65	3.7	
194	SH4018	石鏃	安山岩	(7.10)	1.62	0.55	5.9	
195	SH4018	石鏃	安山岩	7.32	1.58	0.48	5.6	
196	包含層（北部）	石鏃	溶結凝灰岩	1.73	1.22	0.38	0.8	未製品？

番号	遺構名	器　種	石　材	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
197	包含層（北部）	石鏃	黒曜石？	2.21	1.59	0.36	1.2	未製品？
198	SK4002	石鏃	溶結凝灰岩	2.38	1.38	0.55	1.7	未製品？
199	SH4007	石鏃	安山岩	(2.60)	2.40	0.45	2.6	未製品？
200	SK4004	石鏃	チャート	2.68	2.05	0.80	4.5	未製品？
201	包含層（北部）	石鏃	チャート	2.94	1.96	0.61	3.1	未製品？
202	SH4001	石鏃	安山岩	3.05	1.80	0.45	2.5	未製品？
203	SK4002	石鏃	チャート	3.25	2.00	0.80	5.2	未製品？
204	包含層（北部）	石鏃	安山岩	4.04	1.87	0.64	3.2	未製品？
205	包含層（北部）	石鏃	安山岩	4.38	2.00	0.94	7.2	未製品？
206	SH4037	石鏃	ホルンフェルス	6.97	2.45	0.80	12.9	未製品？
207	包含層（北部）	スクレイパー	緑色片岩	5.00	10.90	1.20	57.1	
208	SK4016	スクレイパー	溶結凝灰岩	4.70	8.20	1.70	41.0	
209	包含層（中央部）	スクレイパー	緑色片岩	4.65	12.24	0.55	43.5	
210	包含層（北部）	石錐	チャート	2.58	0.73	0.50	0.8	
211	SH4001	石錐	チャート	2.97	1.03	0.65	2.1	
212	SK4004	石錐	溶結凝灰岩	3.01	0.91	0.54	1.3	
213	SH4018	石匙	流紋岩	7.10	3.90	2.00	32.5	
214	包含層（南部）	磨製剥片石器	緑色岩	7.85	12.55	1.45	223.5	
215	SH4039	太型蛤刃石斧	変玄武岩	(10.40)	6.70	3.80	487.0	
216	包含層（南部）	太型蛤刃石斧	変玄武岩	11.50	6.00	3.40	440.6	
217	包含層（南部）	柱状片刃石斧	ハイアロクラスタイト	3.50	1.20	0.90	7.8	
218	包含層（中央部）	柱状片刃石斧	緑色岩	4.70	1.20	1.40	12.7	
219	包含層（北部）	柱状片刃石斧	黒色片岩	5.50	1.60	0.90	15.8	
220	包含層（南部）	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	(2.40)	1.70	3.40	3.4	
221	SH4009	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	(2.20)	3.20	0.80	9.9	
222	SH4005	扁平片刃石斧	緑色岩	4.00	2.70	0.90	14.7	
223	包含層（北部）	扁平片刃石斧	緑色片岩	(4.90)	4.40	1.10	38.0	
224	包含層（北部）	扁平片刃石斧	角閃岩	11.30	5.20	2.30	234.6	
225	SH4008	扁平片刃石斧	緑色片岩	11.60	5.20	2.10	231.6	
226	SK4013	磨製石鏃	ホルンフェルス	(4.70)	2.00	0.45	5.0	
227	包含層（南部）	有孔磨製石鏃	黒色片岩	4.67	2.40	0.30	4.2	
228	包含層（南部）	有孔磨製石鏃	黒色片岩	(3.61)	2.40	0.30	2.6	
229	SH4016	磨製石鏃	黒色片岩	5.75	2.28	0.42	6.4	
230	包含層（中央部）	磨製石鏃	緑色岩	(5.15)	1.75	0.60	6.0	
231	SH4017	磨製石鏃	流紋岩	(5.35)	0.74	0.40	2.0	
232	包含層（北部）	磨製石鏃	黒色片岩	(3.20)	1.96	0.32	2.3	未製品？
233	包含層（南部）	磨製石鏃	黒色片岩	(4.60)	3.30	0.60	12.9	未製品？
234	包含層（南部）	紡錘車	緑色片岩	4.80	4.60	0.70	23.4	
235	SK4017	勾玉	変玄武岩	3.20	2.10	1.1	7.5	
236	包含層（南部）	勾玉	翡翠	1.00	0.60	0.3	0.4	
237	SK4004	敲石	凝灰岩質砂岩	12.30	6.80	5.90	596.1	
238	SK4004	敲石	凝灰岩質砂岩	13.60	5.90	4.80	596.1	
239	包含層（南部）	砥石	凝灰岩質砂岩	(2.72)	5.47	1.92	55.1	
240	SD4002	砥石	凝灰岩質砂岩	(6.32)	(7.00)	1.67	105.2	
241	SH4017	砥石	泥質凝灰岩	(5.00)	5.60	1.40	49.3	
242	包含層（北部）	砥石	緑色岩	(28.50)	19.90	16.70	91.9	
243	SH4026	砥石	砂岩	13.70	12.00	5.72	1020.5	
244	SH4018	砥石	凝灰岩質砂岩	(14.30)	8.80	8.20	1019.1	

石材は、愛知県埋蔵文化財センター・堀木真美子氏に鑑定していただいた。

第4章　総　括

第1節　　都田川流域における弥生時代中期の諸問題

1　はじめに

西遠江における弥生時代中期については、集落構造を把握できる調査事例はこれまで殆ど確認できなかった。しかし、今回の発掘調査により井通遺跡は弥生時代中期の集落遺跡であることが確認され、当該期の資料を追加することができた。

弥生時代に限らず、集落の動態を窺うには建物・溝など個々の遺構を集合体として捉えるだけでなく、居住以外の生産域・墓域等を含めた有機的関連の中で位置付ける必要がある。

したがって、今回の調査成果は多様な集落構造の一側面にすぎないが、ここでは遺構・遺物にかかわる諸問題を取り上げ、資料の基礎的考察を行う。

2　遠江の弥生時代中期集落

西遠江の大陸系磨製石器　都田川・井伊谷川の微高地上に立地する井通遺跡においては、弥生時代中期後葉には人為的活動の痕跡が確認できる。また、都田川流域では中期に微高地上の各集落が出現・展開し、中川平野の開拓が本格化した段階と位置付けられる。

西遠江においては弥生時代中期をもって大陸系磨製石器は組成を完成させ、定着すると考えられている。帰属時期が確実に判明する資料は多くはないが、弥生時代中期の沖積地に立地する集落では大陸系磨製石器の組成が完成していることを追認できる。一方、台地上に立地する遺跡とは石器構成において著しい差異が認められるが、これをもって水田稲作の浸透や集落間格差を指摘することはできない。これらは開発型水田稲作を進行するために確立した石器構成であって、生業の類型差を表している可能性も推定できる。また、沖積地に立地する遺跡であっても、石器構成比の特徴を抽出し、大規模開発の可否・中核的集落の存否を検証するには現状の資料では充分ではない。

井通遺跡の大陸系磨製石器からは、

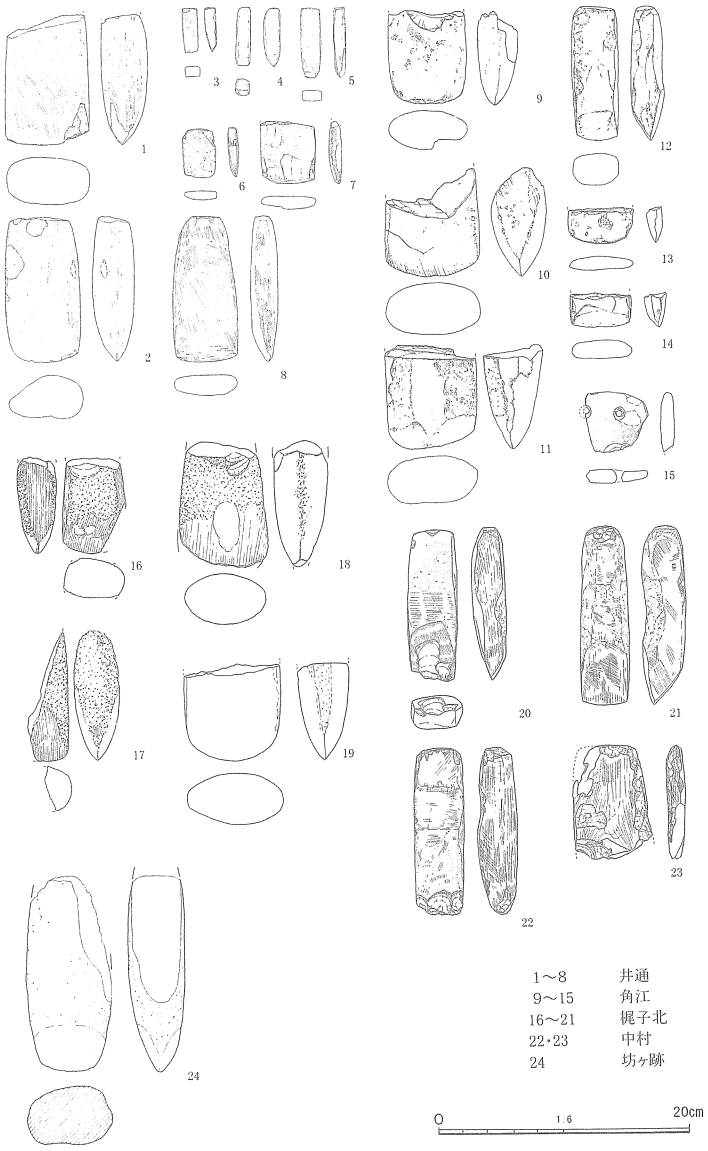


Fig.8　西遠江出土主要石器

開発型水田稲作を展開することが可能である石器組成であったと評価できる。しかし、都田川流域における石器組成の導入段階・集落の相対的位置付け・弥生時代後期への動態については今回の調査では明確に示すことはできなかった。

竪穴建物の形態　井通遺跡で検出された竪穴建物のうち平面形態が判明する建物は、建物長辺が比較的直線状・短辺はやや外に張り出すため隅部が丸味をもつ隅丸長方形を呈する。

竪穴建物の平面形態についてはすでに先学の優れた考察があり（松井1992、岩瀬2001、鈴木敏2001）、弥生時代中期後葉の遠江では隅丸長方形の竪穴建物は一般的に認められる建物形態であることが指摘されている。しかし、東遠江では長辺・短辺ともに丸味をもつ楕円形となり、形態差は天竜川が境界となると考えられている。

今回の井通遺跡の調査では、これらの指摘を追認する成果を得た。遠江における弥生時代中期の集落は、調査事例が少なく未だ検討する段階に到達していないが、西遠江の浜名湖を挟んだ北岸と南岸において竪穴建物の平面形態が共通であったことは少なくとも指摘できるであろう。

三河との関係　一方、中平遺跡では短辺も直線状となり、より長方形を指向する傾向が強い竪穴建物が検出されている。この形態は三河で検出される竪穴建物と類似しており、三河との関連を示すものと捉えられる。しかし、中平遺跡では隅丸長方形の竪穴建物もみられ、同じ丘陵上に立地する坊ヶ跡遺跡でも認められておらず、遠江ではこれまでのところ他に確認されていない。

三河と遠江の弥生時代中期中葉の竪穴建物は方形であったと指摘されており、中期中葉から後葉に到る平面形態の変遷においては同一であったと捉えることが可能であろう。しかし、井通遺跡が位置する都田川流域は地理的な位置から三河と相互に影響を及ぼしていたものと想定されるが、竪穴建物に関しては三河の平面形態を受容していない。したがって、三河と遠江は同一の建築様式に含まれるが、細分が可能な小様式を認めることができる。さらに、遠江でも東遠江は別の平面形態を認めることができることから、弥生時代中期後葉の竪穴建物には小さな地域性が表出する段階と位置付けられる。

後期への展開　平面形態が隅丸長方形の竪穴建物は、法ヶ崎遺跡で確認できるように弥生時代後期前半までは受け継がれている。都田川流域でも台地上に立地する向山遺跡において、後期前半の隅丸長方形を呈する竪穴建物が検出されている。向山遺跡では後期後半に隅丸方形の竪穴建物に変化し、法ヶ崎遺跡では隅丸長方形と隅丸方形の建物が同時期に併存している。この動向は、伊勢湾沿岸地域の土器様式広域分布圏の成立と関連づけて理解されている（鈴木敏2001）。

弥生時代中期後葉から後期前半は生活様式の画期と評価でき、都田川流域における各集落にも影響が及んだものと推測される。今回の井通遺跡の調査では弥生時代中期後葉が中心であり、後期へと連続する集落の社会的動向を窺う考古資料を確認できなかったが、今後とも都田川流域における断片的な資料を精力的に紡ぎ合わせていく必要がある。

3　置石炉について

分布・形態・時期　井通遺跡に設置された炉には、置石炉となる竪穴建物が5軒検出されている。

遠江の弥生時代の炉形態は地床炉が中心であり、置石炉の形態をもつ竪穴建物は普遍的とはいえない。また、竪穴建物検出数の多寡を問わなければ、分布はこれまでのところ浜名湖北岸～天竜川流域沖積平野北部と、小笠山北西丘陵周辺の2地域に認められる（註1）。

これら置石炉の形態は、

A類－炉心に礫を置く形態

B類－炉縁に置く形態のうち、建物中央から短辺に向けて設置されたもの

C類－炉縁に置く形態のうち、建物中央から長辺に向けて設置されたもの

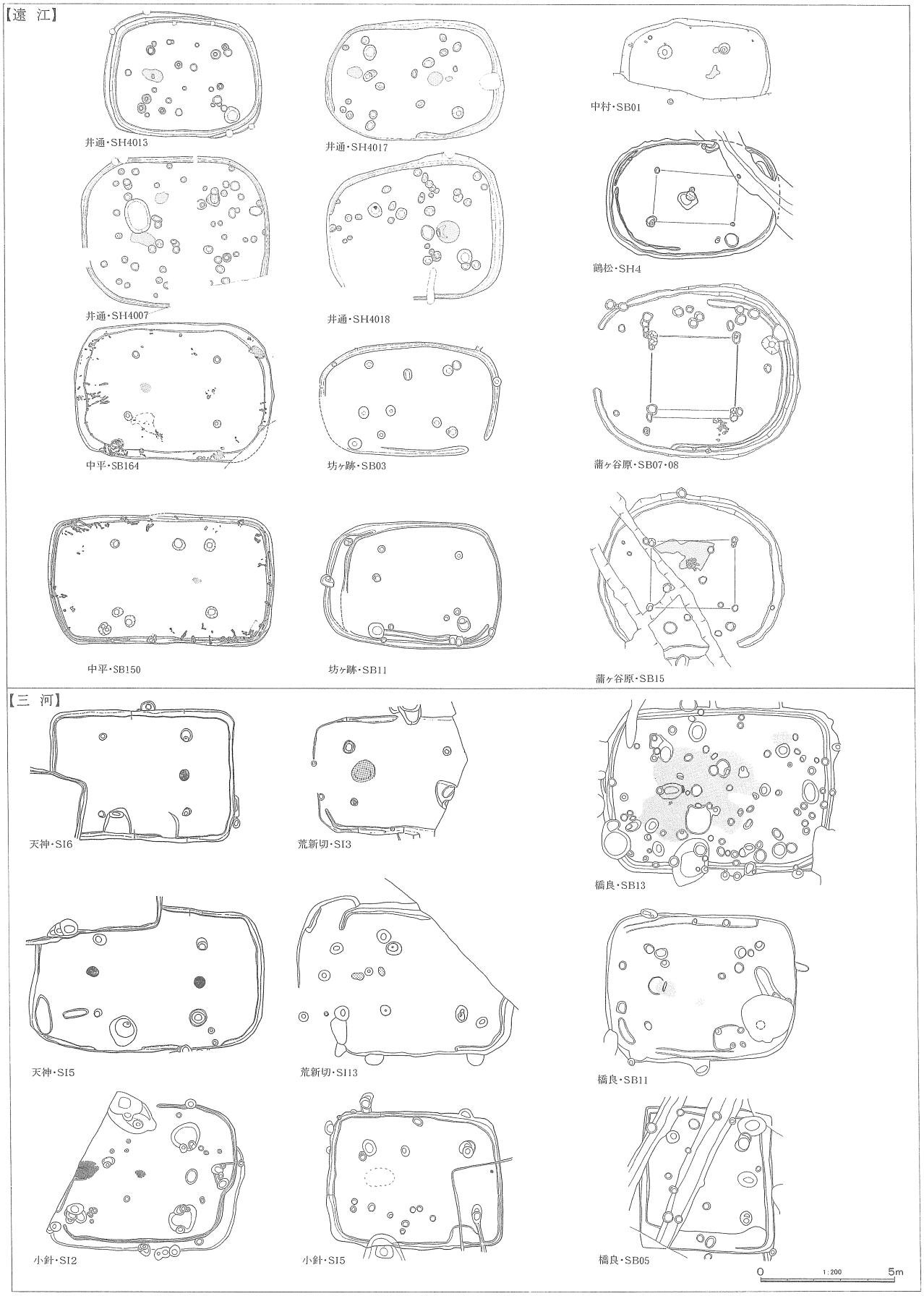

【遠　江】
井通・SH4013
井通・SH4017
中村・SB01
井通・SH4007
井通・SH4018
鶴松・SH4
中平・SB164
坊ヶ跡・SB03
蒲ヶ谷原・SB07・08
中平・SB150
坊ヶ跡・SB11
蒲ヶ谷原・SB15
【三　河】
天神・SI6
荒新切・SI3
橋良・SB13
天神・SI5
荒新切・SI13
橋良・SB11
小針・SI2
小針・SI5
橋良・SB05
0
1:200
5m

Fig.9　竪穴建物集成

Tab.4　東三河・遠江置石炉一覧

遺跡名	遺構名	住居形態	置石方向	台付甕	台盤状土製品	時　期
橋良遺跡	SB08	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
	SB10	隅丸長方形	B			弥生中期後葉
	SB11	隅丸長方形	A	○		弥生中期後葉
	SB13	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
井通遺跡	SH4005	隅丸長方形	B			弥生中期後葉
	SH4009	隅丸長方形	A	○		弥生中期後葉
	SH4013	隅丸長方形	A			弥生中期後葉
	SH4018	隅丸長方形	B		○	弥生中期後葉
	SH4019	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
東原遺跡	SB101	隅丸方形？	A	○		弥生後期中葉
	SB111	隅丸方形	A	○		弥生後期後半
	SB118	楕円形	B？			弥生後期中葉～後半
	SB504	方形？	B？C？			弥生後期後半
	SB516	隅丸長方形	A	○		弥生後期
	SB519	方形？	B？C？			弥生後期後半
	SB533	楕円形	C			弥生後期
掛之上遺跡	SB1	方形？	A	○		弥生後期
愛野向山遺跡	SB22	？	？			弥生後期後半
	SB81	？	？	○		弥生後期後半
団子塚遺跡	SB16－4	隅丸長方形	C			弥生後期
	SB1	隅丸長方形	C			弥生後期
居村遺跡	SB4	隅丸方形	C			弥生後期前半

置石方向－A：中央、B：炉縁・短辺、C：炉縁・長辺

に分類可能である。

各類型の分布状況をみるとA類は各地域で認められるが、B類は浜名湖北岸～天竜川流域、C類は小笠山北西丘陵に中心をもつ形態であり、類型と分布に相関関係がみられる。

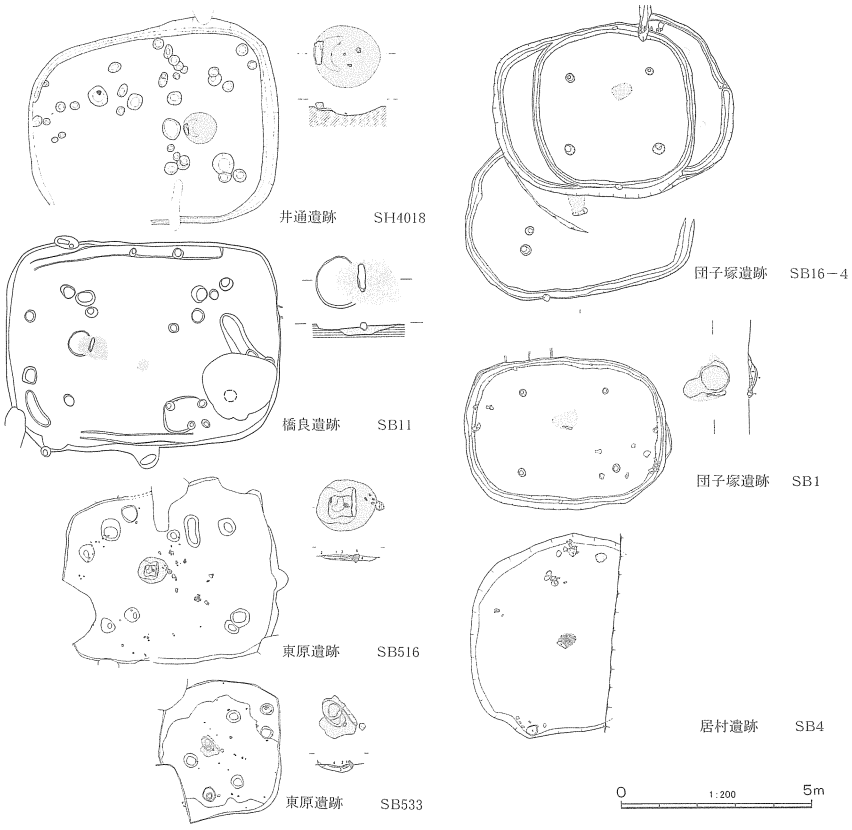


Fig.10　置石炉の諸例

置石炉はこれまでのところ弥生時代中期後葉には出現していたものと考えられる。西遠江では弥生時代後期～古墳時代前期の三方原台地上に立地する法ヶ崎遺跡・中平遺跡・坊ヶ跡遺跡などでは置石炉をもつ竪穴建物は確認されていない（註２）。一方、小笠山北西丘陵の各集落遺跡では、弥生時代後期にも置石炉がみられる。したがって、置石炉をもつ竪穴建物は天竜川付近を境界として、西側が弥生時代中期後葉頃・東側が後期頃に盛行したものと捉えられる。

置石炉の機能　弥生時代中期後葉～後期の置石炉だけでなく地床炉にも関連する遺物として、台盤状土製品と台付甕を取り上げてみる。台盤状土製品はそれ自体が甕を持ち上げて煮炊きを行う役割を担うものであるが（森1996・1998)、台盤状土製品と置石炉がともに確認されたのは井通遺跡における１例のみである。一方、甕を持ち上げて使用するための専用器種である台付甕は、弥生時代中期後葉には出現し、次第に普及していく。台付甕は置石炉をもつ多くの竪穴建物で認められており、置石炉における台付甕は一般的な使用形態であると考えられる。

甕の内容物に対する加熱方法には、平底甕ではオキ主体、台付甕は浅い地床炉において直火主体での加熱方法が熱効率の観点から最も適しているとされている（森1998)。つまり、弥生時代に到りオキを重視した加熱方法から炎主体の加熱方法へ煮沸方法が変化することが指摘されているように（小林1992)、台付甕の使用は強い直火による調理方法への転換を示している。その際、屋内で使用される炎から居住区間を確保する必要があるため、炉縁に礫を設置したことが置石炉に関わる成立要因の1つとみられる。建物中央から必ず外側に向けて礫を設置したのは、その傍証となるであろう。

置石炉の位置　井通遺跡において地床炉、若しくは床面上に焼土が複数確認できる竪穴建物は比較的多い。定量的分析を経ていないが、このような竪穴建物は他の遺跡でも相当数確認できるのではなかろうか。しかし、橋良遺跡例を除き、遠江の置石炉をもつ竪穴建物は炉・焼土が複数確認できるものはない。それは、竪穴建物内で炉の位置が固定されたことに他ならない。

置石炉に関しては、礫の部分が薪を浮かせて酸素供給を促進するためとする見解があるが（岩瀬1996・2001)、構造･系譜･片側煮炊きなどの諸点において検討の余地を残している。むしろ、一定方向から煮炊きが行われていたとする指摘がより重要である。つまり、強い炎であればこそ火処を固定して炎の侵入を防ぐ構造の炉形態であったと理解できよう。それは、竪穴建物内の空間分割を可能にしたものと評価できる。

置石炉と竪穴建物　置石炉をもつ竪穴建物は、東原遺跡を除けば隅丸長方形の竪穴建物において認められる。平面形態が隅丸長方形の竪穴建物は西遠江では弥生時代後期前半、東遠江では後期まで確認でき、遠江における置石炉の存続期間とほぼ合致している。したがって、炎主体の加熱方法により台付甕を使用する、平面形態が隅丸長方形の竪穴建物に置石炉が主に設置されたと捉えられる。

台付甕は弥生時代後期には普遍的な器種となり、直火による調理に比重を増したことが窺えるが、台付甕の使用と置石炉の必要性とは直結しない。隅丸長方形の竪穴建物に設置された置石炉は炎主体の加熱方法に対処する炉形態であったが、次第にそれらは減少していく。代わって隅丸方形の竪穴建物に地床炉を設置する居住形態が主体となる傾向を指摘できる。

４　結　語

今回の井通遺跡の調査では、弥生時代中期後葉に集落が形成されたことが確認され、中川平野における本格的な農耕社会の様相を窺える資料を得た。弥生時代後期の都田川流域は、岡の平遺跡・椿野遺跡などの大規模集落のほか銅鐸集中出土地域として発展しており、弥生時代中期から後期への展開過程の解明が今後の課題となるであろう。井通遺跡の成果が今後の研究に活用されることを期待したい。

註

1　三河では管見により詳細な状況は知り得ないが、遠江と接する東三河の橋良遺跡では置石炉が確認されている。

2　古墳時代前期においては、これまでのところ大平遺跡ＳＢ14において確認されるのみである。この建物は大平遺跡で最大規模の竪穴建物であり、置石炉となる２基の炉は極めて顕著に熱を受けて検出されている。

第２節　井通遺跡の歴史的変遷

1996年に調査を開始してから12年の歳月を経て、井通遺跡の発掘調査はここに完了した。

井通遺跡の調査は地域の歴史を考える上で重要な意義をもつが、今後の調査により解明されなければならない課題も多い。ここでは今回の調査成果と考察内容を要約し、総括とする。

弥生時代中期　弥生時代中期後葉の竪穴建物･土坑などが検出され、多量の土器･石器が出土した。これらの資料から、井通遺跡は中川平野に展開した集落遺跡であると位置付けられ、本格的な農耕社会への移行過程を推察できる遺跡と評価できる。

古墳時代前期　弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、人為的活動の痕跡を遺構から追求することが困難な状況となる。しかし、遺物には内行花文鏡や畿内をはじめ他地域からもたらされた土器類などが出土していることから、集落域は都田川流域の微高地上に移動して展開していたものと考えられる。

古墳時代中期　南部微高地において古墳時代中期中葉（５世紀中葉）頃に居住域が成立･展開する。竪穴建物は微高地の全域に及ぶものではなく、高位面に限られる。巨視的に捉えれば、この段階は都田川微高地上に展開した集落として位置付けられる。

古墳時代後期　古墳時代後期前半（６世紀前半）には北部微高地に居住域が成立する。南部微高地も竪穴建物が確認されており、中央部低地を挟んで南北の微高地上に集落が展開している。

古墳時代後期後半（６世紀後半）になると北部微高地の居住域は拡大し、南部微高地の居住域は継続して営まれていることが確認でき、集落は安定的な発展を遂げた様相が窺える。竪穴建物に竈が普及される状況も看取できる。

飛鳥時代　北部微高地では鍛冶関連遺物が多く出土しており、居住域の近辺に手工業空間が存在したことが窺える。南部微高地では高位面に掘立柱建物・低位面に竪穴建物が配置されている。さらに、有孔把手付中空円面形が出土しており、奈良時代の官衙遺跡へと発展していく基盤が既に成立していたことが確認できる。また、畿内産土師器が出土しており、この時期には活発な人・物資の交流が行われていたことが窺える。

奈良時代　南部微高地において多数の掘立柱建物群などが検出され、建物配置・大溝とその付属施設の存在から、水上交通と密接な関連を有する機能を果たしていたものと捉えた。墨書土器・陶硯類・度量衡資料などの出土遺物から、引佐郡家が管理した港湾施設・郡津と歴史的に評価した。さらに大溝埋没後は建物配置が大きく異なり、建物規模の大型化・廂付建物や床束建物などがみられることから、宿泊供給施設の機能を重視した館であったと位置付けられる。

平安時代　南部微高地の遺構群は縮小し、建物遺構は竪穴建物に移行する。陶製計量器が出土することから、遺跡の機能は維持されるが中心施設は大きく移動したことを確認できる。しかし、都城を除く遺跡では極めて稀少な宝珠硯が出土していることは特記すべき重要事項である。

中　世　北部微高地で掘立柱建物や井戸が検出されており、居住空間が展開したことが認められる。しかし、これらも急速に衰退していき、14世紀以降は集落域として現在まで継続することはなかった。この段階は中川平野に刑部御厨が設置されるが、その具体的様相を示す資料は得られなかった。

中世末～近・現代　北部微高地で検出された中世末の溝は近代の地籍図と合致するものもあり、現代へと引き継がれる土地区画の始まりをこの時期まで遡ることが可能である。

近世には遺跡北側に秋葉街道・南側に本坂道（姫街道）が通過する。近世には遺跡西側に気賀関所が設置され、浜名湖北岸の交通の要衝として近世の交通政策上の重要な位置を占めるようになる。

近代以降、調査で橋脚が検出された軽便鉄道奥山線、国鉄二俣線（現天竜浜名湖鉄道）、国道362号線、県道261号線が遺跡を通過していく。

引用・参考文献

足立順司ほか　1983　『椿野遺跡　昭和57年度発掘調査概報』　駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所
足立順司　1984　『椿野遺跡Ⅰ』　駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所
足立順司・佐野五十三　1985　『椿野遺跡Ⅱ』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
池本正明　1990　『岡島遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター
池本正明ほか　1993　『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター
石川日出志　1994　「東日本の大陸系磨製石斧」『考古学研究　第41巻第２号』　考古学研究会
石黒立人　1995　「東海の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル　№391』　ニュー・サイエンス社
石黒立人　1997　「愛知県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成４』　国立歴史民俗博物館
伊藤律子　1997　「静岡県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成４』　国立歴史民俗博物館
引佐町　1991　『引佐町史　上巻』
井鍋誉之　2007　『東原遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
岩瀬彰利　1996　「縄文・弥生時代の煮炊き方法」『鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム
岩瀬彰利　2001　「東海地方中部における条痕文期住居の様相」『三河考古　第14号』　三河考古刊行会
岩原　剛　2002　『橋良遺跡（Ⅲ）』　豊橋市教育委員会
岩本　貴　2000　「大廓式大型壺の転用」『研究紀要　第７号』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
漆畑　敏　1982　『向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報』　浜松市教育委員会
太田好治　1989　『都田地区発掘調査報告書　上巻』　浜松市文化協会
太田好治　1990　『都田地区発掘調査報告書　下巻』　浜松市文化協会
大野真規・杉浦　茂・嘉見俊宏　1996　『小針遺跡』　知立市教育委員会
大野真規・杉浦　茂　1997　『小針遺跡Ⅱ』　知立市教育委員会
大野真規・玉川裕香　1998　『小針遺跡Ⅲ』　知立市教育委員会
大谷宏治　2004　『蒲ヶ谷原遺跡　大溝遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
蔭山誠一　1996　「竪穴住居の地域性が表れる背景」『年報　平成７年度』　愛知県埋蔵文化財センター
勝又直人　1996　『角江遺跡Ⅱ　遺物編３』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
川井啓介　1991　「豊川流域における竪穴住居に関する一考察」『森岡遺跡　淡洲神社北遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター
川江秀孝・鈴木敏則　1982　『椿野遺跡』　浜松市遺跡調査会
栗原雅也ほか　1982　『川久保遺跡ほか発掘調査概報』　細江町教育委員会
栗原雅也　1988　『障子ヶ谷遺跡・穴ノ谷遺跡発掘調査報告書』　細江町教育委員会
栗原雅也ほか　1991　『滝峯才四郎谷遺跡発掘調査報告書』　細江町教育委員会
栗原雅也ほか　1993　『川久保船渡遺跡』　細江町教育委員会
栗原雅也　1996　『井通遺跡』　細江町教育委員会
栗原雅也　2005　『岡の平遺跡発掘調査報告書』　細江町教育委員会
合田芳正　1988　「炉址小考」『青山考古　６号』　青山考古学会
小林久彦　1994　『橋良遺跡』　豊橋市教育委員会
小林正史　1992　「煮沸実験に基づく先史時代の調理方法の研究」『北陸古代土器研究　第２号』　北陸古代土器研究会
佐藤由紀男ほか　1985　『椿野遺跡』　浜松市遺跡調査会
佐藤由紀男　1995　『川山遺跡Ⅱ』　浜松市文化協会
佐藤由紀男　2002　『川山遺跡Ⅲ』　浜松市教育委員会
佐野五十三　1984　『祝田遺跡Ⅰ』　駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所
佐野五十三　1985　『祝田遺跡Ⅱ』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡県　1989　『静岡県史　資料編４　古代』
静岡県　1990　『静岡県史　資料編１　考古１』
静岡県　1990　『静岡県史　資料編２　考古２』
静岡県　1992　『静岡県史　資料編３　考古３』
柴田　稔　1992　『団子塚遺跡（Ⅰ）』　浅羽町教育委員会
柴田　睦　1993　『椿野遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
島根県埋蔵文化財センター・島根県古代文化センター　2002　『青銅器埋納地調査報告書Ⅰ（銅鐸編）』
島根県埋蔵文化財センター・島根県古代文化センター　2006　『青銅器埋納地調査報告書Ⅱ（武器形青銅器編）』
鈴木一有　2002　『恒武西宮遺跡』　浜松市文化協会
鈴木一有ほか　2004　『坊ヶ跡遺跡』　浜松市文化協会
鈴木一守・鈴木敏則　1982　『中平遺跡』　浜松市教育委員会
鈴木光一　1994　『祝田遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木敏則　1986　「静岡県」『弥生時代の青銅器とその共伴関係　第Ⅲ分冊　近畿以東編』　埋蔵文化財研究会
鈴木敏則　1991　『梶子遺跡Ⅷ』　浜松市文化協会
鈴木敏則　1992　『佐鳴湖西岸遺跡群』　浜松市文化協会
鈴木敏則　1992　「静岡県西部（遠江）における「弥生石器の終わり」について」『弥生時代の石器』埋蔵文化財研究会
鈴木敏則　1997　「東海地方の弥生銅鏃」『古文化論叢』　伊達先生古希記念論集編集委員会
鈴木敏則　1998　『大山本村遺跡』　浜松市文化協会
鈴木敏則　1998　『梶子北遺跡』　浜松市文化協会
鈴木敏則　2001　『法ヶ崎遺跡』　浜松市教育委員会
鈴木敏則　2005　『梶子北（三永）・中村遺跡－弥生時代編－』　浜松市文化協会

辰巳和弘　1980　『引佐町の古墳文化Ⅰ』　引佐町教育委員会
辰巳和弘　1981a　『引佐町の古墳文化Ⅱ』　引佐町教育委員会
辰巳和弘　1981b　『都田川流域の遺跡』　細江町教育委員会
辰巳和弘　1983　『引佐町の古墳文化Ⅲ』　引佐町教育委員会
辰巳和弘　1988　『引佐町の古墳文化Ⅳ』　引佐町教育委員会
辰巳和弘　1996　『北岡大塚古墳』　引佐町教育委員会
東海埋蔵文化財研究会　1986　『欠山式土器とその前後』　東海埋蔵文化財研究会実行委員
東海埋蔵文化財研究会　1990　『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』　東海埋蔵文化財研究会三重県実行委員会
仲野紀己子　1980　「第３章　弥生時代の遺構と遺物について」『中里前原遺跡』　中里前原遺跡調査会
贄　元洋　1995　「第３節　石庖丁形石器の考察」『大山Ⅰ遺跡』　舞阪町教育委員会
禰宜田佳男　1995　「近畿の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル　№391』　ニュー・サイエンス社
長谷川　睦　1997　『小笠山総合運動公園内遺跡群』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
浜松市遺跡調査会　1981　『浜松市天王中野遺跡発掘調査報告書』
浜松市遺跡調査会　1983　『国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報』
浜松市遺跡調査会　1983　『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』
林　弘之・小島　隆　1995　『天間遺跡』　豊川市教育委員会
袋井市教育委員会　1993　『鶴松遺跡Ⅵ』
細江町　1986　『細江町史　資料編六』
舞阪町教育委員会　1995　『大山Ⅰ遺跡』
埋蔵文化財研究会　1992　『弥生時代の石器』
前田清彦・小島　隆　1988　『石坪・郷中・雨谷遺跡』　豊川市教育委員会
前田清彦・林　弘之ほか　1989　『郷中・雨谷』　豊川市教育委員会
松井一明　1992　『鶴松遺跡Ⅴ』　袋井市教育委員会
松井一明　2003　『掛之上遺跡18』　袋井市教育委員会
松井一明　2004　『愛野向山Ⅱ遺跡』　袋井市教育委員会
丸杉俊一郎ほか　2007　『井通遺跡』本文編１・本文編２・図版編・文字資料編　静岡県埋蔵文化財調査研究所
向坂鋼二・辰巳　均　1991　『川山遺跡発掘調査報告書』　浜松市教育委員会
森　泰通　1996　「台盤状土製品から台付甕へ」『鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム
森　泰通　1998　「台付甕の出現Ⅱ」『楢崎彰一先生古希記念論文集』　楢崎彰一先生古希記念論文集刊行会
森　泰通　2000　「消える台付甕」『Ｓ字甕を考える』　東海考古学フォーラム
山田成洋ほか　1992　「静岡県内出土の「石包丁」の使用痕分析」『川合遺跡　遺物編２』静岡県埋蔵文化財調査研究所
渡井英誉　1996　「東駿河における布留式併行期の様相（前）」『静岡県考古学研究　№28』　静岡県考古学会
渡井英誉　1997　「東駿河における布留式併行期の様相（後）」『静岡県考古学研究　№29』　静岡県考古学会
渡井英誉・竹内順一　1999　「大廓式と呼ばれる大型壺」『静岡県考古学研究　№31』　静岡県考古学会

図出典

Fig. 6　足立・佐野1985，鈴木1986，静岡県1992，栗原ほか1993，柴田1993，栗原2005より転載
Fig. 8　各報告書を一部改変して転載
Fig. 9　各報告書を一部改変して転載
Fig.10　各報告書を一部改変して転載

謝　辞

現地調査及び本書の作成にあたっては、下記に銘記した方々にご指導・ご高配を賜った。末筆ながら深く感謝の意を表します。（敬称略・五十音順）

石黒立人　岩瀬彰利　太田好治　大谷宏治　川添和暁　工藤基志　栗原雅也　佐藤由紀男
篠原和大　柴田　稔　鈴木一有　鈴木敏則　辰巳和弘　永井宏幸　禰宜田佳男　八賀　晋
樋泉岳二　平野吾郎　堀木真美子　松井一明　向坂鋼二　森　泰通　渡辺　誠

付　載

理化学的分析

井通遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ　井通遺跡における樹種同定
Ⅱ　井通遺跡における炭化種実同定
Ⅲ　井通遺跡出土試料の赤色顔料分析
（蛍光Ｘ線分析）

井通遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ　井通遺跡における樹種同定

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試　料

試料は、井通遺跡より出土した柱１点を含む炭化材20点である。時期は弥生時代中期である。

3．方　法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結　果

結果を表１に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属　*Abies*　マツ科　図版１

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に５種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの４種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

クリ　*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*　ブナ科　図版２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ

木など広く用いられる。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata Schottky*　ブナ科　図版 3

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性ともに低く、建築材などに用いられる。

シイ属　*Castanopsis*　ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性ともにやや低く、建築、器具などに用いられる。

なお、シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片であり広範囲の観察が困難であったので、シイ属の同定にとどめる。

コナラ属コナラ節　*Quercus sect. Prinus*　ブナ科　図版 4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　*Quercus sect. Aegilops*　ブナ科　図版 5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版6

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ブナ科　*Fagaceae*

横断面：大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られる。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の、クリ、シイ属のいずれかである。なお本試料は、保存状態が悪く、広範囲の観察は困難であったので、ブナ科以下の同定は困難であった。

クスノキ科　*Lauraceae*

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は保存状態が悪く不明瞭な点が多いため、クスノキ科の同定にとどめる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

5．所　見

井通遺跡出土の炭化材は、コナラ属コナラ節4点、ツブラジイ4点、クリ3点、シイ属3点、ブナ科（クリ、シイ属のいずれか）2点、モミ属1点、コナラ属クヌギ節1点、コナラ属アカガシ亜属1点、クスノキ科1点であった。柱1点には、クリが使用されていた。クリは温帯に広く分布する落葉高木で、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。重厚で保存性が良く、柱材などの建築材として比較的よく使われる樹木である。

多い順に、コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。シイ属（ツブラジイを含む）は、温帯下部の暖温帯に分布する常緑高木で乾燥した台地等の二次林要素でもある。コナラ属アカガシ亜属は、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。クスノキ科も照葉樹林の主要構成要素を含む常緑高木である。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯に広く分布する落葉高木で、乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林要素でもある。モミ属は温帯性のモミであり、常緑高木である。

井通遺跡の炭化材は大きな材の採取できる高木ばかりであり、台地上等の乾燥したところに生育する二次林性の落葉広葉樹ないし照葉樹が主要となる。遺跡周辺の台地等に二次林が分布し、これらの樹種も遺跡周辺から比較的容易にもたらすことができたと考えられる。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩　1985　針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯　浩・原田　浩　1985　広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地　謙・伊東隆夫　1988　日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久　1993　日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

表1　井通遺跡炭化材　樹種表

試料№	遺構名	結果（学名／和名）	
1	SD4002	*Castanopsis cuspidata Schottky*	ツブラジイ
2		*Castanopsis*	シイ属
3		*Castanopsis*	シイ属
4		*Castanopsis cuspidata Schottky*	ツブラジイ
5		*Castanopsis cuspidata Schottky*	ツブラジイ
6	SH4016	*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*	クリ
7		*Quercus sect. Aegilops*	コナラ属クヌギ節
8		*Lauraceae*	クスノキ科
9		*Fagaceae*	ブナ科
10		*Fagaceae*	ブナ科
11	SH4018	*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*	クリ
12		*Abies*	モミ属
13		*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
14		*Castanopsis cuspidata Schottky*	ツブラジイ
15		*Castanopsis*	シイ属
16	SH4019	*Quercus sect. Prinus*	コナラ属コナラ節
17		*Quercus sect. Prinus*	コナラ属コナラ節
18		*Quercus sect. Prinus*	コナラ属コナラ節
19		*Quercus sect. Prinus*	コナラ属コナラ節
20		*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*	クリ

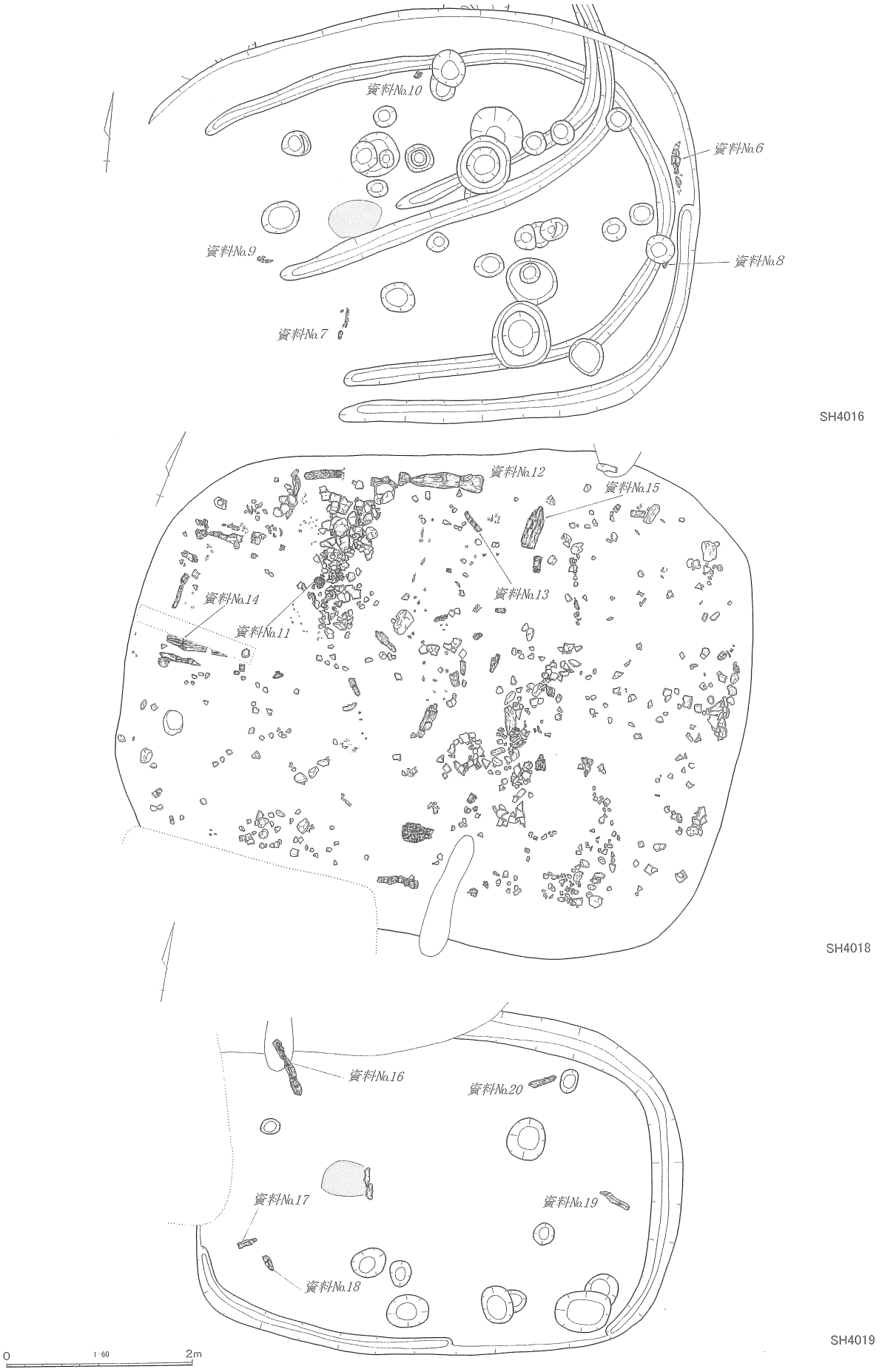
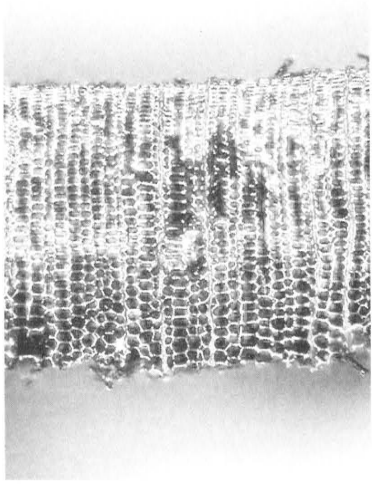
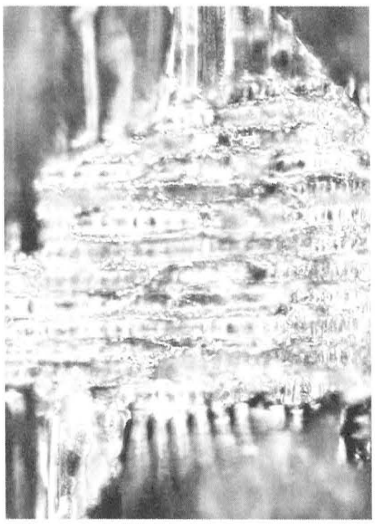

資料No.10
資料No.6
資料No.9
資料No.8
資料No.7
SH4016
資料No.12
資料No.15
資料No.14
資料No.13
資料No.11
SH4018
資料No.16
資料No.20
資料No.17
資料No.19
資料No.18
SH4019
0
1:60
2m

図1　試料採取位置図



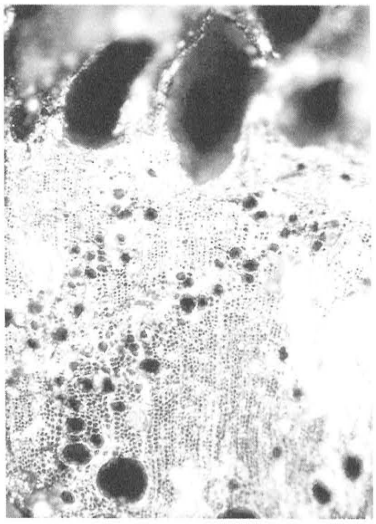
横断面 ―――― : 0.4mm



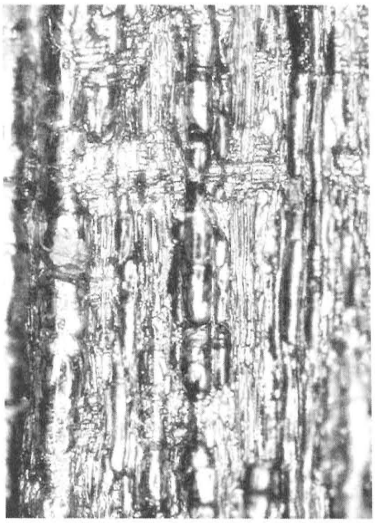
放射断面 ―――― : 0.1mm

接線断面 ―――― : 0.2mm

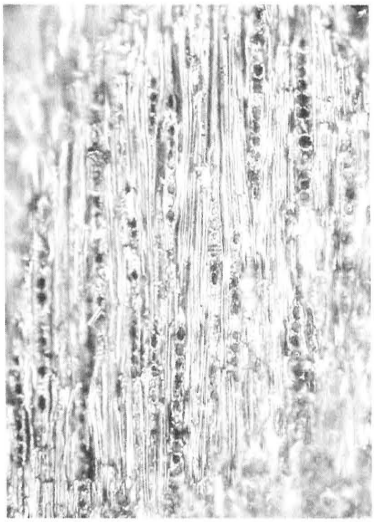
1．試料NO.12　モミ属



横断面 ―――― : 0.4mm

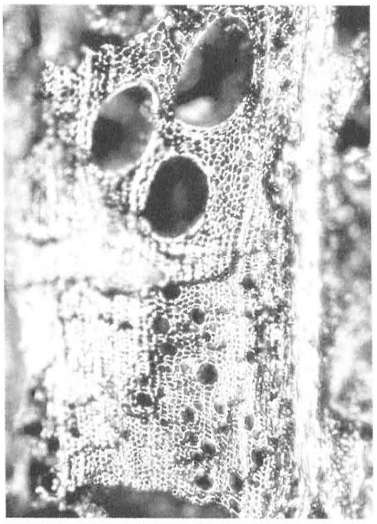


放射断面 ―――― : 0.4mm

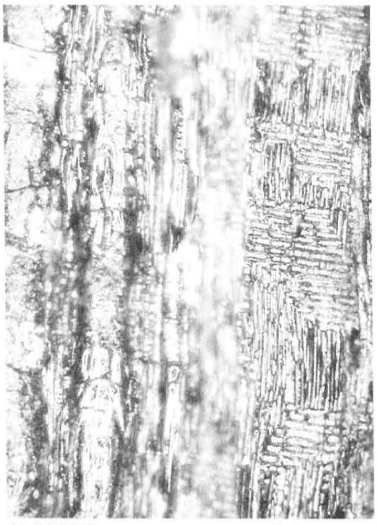


接線断面 ―――― : 0.2mm

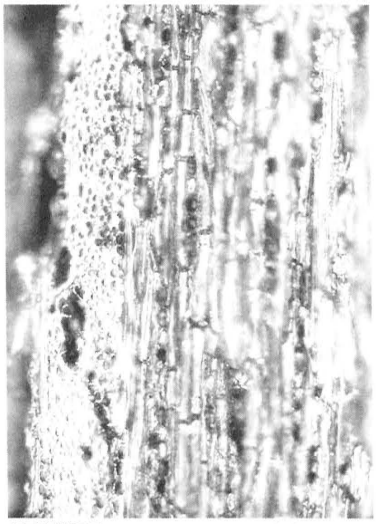
2．試料NO.11　クリ



横断面 ―――― : 0.4mm



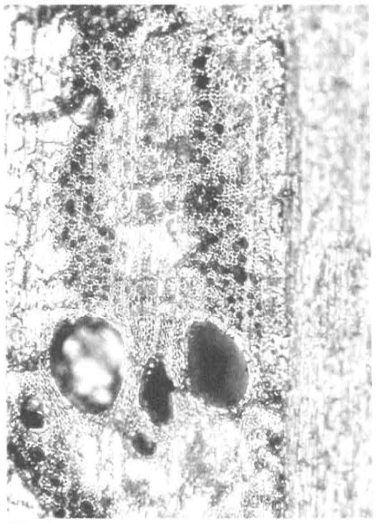
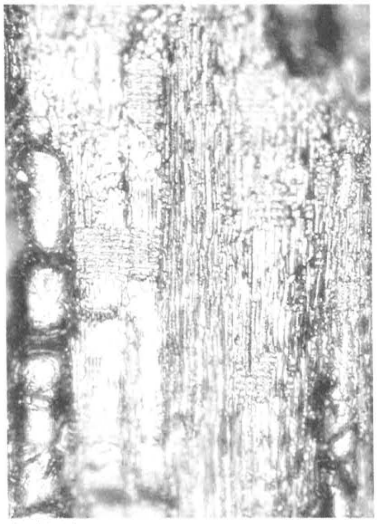
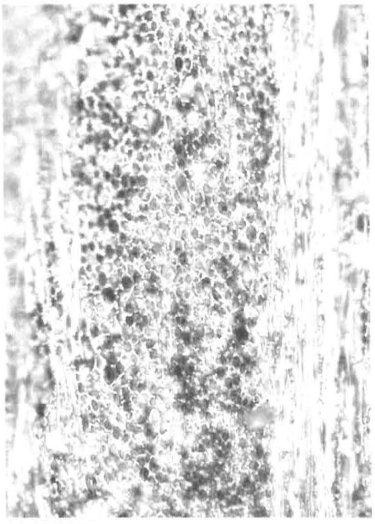
放射断面 ―――― : 0.4mm



接線断面 ―――― : 0.2mm

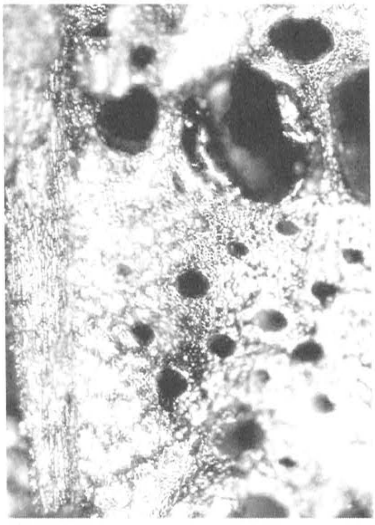
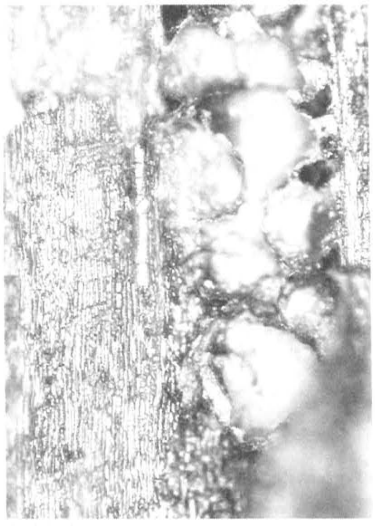
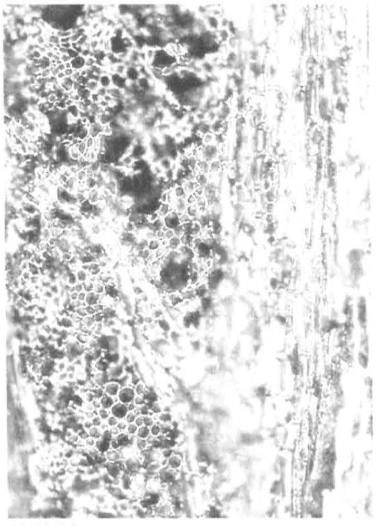
3．試料NO.1　ツブラジイ

井通遺跡の炭化材　Ⅱ

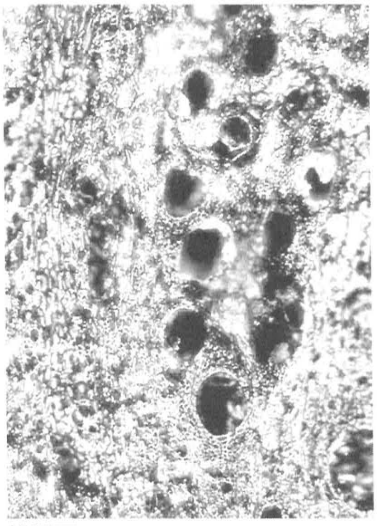
横断面 ―――― : 0.4mm　放射断面 ―――― : 0.4mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

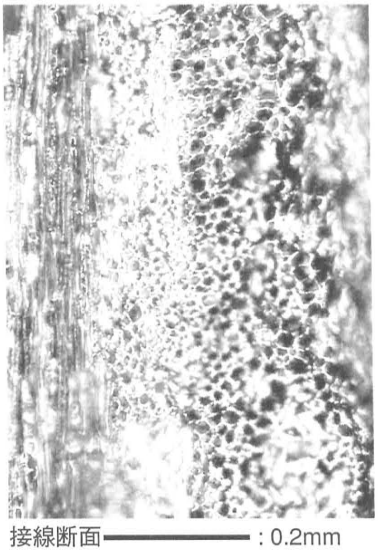
4．試料NO.16　コナラ属コナラ節

横断面 ―――― : 0.4mm　放射断面 ―――― : 0.4mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

5．試料NO.7　コナラ属クヌギ節





横断面 ―――― : 0.4mm　放射断面 ―――― : 0.4mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

6．試料NO.13　コナラ属アカガシ亜属

Ⅱ　井通遺跡における炭化種実同定

1．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2．試　料

試料は、弥生時代中期（約2000年前）の計18点である。いずれも水洗選別済みのものである。

3．方　法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4．結　果

（1）分類群

樹木４、草本２の計６分類群が同定される。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹　木〕

クリ　*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*　種子（破片）・堅果（破片）　ブナ科

種子は黒褐色で広楕円形を呈し、下端に広い付き部がある。断面は楕円～半円形である。

堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。両面とも円みがある。

イチイガシ　*Quercus gilva Blume*　子葉（完形・半形）　ブナ科

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

コナラ属　*Quercus*　子葉（破片）　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

モモ　*Prunus persica Batsch*　核（破片）　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔草　本〕

イネ　*Oryza sativa L.*　果実（破片）　イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

アサ　*Cannabis sativa L.*　種子　クワ科

黒色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。

アサは南アジアや中央アジア原産とされる1年草の畑作物である。茎皮の繊維は麻糸になり、種子は油を採ったり食用になる。不明炭化物　炭化の度合いが著しく表面模様が観察できない、または発泡し変形しているため種実とは判断しにくいため、不明炭化物とする。

（2）種実群集の特徴

試料1）　イチイガシ6、コナラ属9が同定された。
試料2）　モモ1が同定された。
試料3）　クリ10が同定された。
試料4）　イチイガシ1が同定された。
試料5）　イチイガシ1が同定された。
試料6）　コナラ属1が同定された。
試料7）　コナラ属1が同定された。
試料8）　イチイガシ1が同定された。
試料9）　コナラ属1が同定された。
試料10）　コナラ属1が同定された。
試料11）　コナラ属1が同定された。
試料12）　コナラ属1が同定された。
試料13）　コナラ属1が同定された。
試料14）　モモ11が同定された。
試料15）　イネ1、アサ59が同定された。
試料16）　イネ1が同定された。
試料17）　種実類は同定されなかった。
試料18）　モモ1が同定された。

5．考　察

井通遺跡で検出された炭化種実は、クリ、イチイガシ、コナラ属、モモ、イネ、アサに同定された。クリとイチイガシは、渋抜きなしで優良な食用になる堅果類であり、イネ、モモ、アサは栽培植物である。アサの種子は食用となり、茎の繊維は布地、網、袋などに利用される。各種実は種類ごとにまとまって出土する傾向にあり人為的集積が考えられる。以上、井通遺跡で検出された種実類は、クリ、イチイガシ、モモ、イネ、アサといった栽培植物を含む有用な植物の種実群である。

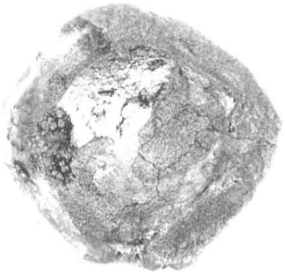
参考文献

笠原安夫　1985　日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫　1988　作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣　出版，p.131－139.
金原正明　1996　代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，p.15－19.
南木睦彦　1991　栽培植物．古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165－174.
渡辺　誠　1975　縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

表1　井通遺跡における炭化種実固定結果

分類群		部位	試料																	
学名	和名		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
Arbor	樹木																			
Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ	堅果（破片）			5															
		子葉（破片）			5															
Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉（完形）	1												1					
		（半形）	5			2														
Quercus	コナラ属	子葉（破片）	9			2									5					
Prunus persica Batsch	モモ	核　（破片）		1												11				1
Herb	草本																			
Oryza sativa L.	イネ	果実（破片）															1	1		
Cannabis sativa L.	アサ	種子（集塊）															9			
		（完形）															50			
		（破片）															(+)			
Total	合計		15	1	10	4									6	11	60	1	0	1
	不明炭化物															3			17	
	炭化材片															1	1			

井通遺跡の炭化種実



1 クリ子葉

2 同左

5.0mm

3 クリ子葉

4 同左

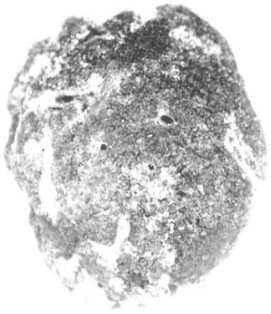
5.0mm

5 イチイガシ子葉

6 イチイガシ子葉

7 イチイガシ子葉（半形）

0.5mm



8 モモ核（破片）

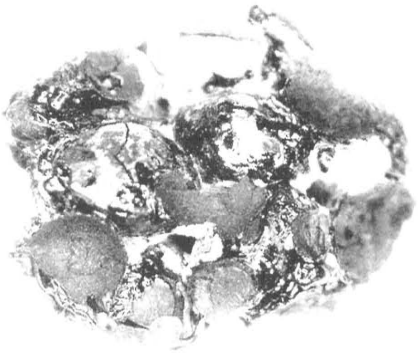
5.0mm

9 イネ果実（破片）

1.0mm

10 アサ種子

1.0mm



11 アサ種子（集塊）

1.0mm

Ⅲ　井通遺跡出土試料の赤色顔料分析（蛍光Ｘ線分析）

１．はじめに

物質にＸ線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され、この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

古代の赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS）、ベンガラ（酸化第二鉄：Fe_2O_3）、鉛丹（酸化鉛：Pb_3O_4）が知られている（市毛1998、本田1995）。蛍光Ｘ線分析では、水銀（Hg）・イオウ（S）、鉄（Fe）、鉛（Pb）の元素の検出状況から赤色顔料の種類を推定することが可能である。

２．試　料

分析試料は、ＳＨ4015から出土した№１・№２、ＳＫ4007から出土した№３、G-38グリッドから出土した№４・№５の計５点である。このうち、試料№３～５については赤色顔料付着部分と非赤色部の２箇所を測定して比較検討を行った。

３．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間600秒、照射径7.0㎜、電圧30kV、試料室内真空である。

４．分析結果

表１に各元素の定量分析結果（wt%）を示し、付図に各試料（部位）のＸ線スペクトル図を示す。定量分析の結果は、慣例により代表的な酸化物名で表記している。

５．考　察

（１）№１・№２

分析の結果、試料№１と№２では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（Fe_2O_3）の含量は、№１では39.9%、№２では48.2%といずれも高い値であり、各試料の主成分となっている。以上の結果から、これらの試料に含まれている顔料はベンガラと考えられる。なお、地下水中などの鉄分が沈着した褐鉄鉱も同様の成分で構成されていることから、ベンガラをより確実に同定するにはＸ線回折分析による結晶構造の解析が必要である。

（２）№３・№４・№５（土器付着の赤色顔料）

分析の結果、№３・№４・№５の赤色顔料付着部分では、鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。このうち、№５の赤色部における鉄（Fe_2O_3）の含量は11.1%（非赤色部は3.8%）であり、比較部分の2.9倍と明らかに高い値である。また、№３の赤色部における鉄（Fe_2O_3）の含量は8.2%（非赤色部は5.6%）、№４の赤色部は6.7%（非赤色部は4.9%）であり、いずれも比較部分よりも高い値である。以上の結果から、これらの土器に付着した赤色顔料はベンガラと考えられる。

参考文献

市毛　勲　1998　新版朱の考古学．考古学選書．雄山閣出版
本田光子　1995　古墳時代の赤色顔料．考古学と自然科学．31･32，p.63-79.

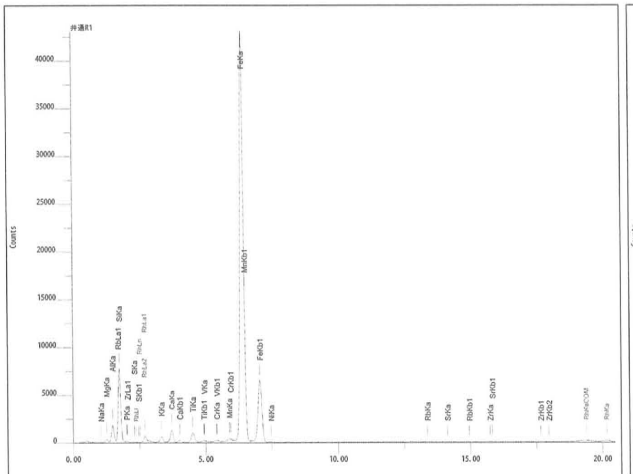
表1　井通遺跡における蛍光X線分結果

単位：wt(%)

	試料	1	2	3	3'	4	4'	5	5'
原子No.	化学式	赤色部	赤色部	赤色部	非赤色部	赤色部	非赤色部	赤色部	非赤色部
11	Na_2O	0.560	0.768	1.163	1.587	1.159	1.220	1.252	1.012
12	MgO	5.078	4.020	1.405	1.285	0.817	1.541	0.435	1.298
13	Al_2O_3	12.795	11.012	16.226	18.445	20.021	21.715	19.351	23.054
14	SiO_2	34.875	29.661	59.240	62.890	63.863	63.842	61.188	62.449
15	P_2O_5	1.373	1.298	2.568	2.313	2.559	1.971	2.310	3.218
16	SO_3	0.000	0.000	4.525	1.473	0.000	0.000	0.037	0.124
19	K_2O	1.119	1.067	2.690	2.726	2.329	2.215	2.113	2.378
20	CaO	2.168	1.832	2.285	1.774	0.996	1.050	0.800	1.185
22	TiO_2	1.323	1.168	1.338	1.524	1.218	1.259	1.011	1.178
23	V_2O_5	0.024	0.047	0.045	0.044	0.031	0.053	0.030	0.030
24	Cr_2O_3	0.106	0.069	0.033	0.039	0.015	0.054	0.028	0.037
25	MnO	0.464	0.584	0.167	0.121	0.140	0.088	0.170	0.097
26	Fe_2O_3	39.889	48.212	8.190	5.649	6.723	4.889	11.137	3.788
28	NiO	0.156	0.162	0.036	0.032	0.039	0.037	0.039	0.050
37	Rb_2O	0.013	0.012	0.018	0.012	0.015	0.013	0.013	0.018
38	SrO	0.025	0.042	0.029	0.030	0.033	0.021	0.029	0.032
40	ZrO_2	0.034	0.047	0.043	0.058	0.041	0.030	0.055	0.054

No.3　　No.4　　No.5

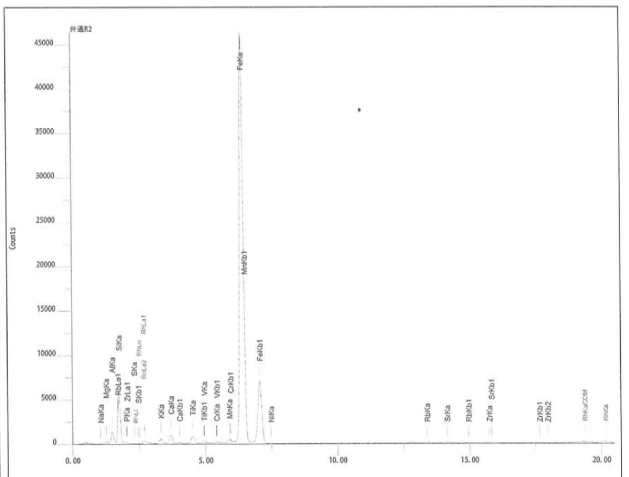
写真1　蛍光Ｘ線分析（赤色顔料分析）試料



ファイル名： A:¥井通R1.SPC　　測定日時： 2006年12月 7日16時13分41秒
測定条件　：電圧: 30.0kV　電流: 0.260mA　ﾗｲﾌﾞﾀｲﾑ: 600.00sec　パス：Vac
定量条件
　定量法： 標準
分析元素： Na,Mg,Al,Si,P,S,K,Ca,Ti,V,Cr,Mn,Fe,Ni,Rb,Sr,Zr,Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	11 Na20	0.5602	0.7676	0.0038492	133	2.0607
2	12 MgO	5.0784	10.6988	0.0136079	3026	0.9141
3	13 Al203	12.7948	10.6569	0.0178834	16824	0.4283
4	14 Si02	34.8746	49.2925	0.0773387	76458	0.4652
5	15 P205	1.3726	0.8212	0.0075469	3834	0.2972
6	16 S03	nd				
7	19 K20	1.1187	1.0085	0.0082078	7058	0.1120
8	20 CaO	2.1676	3.2826	0.0145407	17799	0.0958
9	22 Ti02	1.3230	1.4062	0.0066882	14261	0.0804
10	23 V205	0.0242	0.0113	0.0001194	304	0.0730
11	24 Cr203	0.1056	0.0590	0.0007173	2020	0.0505
12	25 MnO	0.4643	0.5558	0.0032183	9347	0.0501
13	26 Fe203	39.8888	21.2130	0.2328248	739114	0.0569
14	28 NiO	0.1555	0.1767	0.0006628	2187	0.0831
15	37 Rb20	0.0125	0.0057	0.0001564	398	0.0644
16	38 SrO	0.0250	0.0205	0.0002935	780	0.0710
17	40 Zr02	0.0343	0.0237	0.0004174	924	0.0963

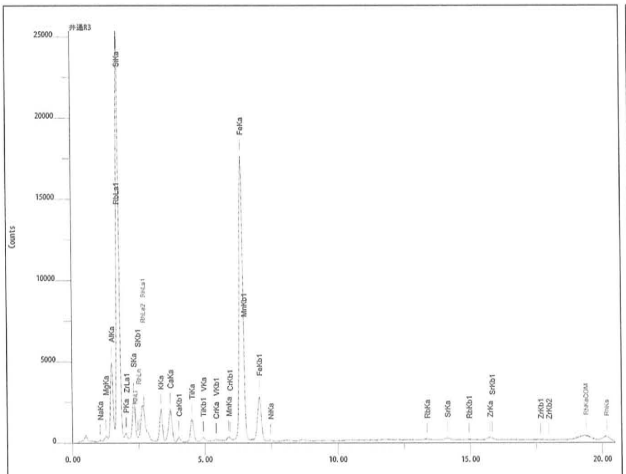
図1　蛍光Ｘ線スペクトル（No.1）



ファイル名： A:¥井通R2.SPC　　測定日時： 2006年12月 7日16時51分26秒
測定条件　：電圧: 30.0kV　電流: 0.400mA　ﾗｲﾌﾞﾀｲﾑ: 600.00sec　パス：Vac
定量条件
　定量法： 標準
分析元素： Na,Mg,Al,Si,P,S,K,Ca,Ti,V,Cr,Mn,Fe,Ni,Rb,Sr,Zr,Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	11 Na20	0.7681	1.1313	0.0029742	158	2.4310
2	12 MgO	4.0196	9.1030	0.0060749	2078	1.0776
3	13 Al203	11.0124	9.8600	0.0088352	12787	0.4961
4	14 Si02	29.6611	45.0671	0.0386841	58836	0.5259
5	15 P205	1.2982	0.8350	0.0043657	3412	0.3231
6	16 S03	nd				
7	19 K20	1.0671	1.0341	0.0048112	6365	0.1212
8	20 CaO	1.8319	2.9822	0.0075669	14250	0.1034
9	22 Ti02	1.1678	1.3344	0.0036558	11993	0.0863
10	23 V205	0.0472	0.0237	0.0001440	564	0.0786
11	24 Cr203	0.0688	0.0413	0.0002884	1249	0.0544
12	25 MnO	0.5835	0.7510	0.0023888	10673	0.0564
13	26 Fe203	48.2118	27.5616	0.1619833	791114	0.0657
14	28 NiO	0.1624	0.1984	0.0003682	1869	0.1039
15	37 Rb20	0.0117	0.0057	0.0000774	303	0.0811
16	38 SrO	0.0415	0.0366	0.0002575	1053	0.0895
17	40 Zr02	0.0468	0.0347	0.0003005	1023	0.1214

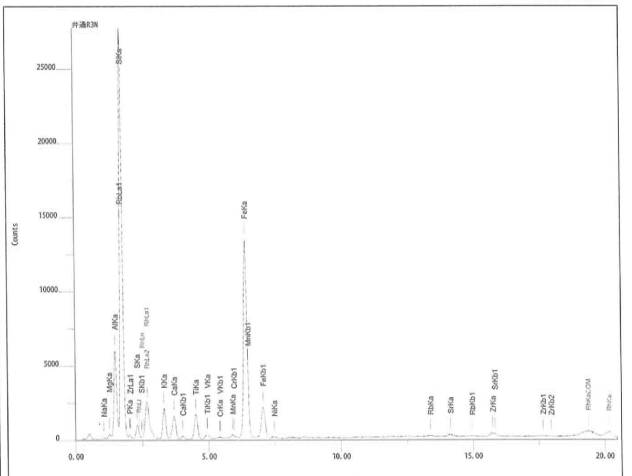
図2　蛍光Ｘ線スペクトル（No.2）



ファイル名： A:¥井通R3.SPC　　測定日時： 2006年12月 7日18時 9分27秒
測定条件　：電圧: 30.0kV　電流: 0.340mA　ﾗｲﾌﾞﾀｲﾑ: 600.00sec　パス：Vac
定量条件
　定量法： 標準
分析元素： Na,Mg,Al,Si,P,S,K,Ca,Ti,V,Cr,Mn,Fe,Ni,Rb,Sr,Zr,Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	11 Na20	1.1628	1.3262	0.0131440	595	0.8358
2	12 MgO	1.4051	2.4639	0.0060663	1764	0.3786
3	13 Al203	16.2261	11.2493	0.0369171	45415	0.1755
4	14 Si02	59.2400	69.6950	0.1927985	249249	0.2111
5	15 P205	2.5678	1.2787	0.0167248	11111	0.1418
6	16 S03	4.5247	3.9950	0.0098431	30705	0.0886
7	19 K20	2.6903	2.0187	0.0217941	24507	0.0677
8	20 CaO	2.2846	2.8797	0.0163907	26236	0.0598
9	22 Ti02	1.3376	1.1834	0.0072761	20289	0.0499
10	23 V205	0.0452	0.0176	0.0002424	807	0.0449
11	24 Cr203	0.0327	0.0152	0.0002461	906	0.0304
12	25 MnO	0.1669	0.1663	0.0015587	5920	0.0248
13	26 Fe203	8.1904	3.6255	0.0720659	299170	0.0252
14	28 NiO	0.0360	0.0341	0.0003777	1629	0.0225
15	37 Rb20	0.0175	0.0066	0.0005767	1921	0.0164
16	38 SrO	0.0289	0.0197	0.0008936	3107	0.0180
17	40 Zr02	0.0434	0.0249	0.0013946	4036	0.0243

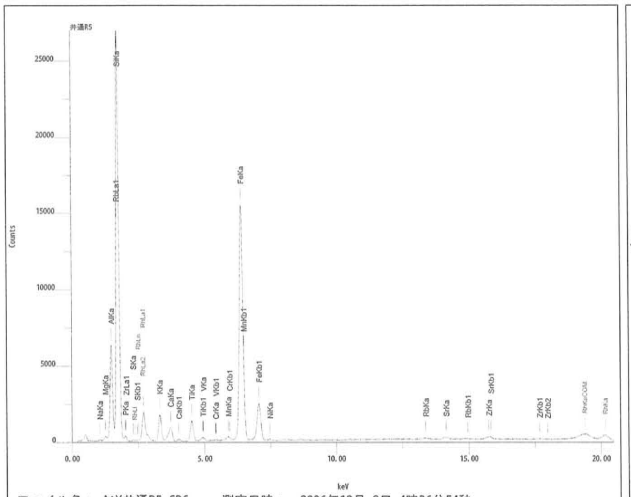
図3　蛍光Ｘ線スペクトル（No.3）



ファイル名： A:¥井通R3N.SPC　　測定日時： 2006年12月 7日18時43分14秒
試料名　：
メモ　　：非赤色部
測定条件　：電圧: 30.0kV　電流: 0.340mA　ﾗｲﾌﾞﾀｲﾑ: 600.00sec　パス：Vac
定量条件
　定量法： 標準
分析元素： Na,Mg,Al,Si,P,S,K,Ca,Ti,V,Cr,Mn,Fe,Ni,Rb,Sr,Zr,Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	11 Na20	1.5867	1.7800	0.0194669	881	0.6335
2	12 MgO	1.2853	2.2170	0.0059725	1737	0.2897
3	13 Al203	18.4445	12.5777	0.0450768	55453	0.1346
4	14 Si02	62.8897	72.7761	0.2135272	276047	0.1670
5	15 P205	2.3125	1.1328	0.0154008	10231	0.1356
6	16 S03	1.4733	1.2795	0.0032937	10275	0.0712
7	19 K20	2.7259	2.0119	0.0231123	25989	0.0533
8	20 CaO	1.7736	2.1990	0.0133324	21341	0.0470
9	22 Ti02	1.5242	1.3264	0.0087713	24458	0.0388
10	23 V205	0.0437	0.0167	0.0002481	827	0.0349
11	24 Cr203	0.0388	0.0177	0.0003088	1137	0.0237
12	25 MnO	0.1211	0.1187	0.0012171	4622	0.0190
13	26 Fe203	5.6494	2.4597	0.0540136	224228	0.0191
14	28 NiO	0.0322	0.0300	0.0003908	1686	0.0161
15	37 Rb20	0.0117	0.0044	0.0004527	1508	0.0115
16	38 SrO	0.0298	0.0200	0.0010784	3749	0.0127
17	40 Zr02	0.0577	0.0325	0.0021693	6278	0.0171

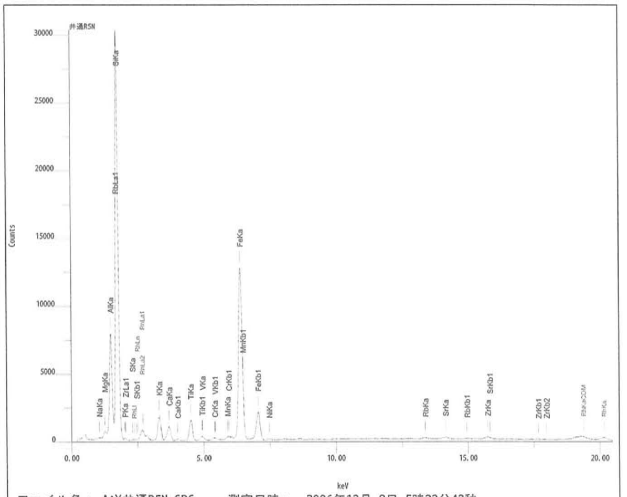
図4　蛍光Ｘ線スペクトル（No.3'）



ファイル名： A:¥井通R5.SPC　　測定日時： 2006年12月 8日 4時36分54秒
試料名 :
メモ : 赤色部
測定条件 : 電圧: 30.0kV 電流: 0.320mA ﾗｲﾌﾞﾀｲﾑ: 600.00sec パス：Vac
定量条件
定量法： 標準
分析元素： Na,Mg,Al,Si,P,S,K,Ca,Ti,V,Cr,Mn,Fe,Ni,Rb,Sr,Zr,Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	11 Na2O	1.1589	1.3171	0.0145019	617	0.5694
2	12 MgO	0.8173	1.4283	0.0038973	1067	0.2585
3	13 Al2O3	20.0212	13.8323	0.0503451	58291	0.1198
4	14 SiO2	63.8634	74.8740	0.2198919	267553	0.1508
5	15 P2O5	2.5594	1.2702	0.0172702	10798	0.1219
6	16 SO3	nd				
7	19 K2O	2.3291	1.7417	0.0203206	21506	0.0474
8	20 CaO	0.9956	1.2507	0.0077932	11741	0.0413
9	22 TiO2	1.2178	1.0737	0.0074315	19503	0.0335
10	23 V2O5	0.0313	0.0121	0.0001888	592	0.0301
11	24 Cr2O3	0.0150	0.0070	0.0001277	443	0.0203
12	25 MnO	0.1404	0.1394	0.0014905	5328	0.0165
13	26 Fe2O3	6.7228	2.9656	0.0676297	264239	0.0166
14	28 NiO	0.0388	0.0366	0.0004792	1946	0.0145
15	37 Rb2O	0.0153	0.0058	0.0005987	1877	0.0104
16	38 SrO	0.0328	0.0223	0.0012019	3933	0.0115
17	40 ZrO2	0.0407	0.0233	0.0015485	4218	0.0155

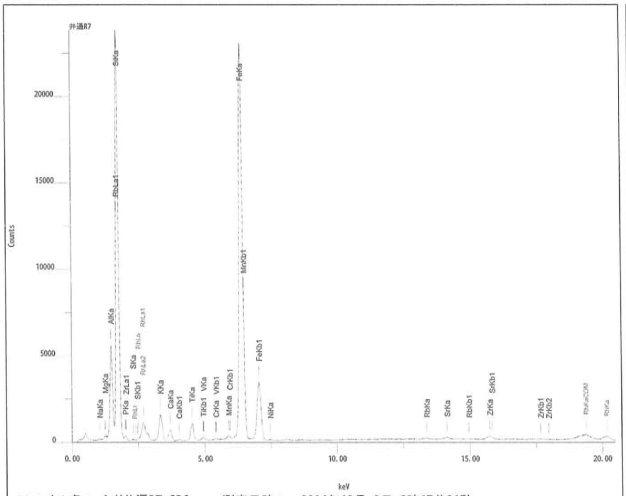
図5　蛍光Ｘ線スペクトル（No.4）



ファイル名： A:¥井通R5N.SPC　　測定日時： 2006年12月 8日 5時22分42秒
試料名 :
メモ : 非赤色部
測定条件 : 電圧: 30.0kV 電流: 1.380mA ﾗｲﾌﾞﾀｲﾑ: 600.00sec パス：Vac
定量条件
定量法： 標準
分析元素： Na,Mg,Al,Si,P,S,K,Ca,Ti,V,Cr,Mn,Fe,Ni,Rb,Sr,Zr,Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	11 Na2O	1.2204	1.3685	0.0040197	738	0.4876
2	12 MgO	1.5409	2.6567	0.0019290	2277	0.2222
3	13 Al2O3	21.7145	14.8013	0.0141454	70630	0.1044
4	14 SiO2	63.8423	73.8470	0.0559656	293664	0.1337
5	15 P2O5	1.9707	0.9649	0.0034002	9169	0.1076
6	16 SO3	nd				
7	19 K2O	2.2154	1.6344	0.0049580	22629	0.0417
8	20 CaO	1.0502	1.3016	0.0021130	13728	0.0363
9	22 TiO2	1.2594	1.0955	0.0019731	22331	0.0295
10	23 V2O5	0.0529	0.0202	0.0000819	1107	0.0265
11	24 Cr2O3	0.0544	0.0249	0.0001187	1773	0.0179
12	25 MnO	0.0884	0.0866	0.0002446	3770	0.0143
13	26 Fe2O3	4.8890	2.1277	0.0128971	217311	0.0143
14	28 NiO	0.0370	0.0344	0.0001260	2206	0.0118
15	37 Rb2O	0.0127	0.0047	0.0001380	1866	0.0085
16	38 SrO	0.0214	0.0144	0.0002185	3084	0.0093
17	40 ZrO2	0.0304	0.0171	0.0003225	3788	0.0125

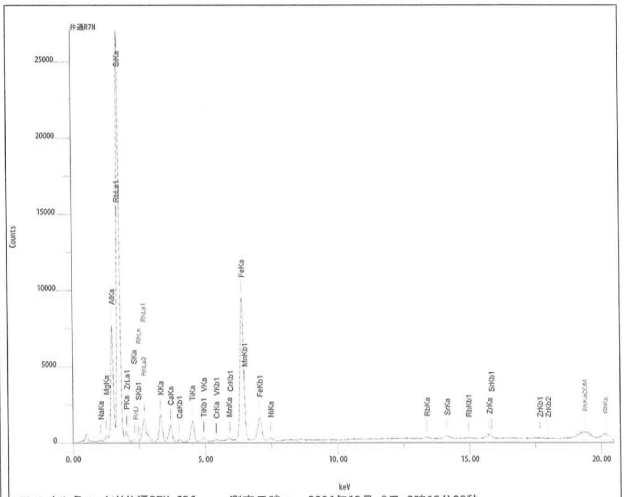
図6　蛍光Ｘ線スペクトル（No.4'）



ファイル名： A:¥井通R7.SPC　　測定日時： 2006年12月 8日 2時17分21秒
試料名 :
メモ : 赤色部
測定条件 : 電圧: 30.0kV 電流: 0.360mA ﾗｲﾌﾞﾀｲﾑ: 600.00sec パス：Vac
定量条件
定量法： 標準
分析元素： Na,Mg,Al,Si,P,S,K,Ca,Ti,V,Cr,Mn,Fe,Ni,Rb,Sr,Zr,Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	11 Na2O	1.2520	1.4647	0.0122127	585	0.6974
2	12 MgO	0.4351	0.7827	0.0016198	499	0.3166
3	13 Al2O3	19.3512	13.7622	0.0383712	49981	0.1453
4	14 SiO2	61.1880	73.8451	0.1690432	231393	0.1797
5	15 P2O5	2.3097	1.1800	0.0128072	9009	0.1426
6	16 SO3	0.0374	0.0339	0.0000697	230	0.0747
7	19 K2O	2.1132	1.6266	0.0152516	18159	0.0548
8	20 CaO	0.8001	1.0346	0.0052092	8829	0.0475
9	22 TiO2	1.0110	0.9176	0.0051575	15227	0.0383
10	23 V2O5	0.0300	0.0120	0.0001512	533	0.0345
11	24 Cr2O3	0.0284	0.0136	0.0002015	785	0.0233
12	25 MnO	0.1704	0.1742	0.0014630	5883	0.0195
13	26 Fe2O3	11.1371	5.0572	0.0889307	390898	0.0200
14	28 NiO	0.0391	0.0380	0.0003442	1572	0.0194
15	37 Rb2O	0.0134	0.0052	0.0003651	1288	0.0142
16	38 SrO	0.0291	0.0204	0.0007448	2742	0.0157
17	40 ZrO2	0.0547	0.0322	0.0014552	4459	0.0212

図7　蛍光Ｘ線スペクトル（No.5）



ファイル名： A:¥井通R7N.SPC　　測定日時： 2006年12月 8日 3時18分38秒
試料名 :
メモ : 非赤色部
測定条件 : 電圧: 30.0kV 電流: 0.400mA ﾗｲﾌﾞﾀｲﾑ: 600.00sec パス：Vac
定量条件
定量法： 標準
分析元素： Na,Mg,Al,Si,P,S,K,Ca,Ti,V,Cr,Mn,Fe,Ni,Rb,Sr,Zr,Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	11 Na2O	1.0117	1.1444	0.0108726	579	0.4177
2	12 MgO	1.2983	2.2581	0.0053160	1819	0.1897
3	13 Al2O3	23.0539	15.8522	0.0491407	71120	0.0890
4	14 SiO2	62.4487	72.8692	0.1763297	268186	0.1158
5	15 P2O5	3.2177	1.5893	0.0180251	14088	0.0930
6	16 SO3	0.1242	0.1088	0.0002328	854	0.0490
7	19 K2O	2.3779	1.7698	0.0170826	22599	0.0363
8	20 CaO	1.1853	1.4819	0.0076254	14360	0.0317
9	22 TiO2	1.1781	1.0338	0.0058878	19315	0.0258
10	23 V2O5	0.0297	0.0114	0.0001465	574	0.0232
11	24 Cr2O3	0.0373	0.0172	0.0002601	1127	0.0156
12	25 MnO	0.0965	0.0954	0.0008620	3852	0.0123
13	26 Fe2O3	3.7875	1.6628	0.0324266	158369	0.0123
14	28 NiO	0.0503	0.0472	0.0005738	2912	0.0099
15	37 Rb2O	0.0175	0.0066	0.0006396	2507	0.0070
16	38 SrO	0.0317	0.0214	0.0010877	4449	0.0077
17	40 ZrO2	0.0537	0.0306	0.0019192	6534	0.0104

図8　蛍光Ｘ線スペクトル（No.5'）

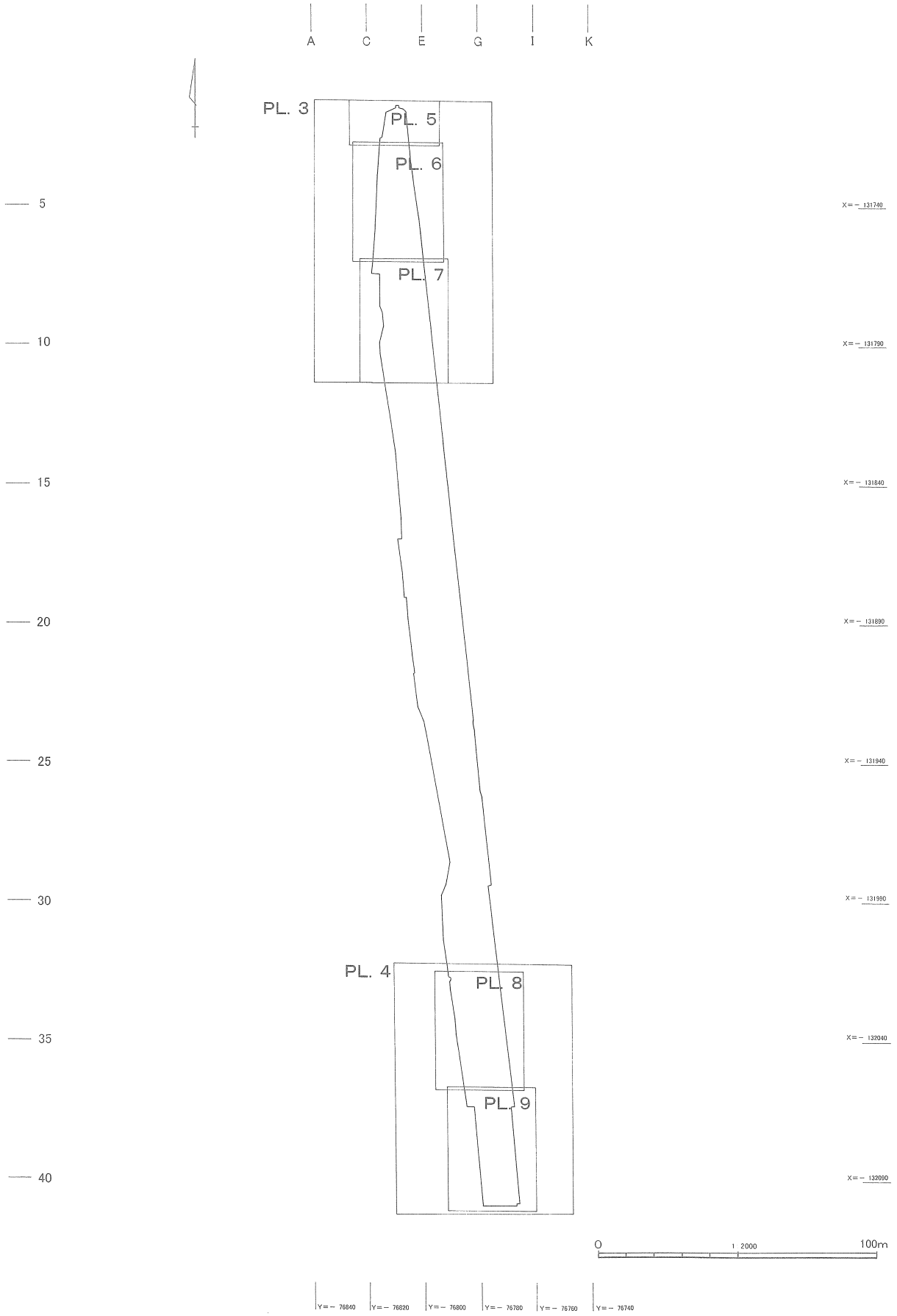
図　　版

井通遺跡　全体図

PL. 1

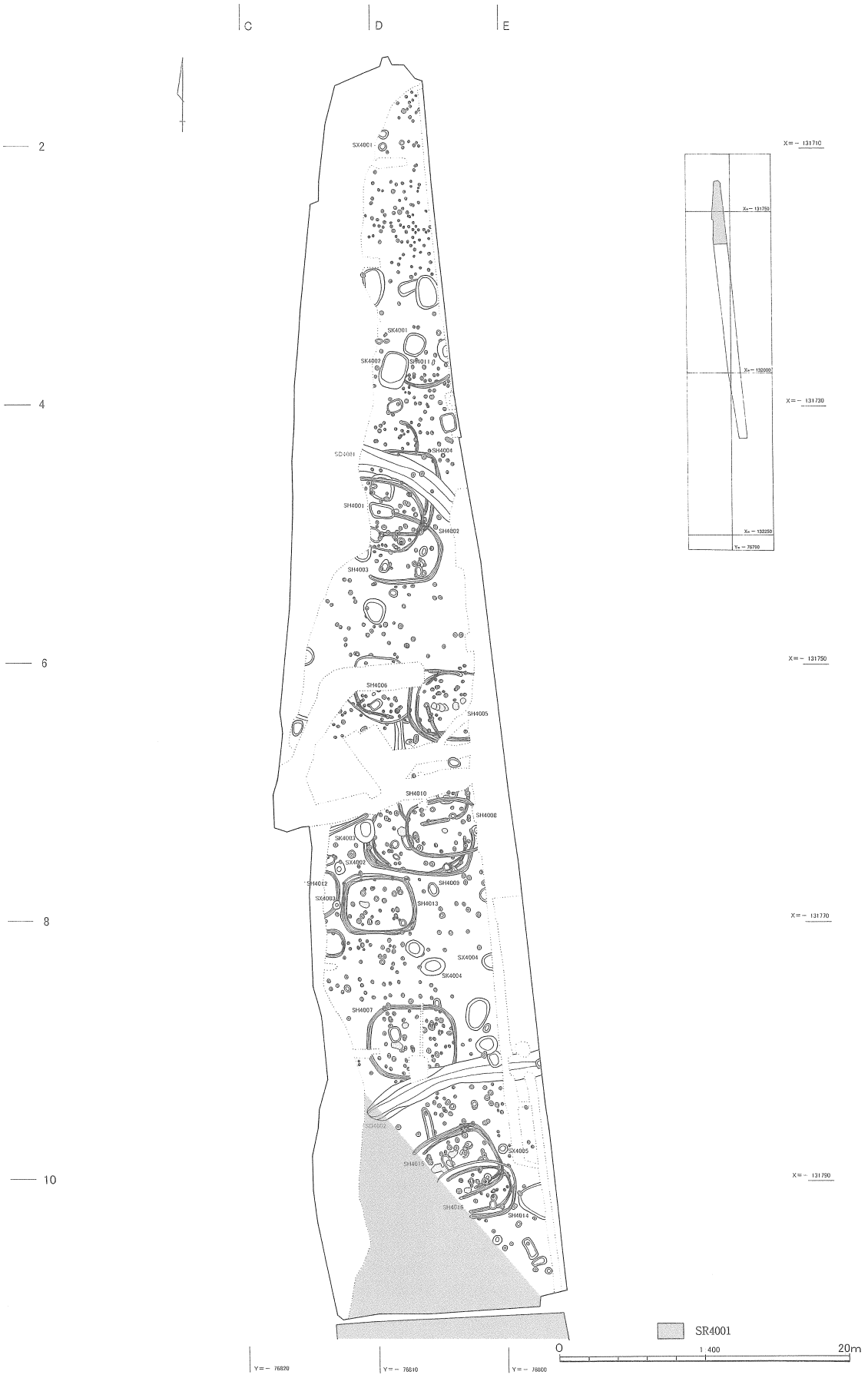
C
D
E
F
G
E
F
G
H
5
10
15
20
25
30
35
40
X=－ 131740
X=－ 131790
X=－ 131840
X=－ 131890
X=－ 131940
X=－ 131990
X=－ 132040
X=－ 132090
Y=－ 76820
Y=－ 76810
Y=－ 76800
Y=－ 76790
Y=－ 76780
Y=－ 76800
Y=－ 76790
Y=－ 76780
Y=－ 76770
SR4001
0
1:1000
40m

井通遺跡　遺構図割付


A
C
E
G
I
K
PL. 3
PL. 5
PL. 6
PL. 7
PL. 4
PL. 8
PL. 9
5
10
15
20
25
30
35
40
X=－ 131740
X=－ 131790
X=－ 131840
X=－ 131890
X=－ 131940
X=－ 131990
X=－ 132040
X=－ 132090
0
1/2000
100m
Y=－ 76840
Y=－ 76820
Y=－ 76800
Y=－ 76780
Y=－ 76760
Y=－ 76740

調査区北部　検出遺構図

PL.3



調査区南部　検出遺構図

F
G
H
34
36
38
40
X=－132030
X=－132050
X=－132070
X=－132090
SK4005
SK4010
SK4016
SH4018
SH4017
SH4019
SH4021
SK4011
SH4023
SH4025
SH4020
SH4022
SH4024
SH4026
SH4029
SH4030
SH4027
SK4013
SH4028
SK4012
SD4003
SH4031
SH4032
SH4033
SH4035
SH4036
SH4034
SK4017
SH4038
SK4014
SK4006
SH4037
SK4007
SH4039
SH4040
SK4008
SK4009
SK4015
SR4001
0
1:400
20m
Y=－76790
Y=－76780
Y=－76770

C
D
E
2
SX4001
X=－ 131710
0
1:200
10m
Y=－ 76820
Y=－ 76810
Y=－ 76800

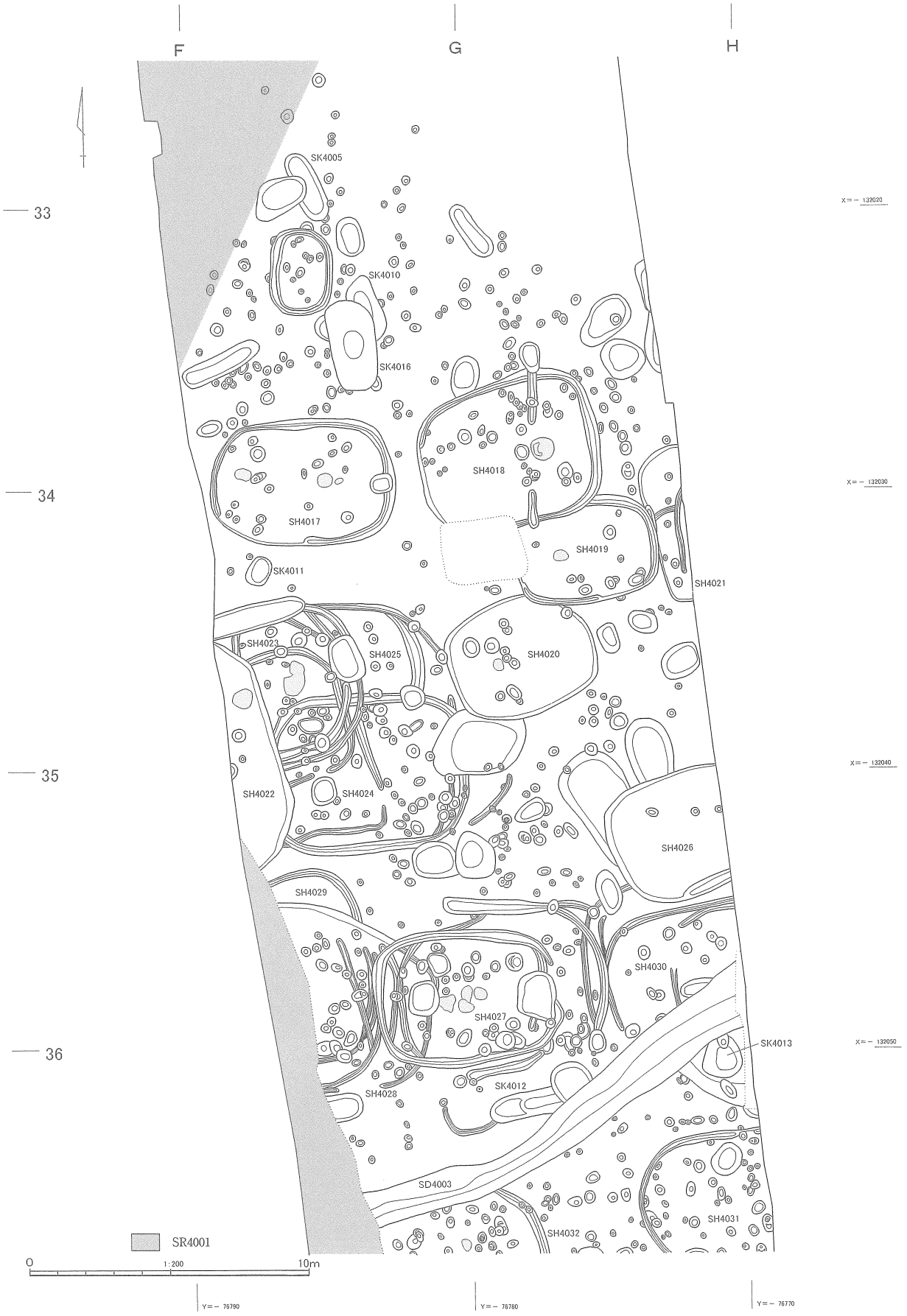
検出遺構図（2）

C
D
E
3
4
5
6
X=－131720
X=－131730
X=－131740
X=－131750
SK4001
SK4002
SH4011
SD4001
SH4004
SH4001
SH4002
SH4003
SH4005
SH4006
0
1:200
10m
Y=－76820
Y=－76810
Y=－76800

検出遺構図（3）

C
D
E
7
8
9
10
11
X=－131760
X=－131770
X=－131780
X=－131790
X=－131800
Y=－76820
Y=－76810
Y=－76800
SH4010
SK4003
SH4008
SX4002
SH4009
SH4012
SH4013
SX4003
SX4004
SK4004
SH4007
SD4002
SH4015
SX4005
SH4016
SH4014
SR4001
0
1:200
10m

検出遺構図（4）


F
G
H
33
34
35
36
X=－132020
X=－132030
X=－132040
X=－132050
Y=－76790
Y=－76780
Y=－76770
SK4005
SK4010
SK4016
SH4017
SH4018
SH4019
SK4011
SH4021
SH4023
SH4025
SH4020
SH4022
SH4024
SH4026
SH4029
SH4030
SH4027
SK4013
SH4028
SK4012
SD4003
SH4032
SH4031
SR4001
0
1:200
10m

検出遺構図（5）

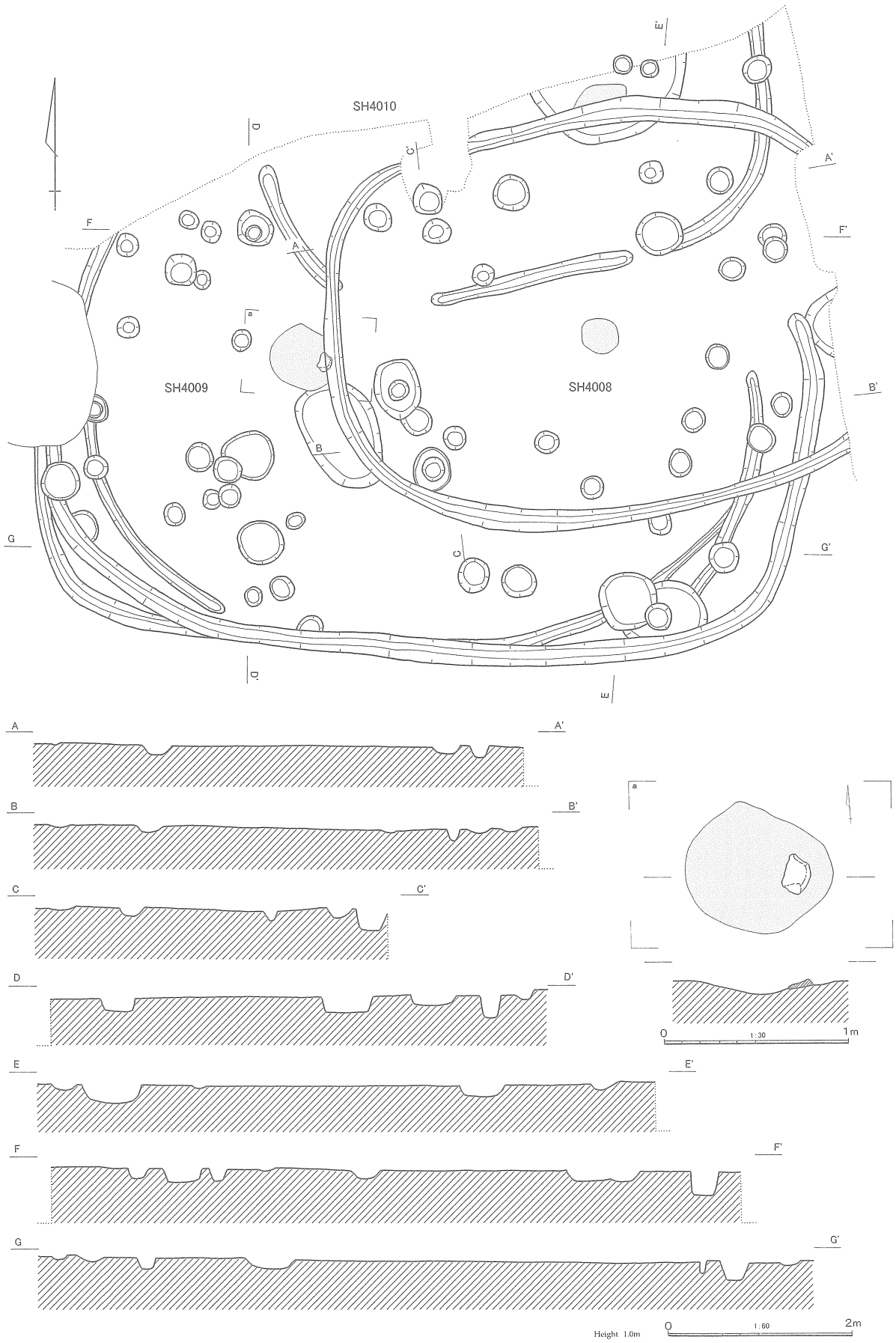
G
H
SH4031
SH4032
SH4033
37
X=－ 132060
SH4038
SH4035
SH4034
SK4017
SH4036
38
X=－ 132070
SK4014
SK4006
SH4037
39
X=－ 132080
SK4007
SH4039
SH4040
SK4008
SK4009
40
X=－ 132090
SK4015
SR4001
0
1:200
10m
Y=－ 76780
Y=－ 76770

SH4001・4005実測図

SH4002～4004実測図

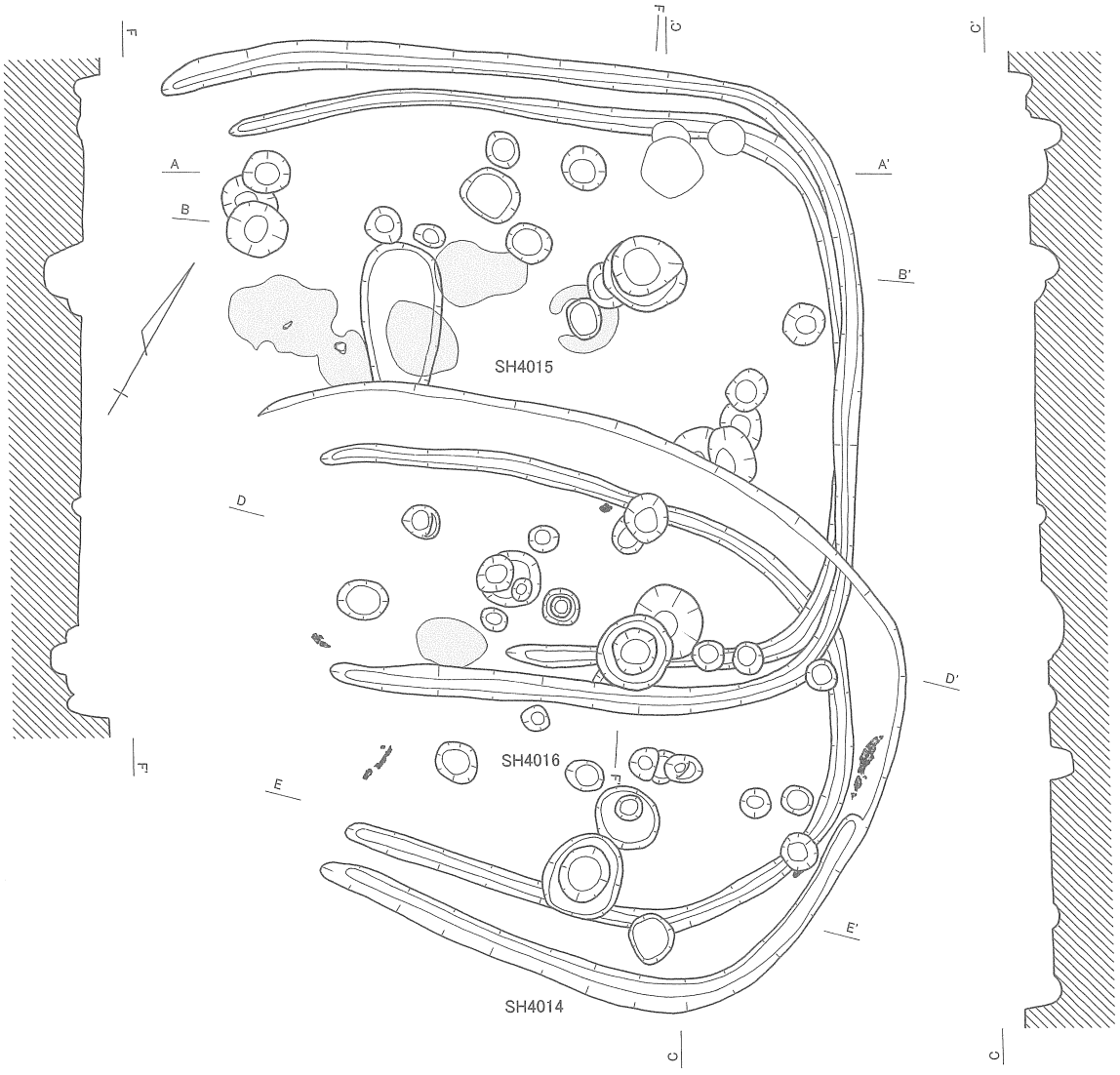
SH4006・4007実測図

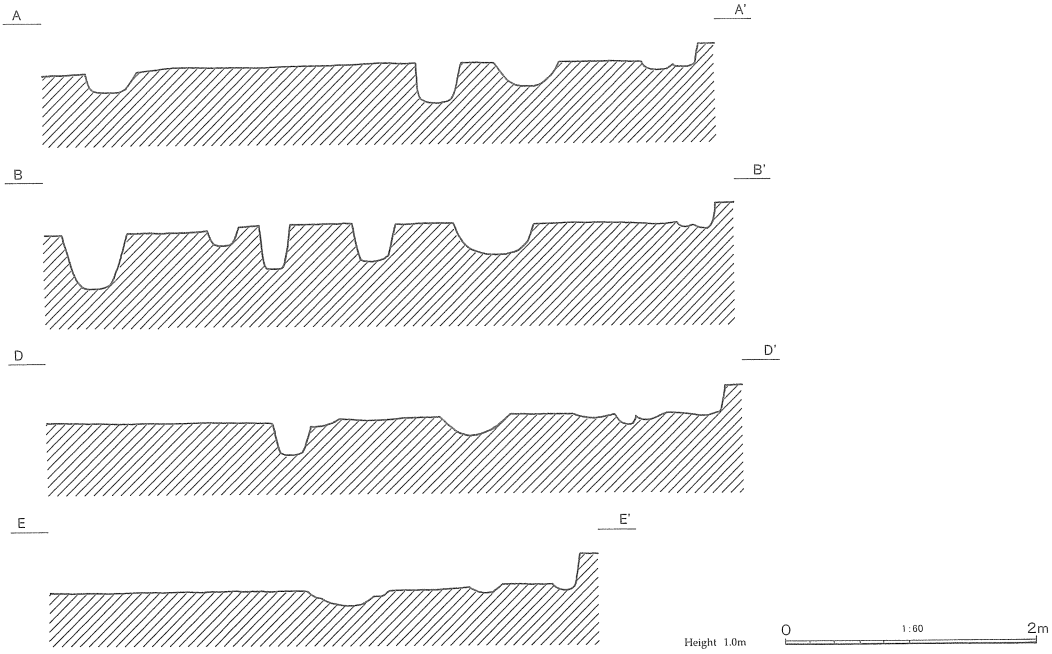
SH4008～4010実測図



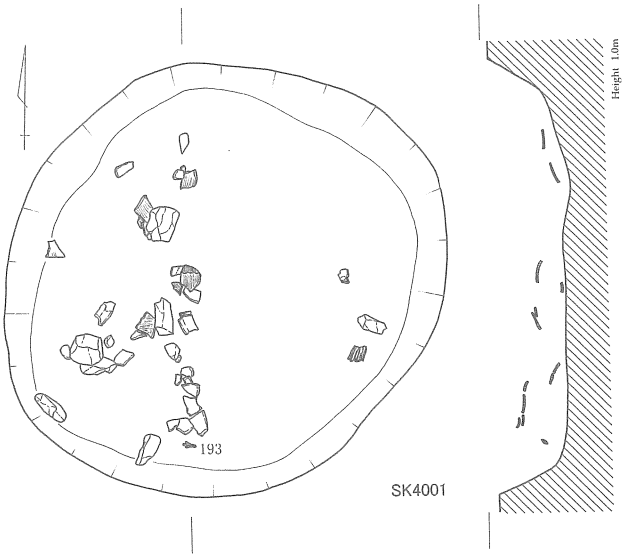
SH4011～4013実測図

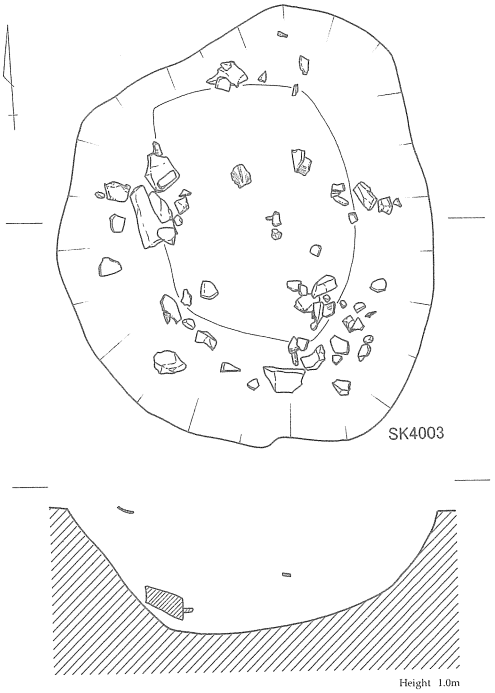
SH4014～4016実測図

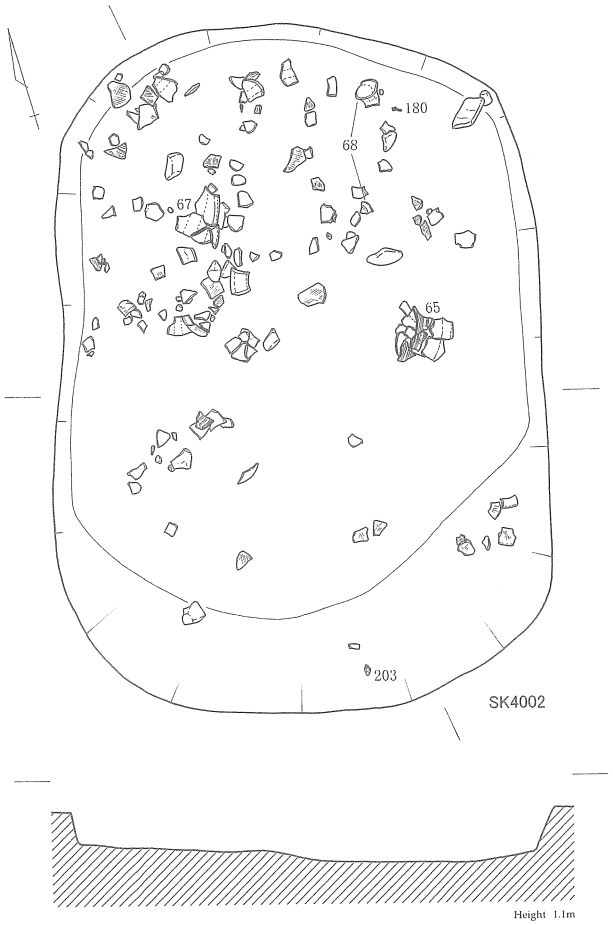


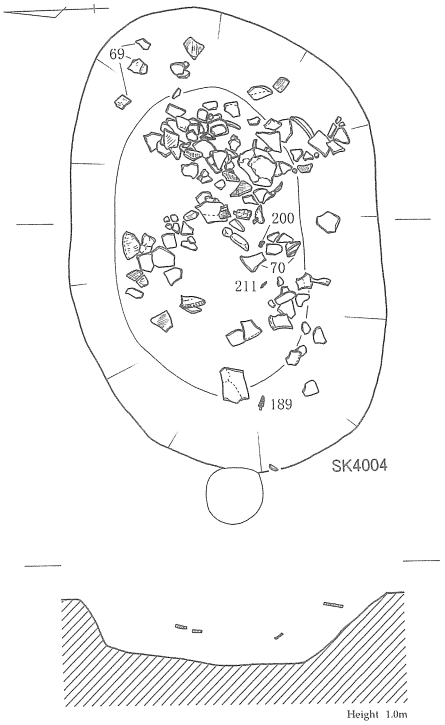


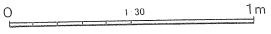
SK4001～4004実測図



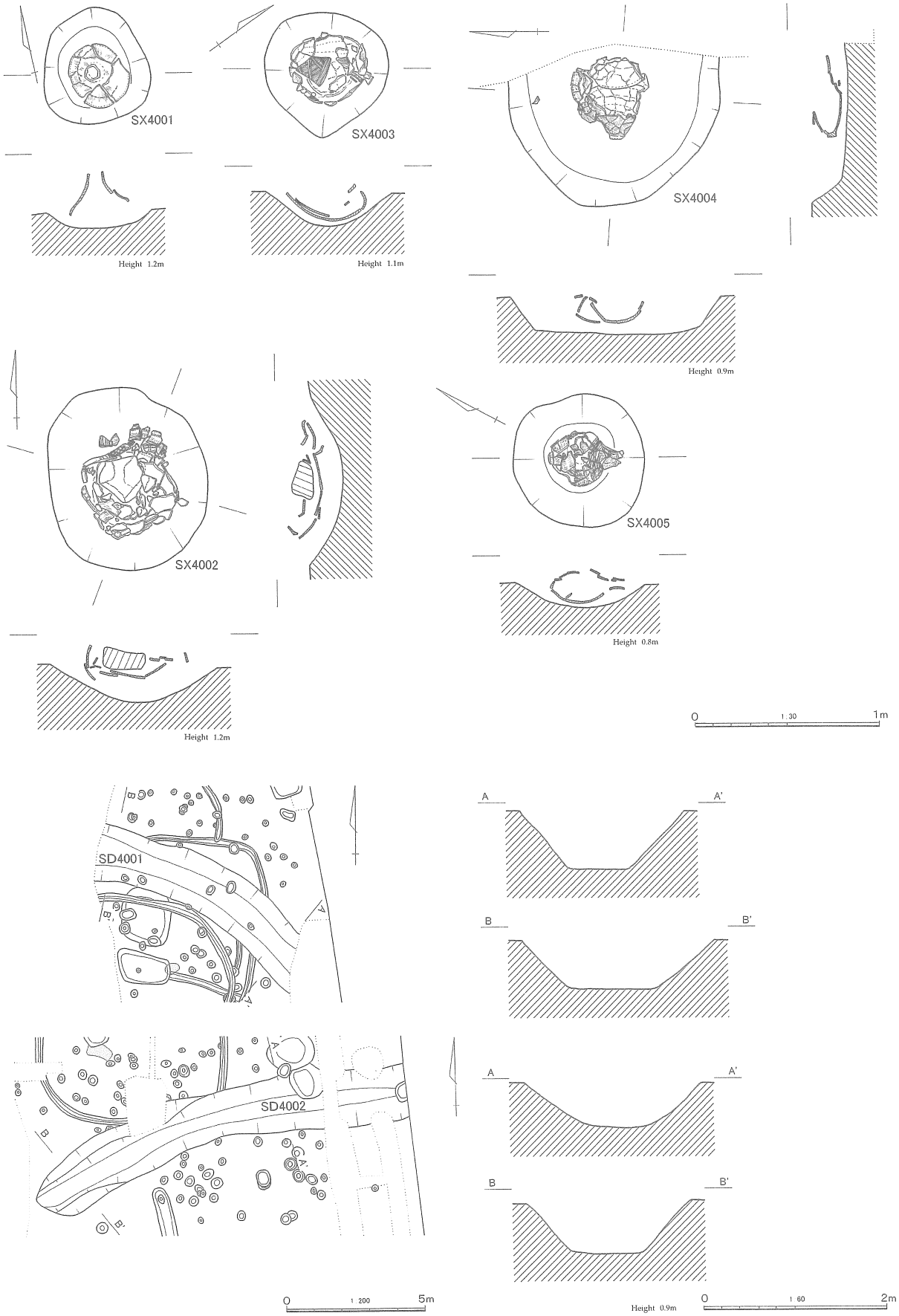




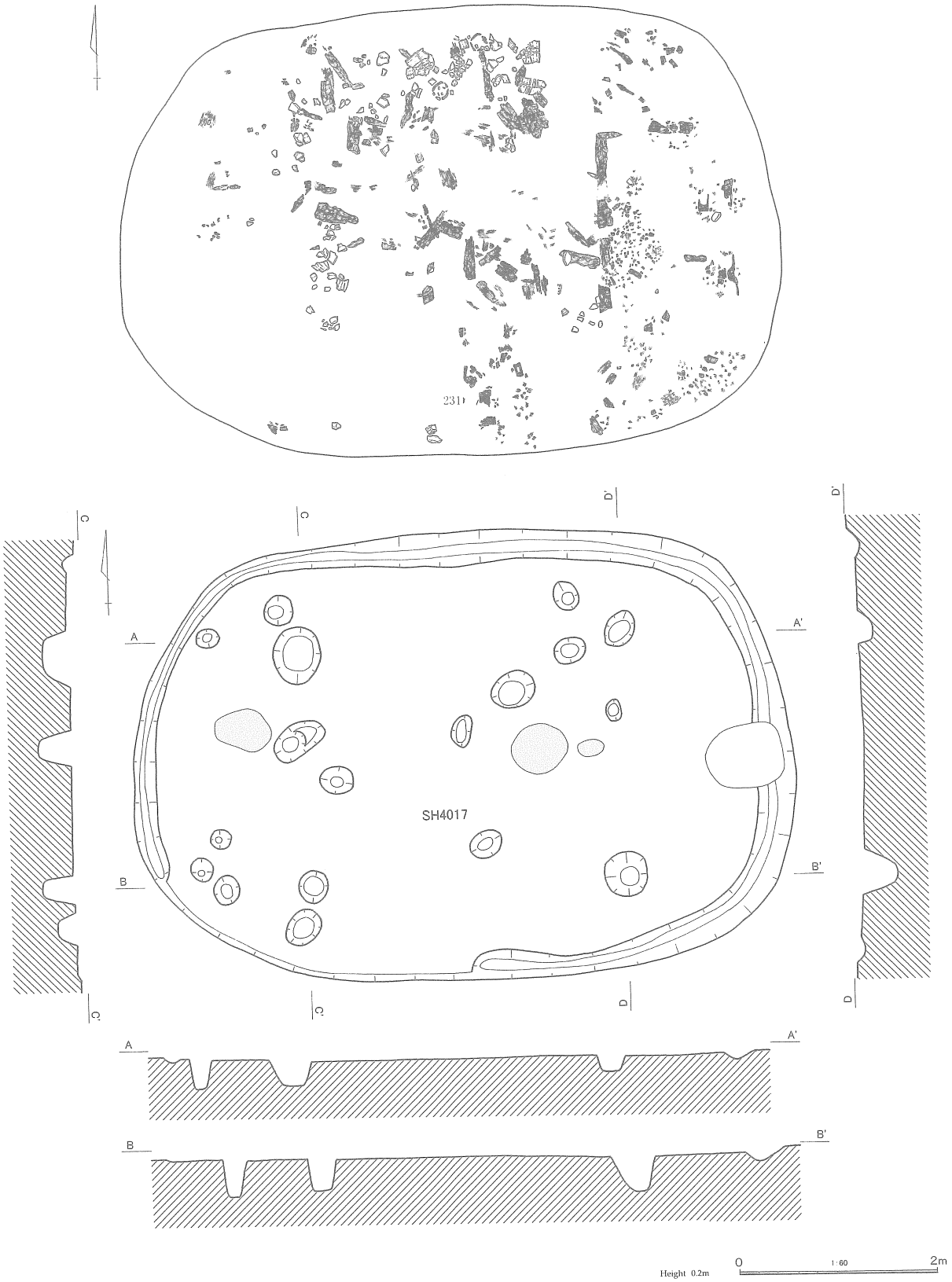




SX4001～4005、SD4001・4002実測図

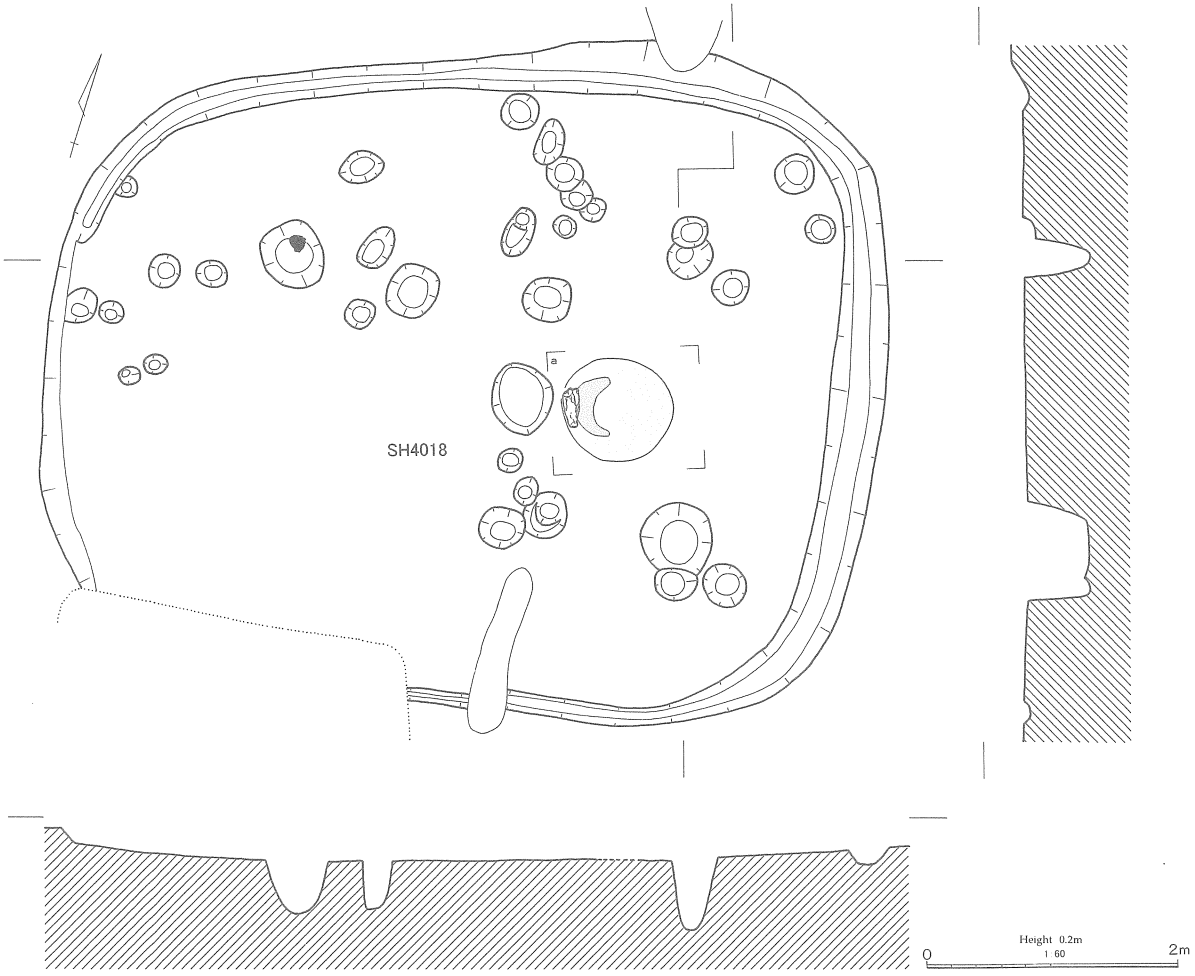


SH4017実測図

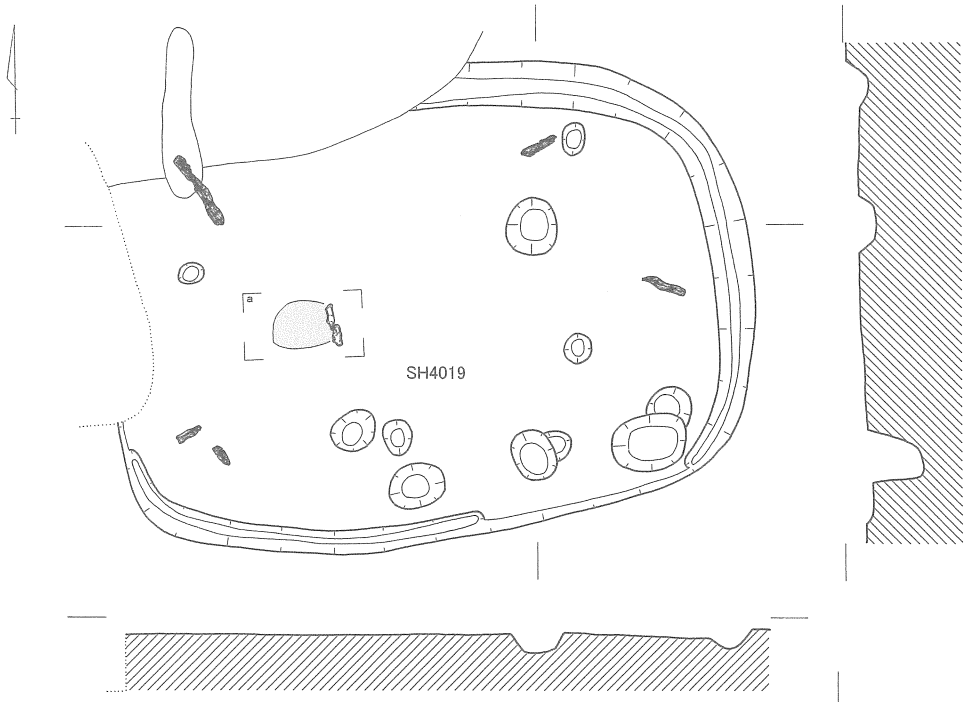


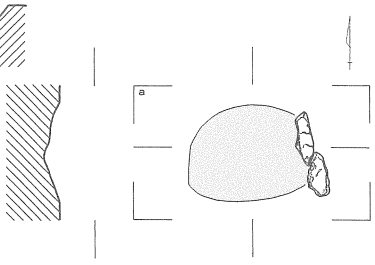
SH4018実測図

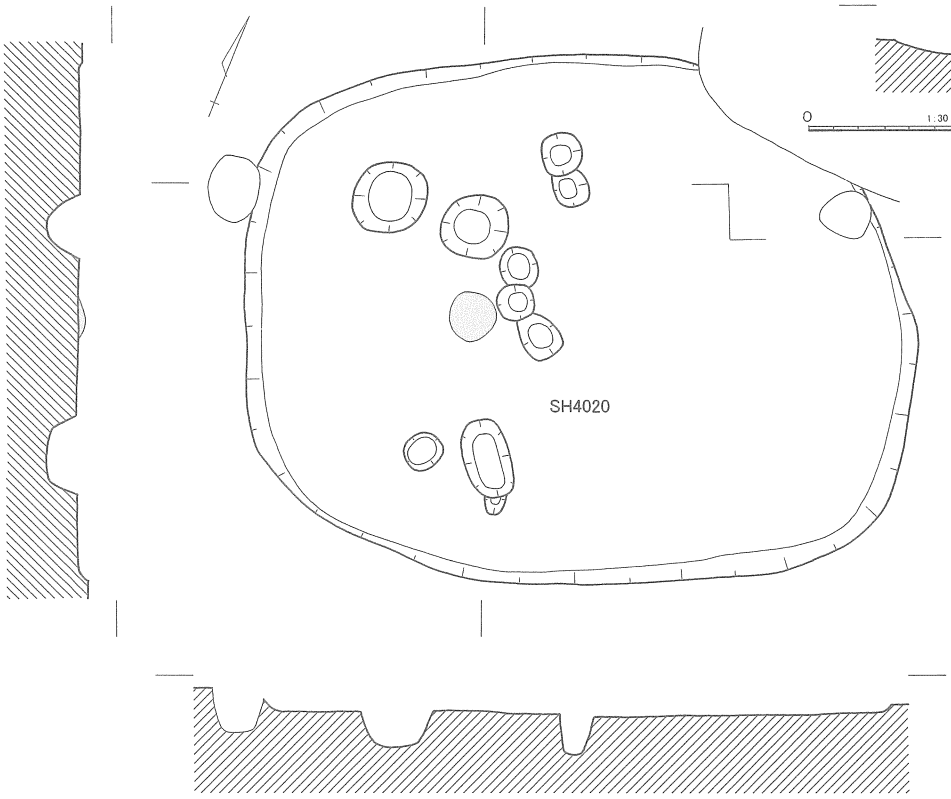
18
195
194
244
19
192
14
212
15
21
20
12
13
a
Height 0.0m
1:30
0
1m

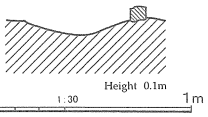

SH4018
a
Height 0.2m
1:60
0
2m

SH4019・4020実測図



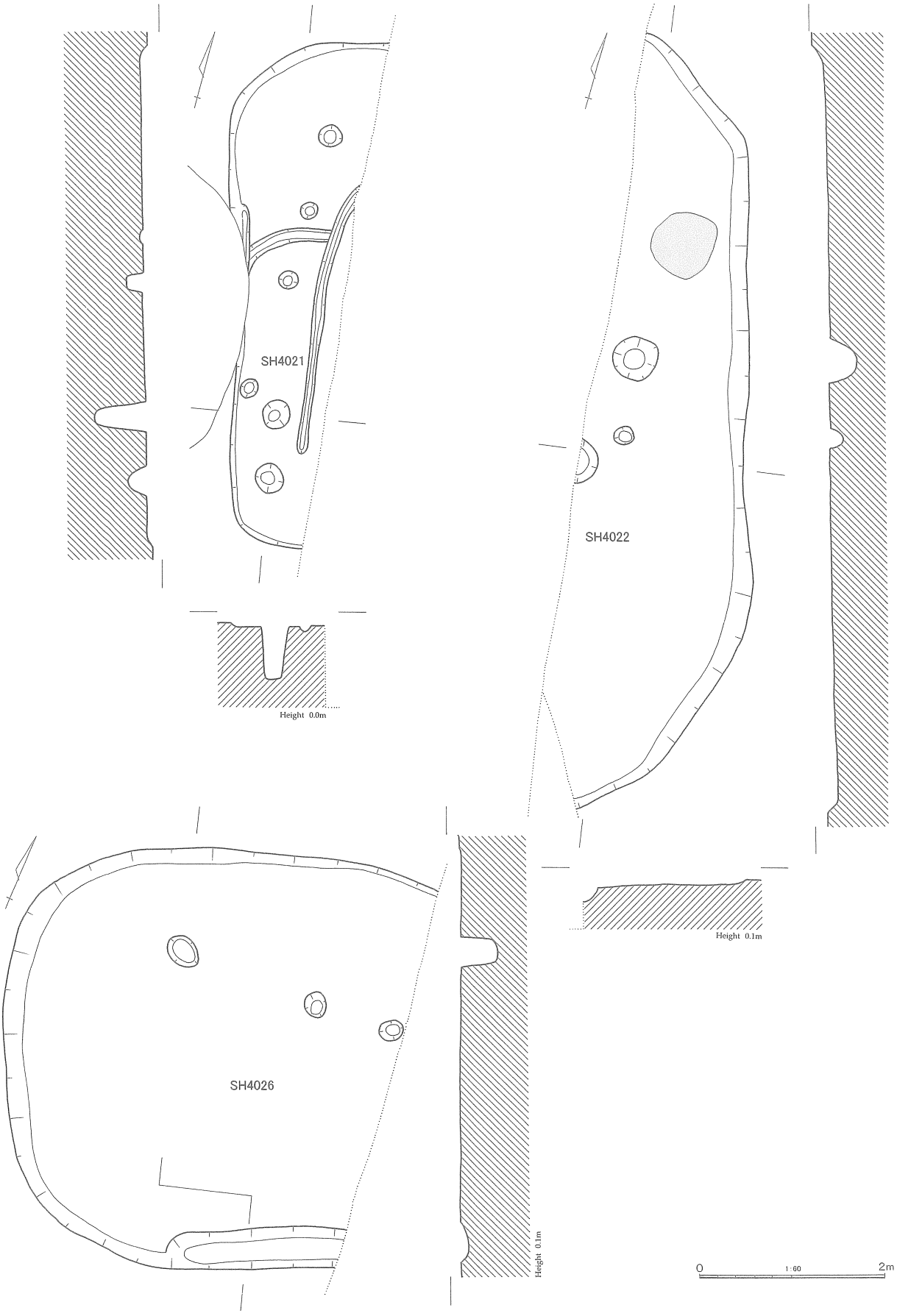






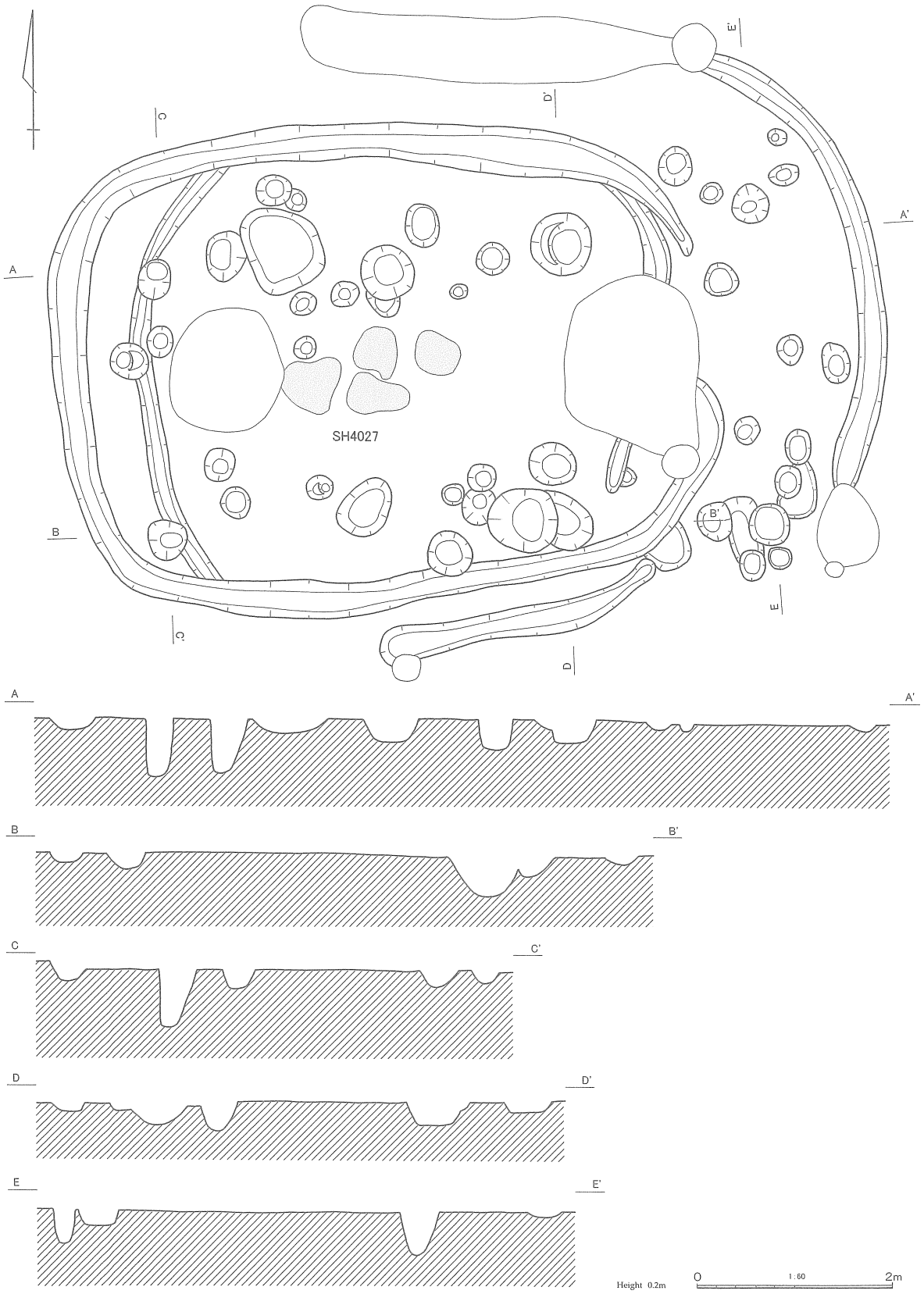
Height 0.1m 0 1:60 2m

SH4021・4022・4026実測図



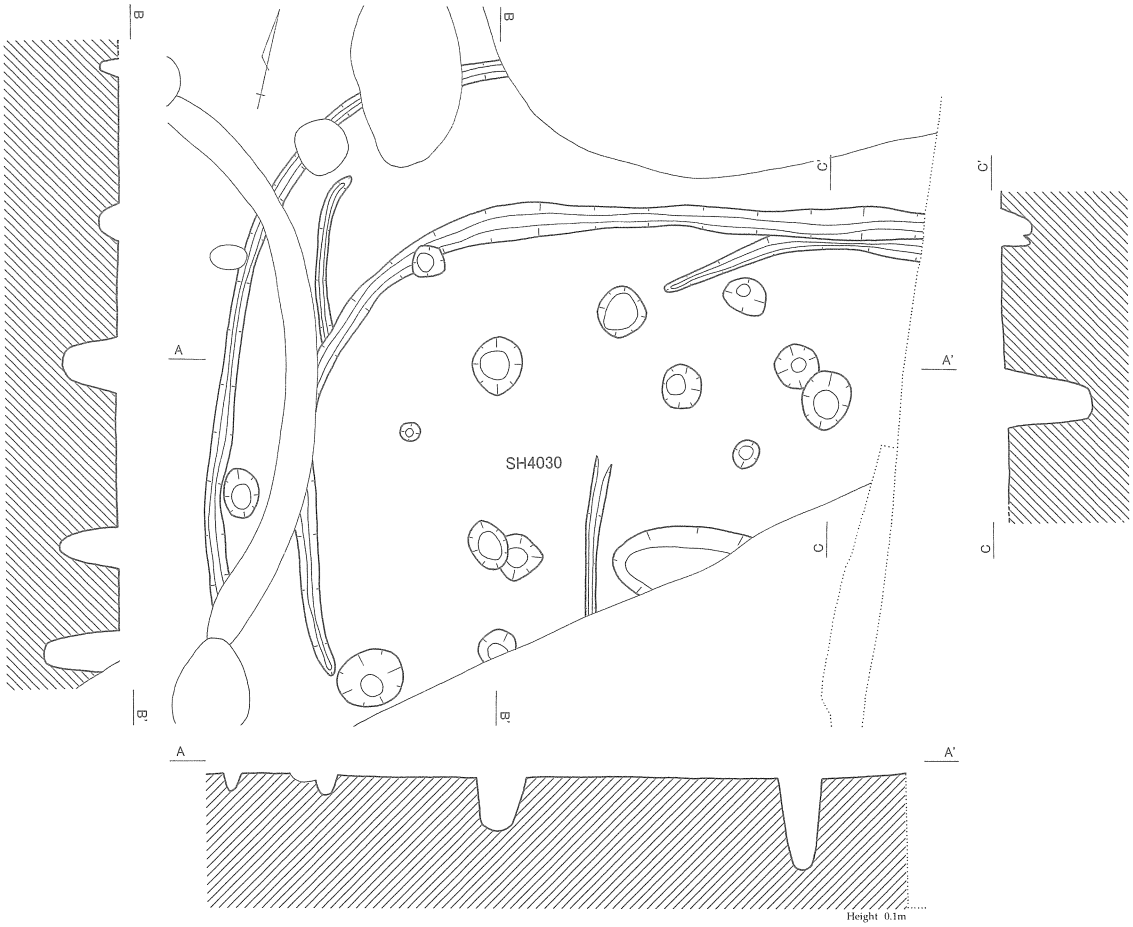
SH4023～4025実測図

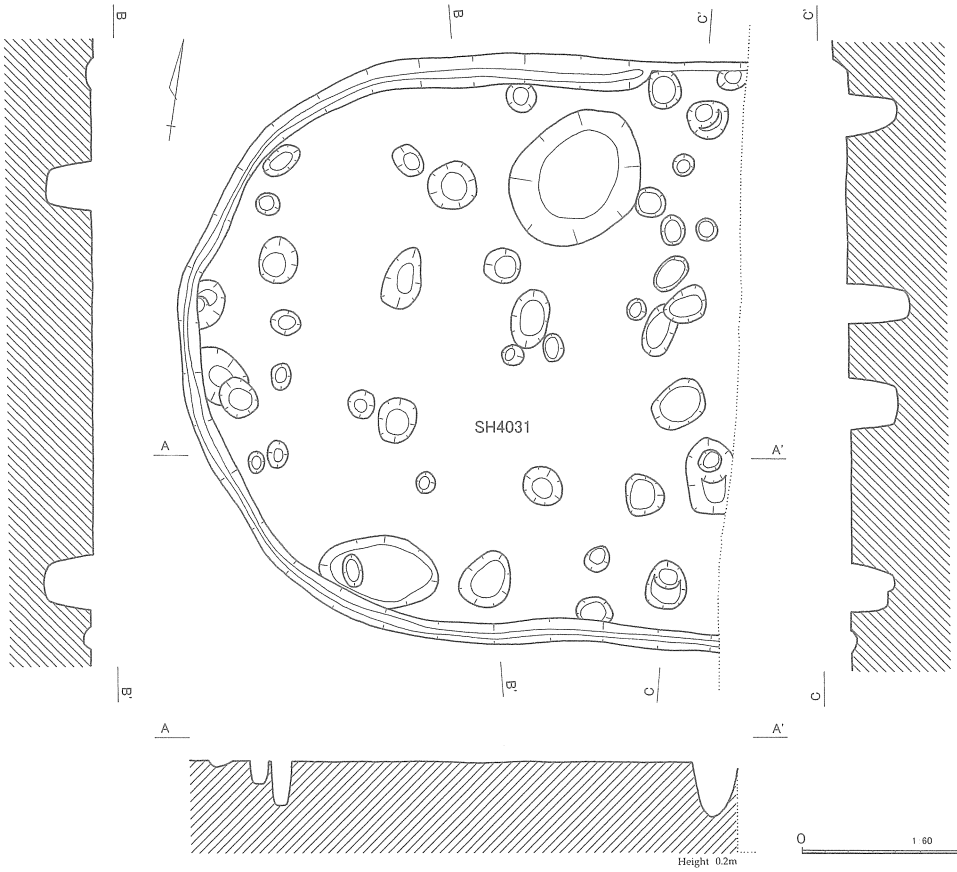
SH4027実測図



SH4028・4029実測図

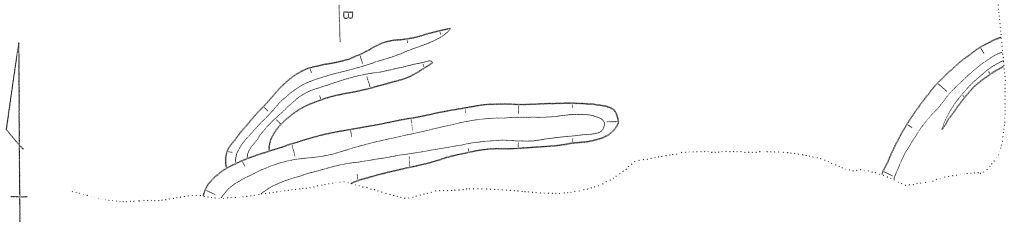
SH4030・4031実測図

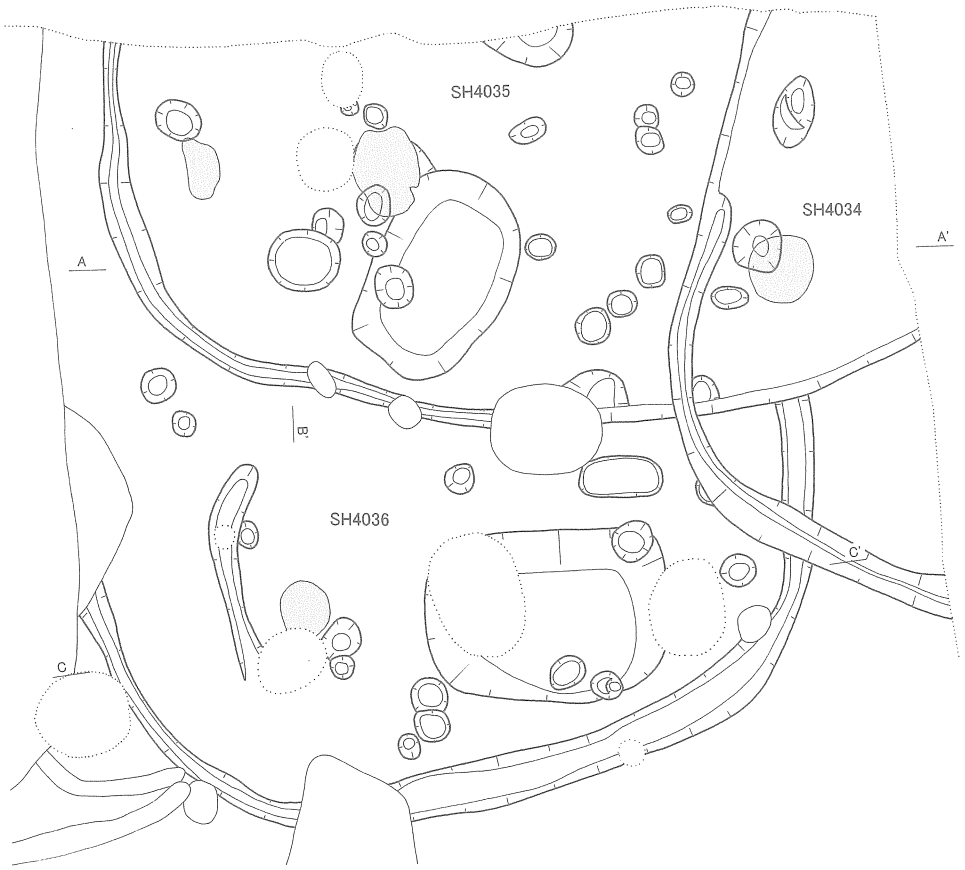


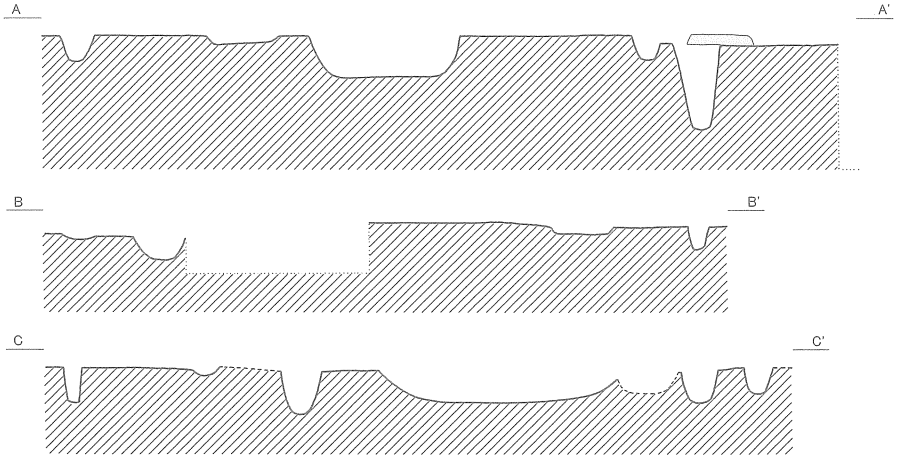


SH4032・4033実測図

SH4034～4036実測図

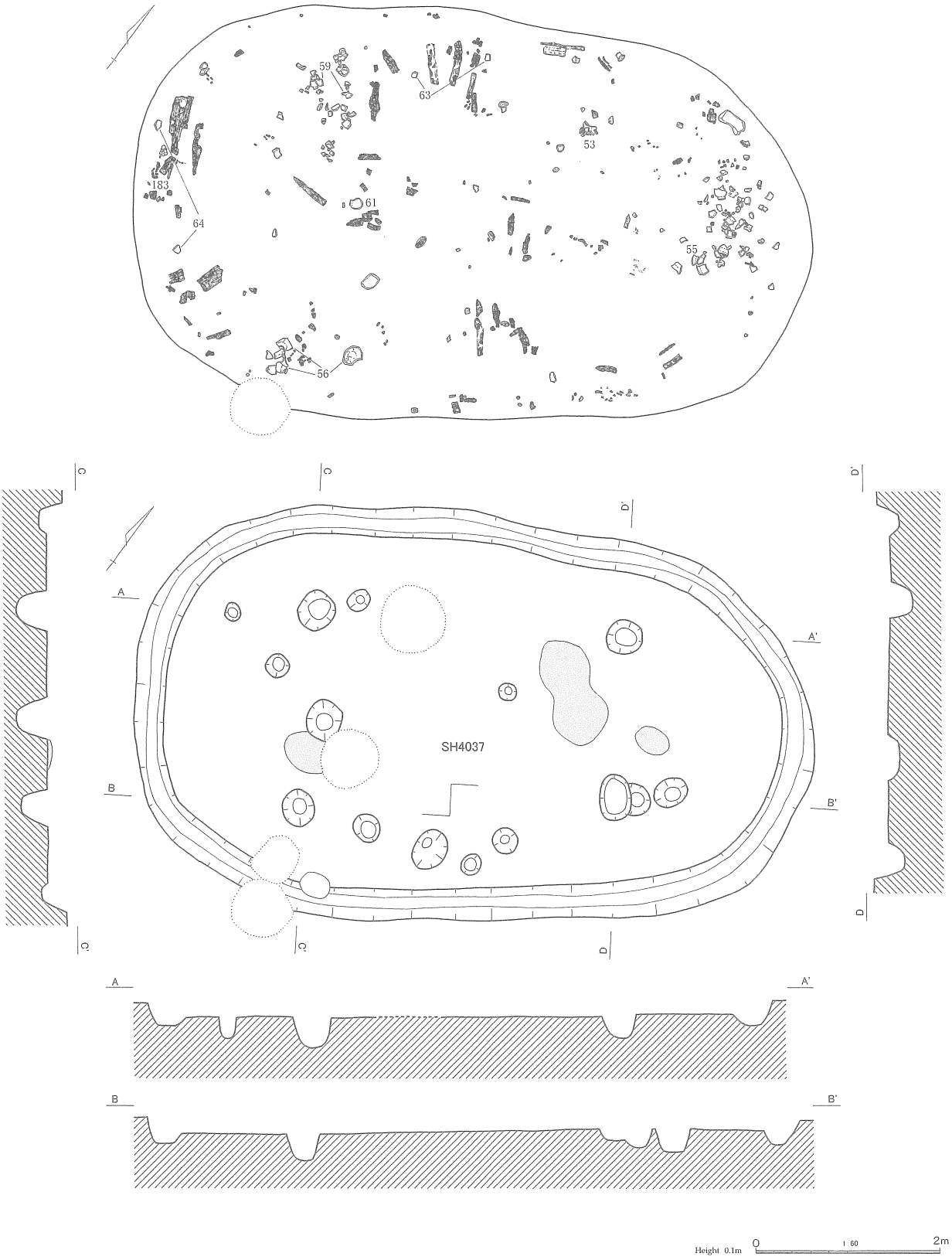




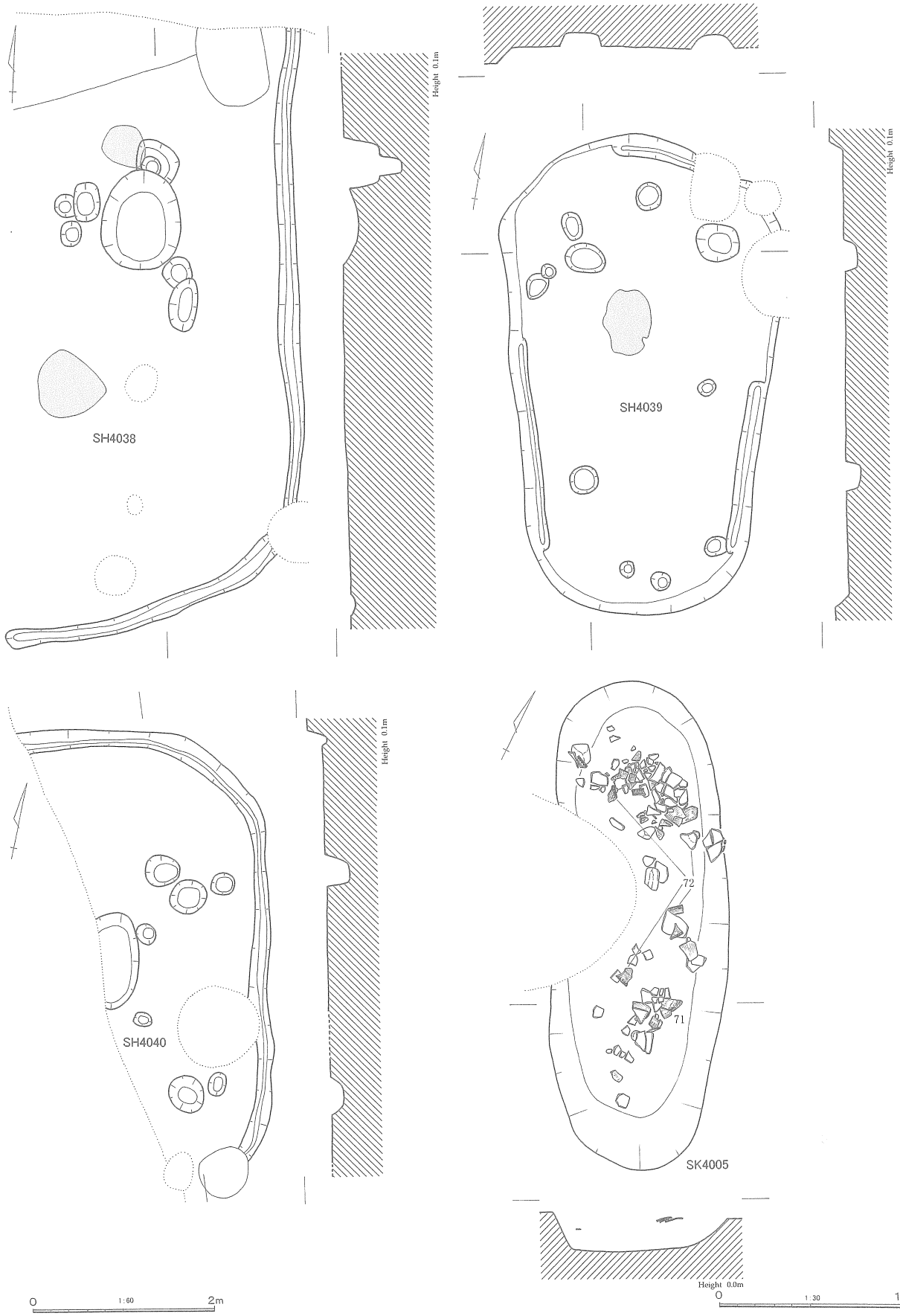


Height 0.1m　0　1/60　2m

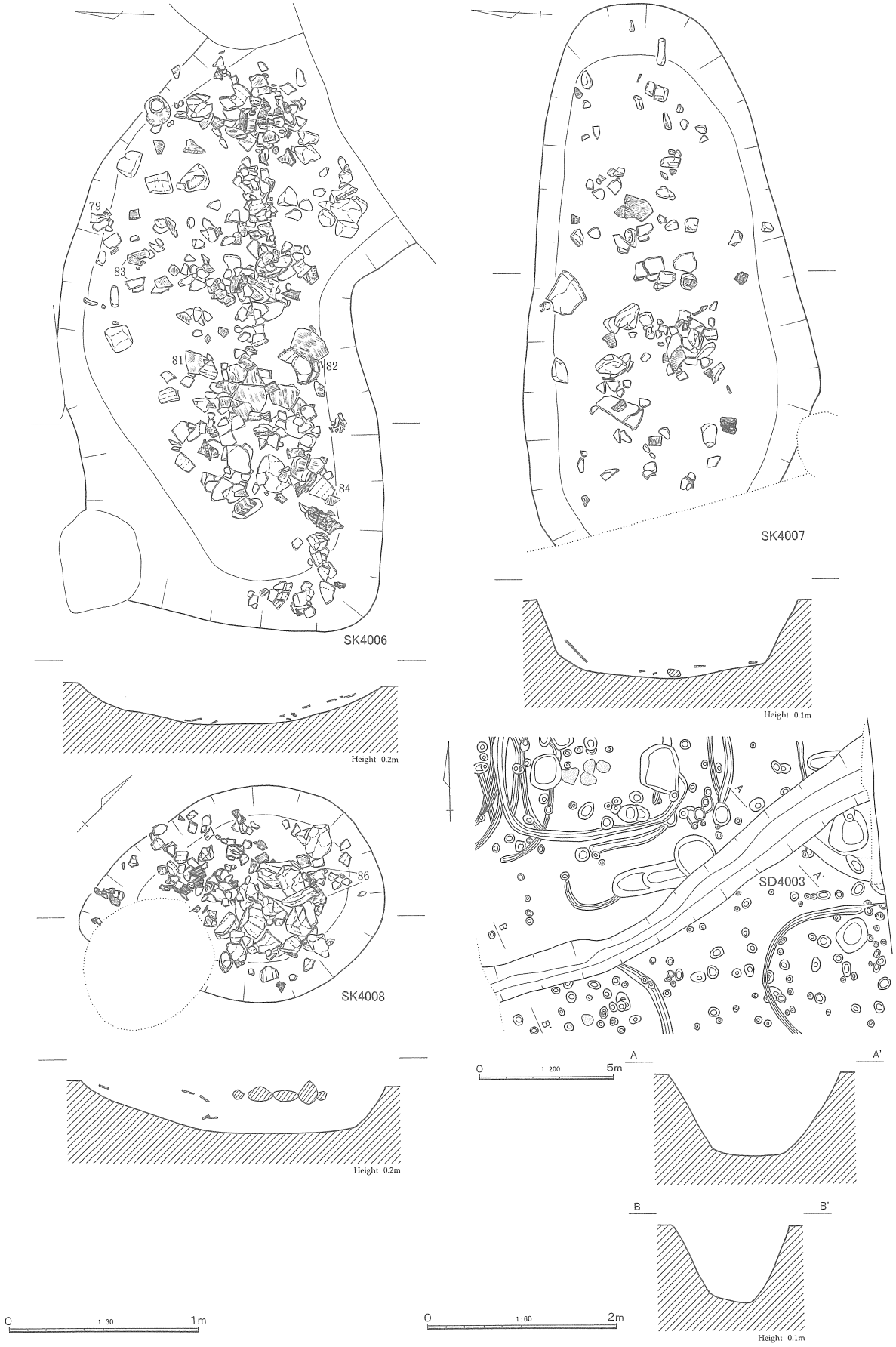
SH4037実測図



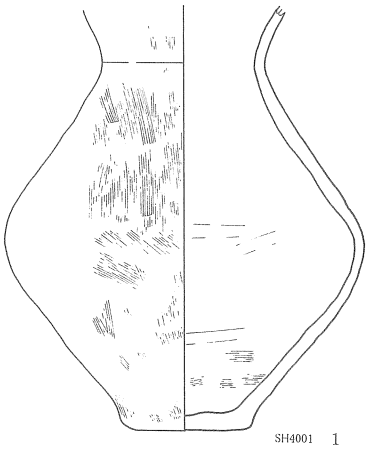
SH4038～4040、SK4005実測図



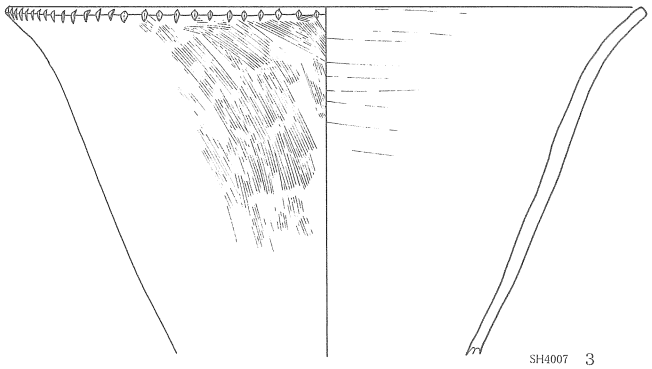
SK4006～4008、SD4003実測図



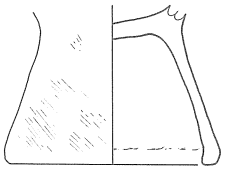
SH4001他出土土器実測図



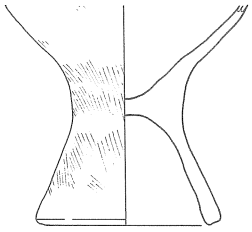
SH4001 1



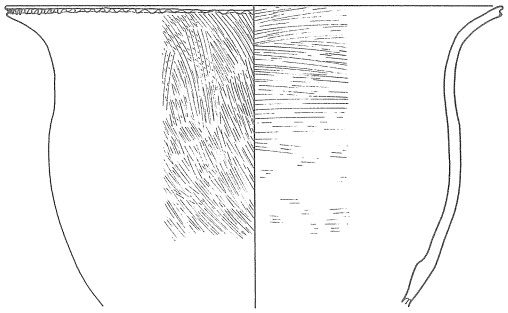
SH4007 3



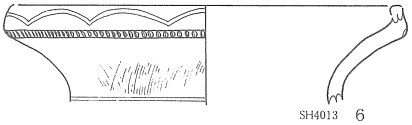
SH4001 2



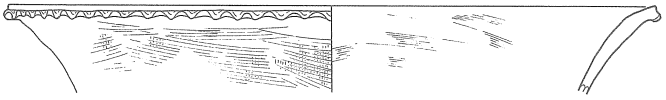
SH4009 4



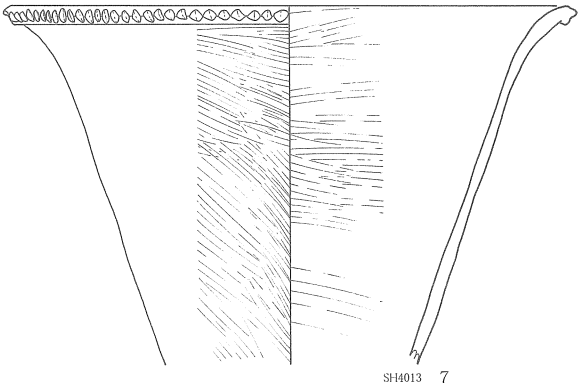
SH4009 5



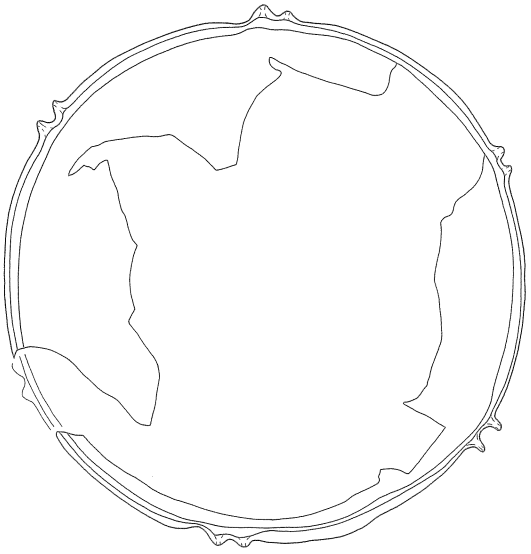
SH4013 6

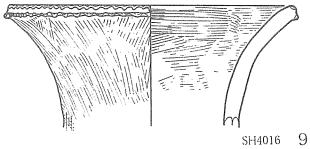


SH4015 8

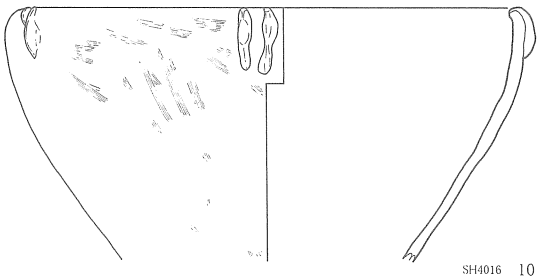


SH4013 7





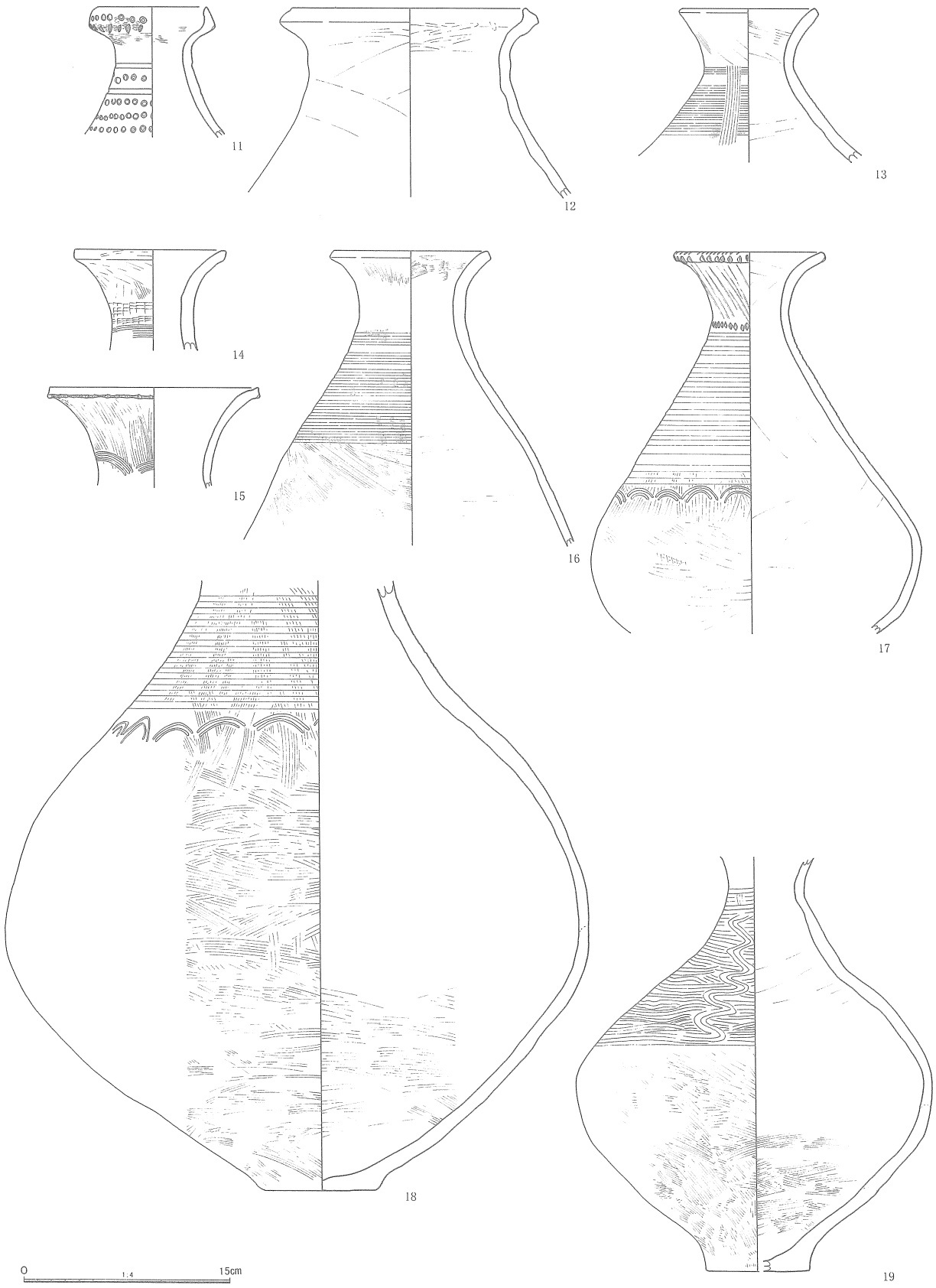
SH4016 9



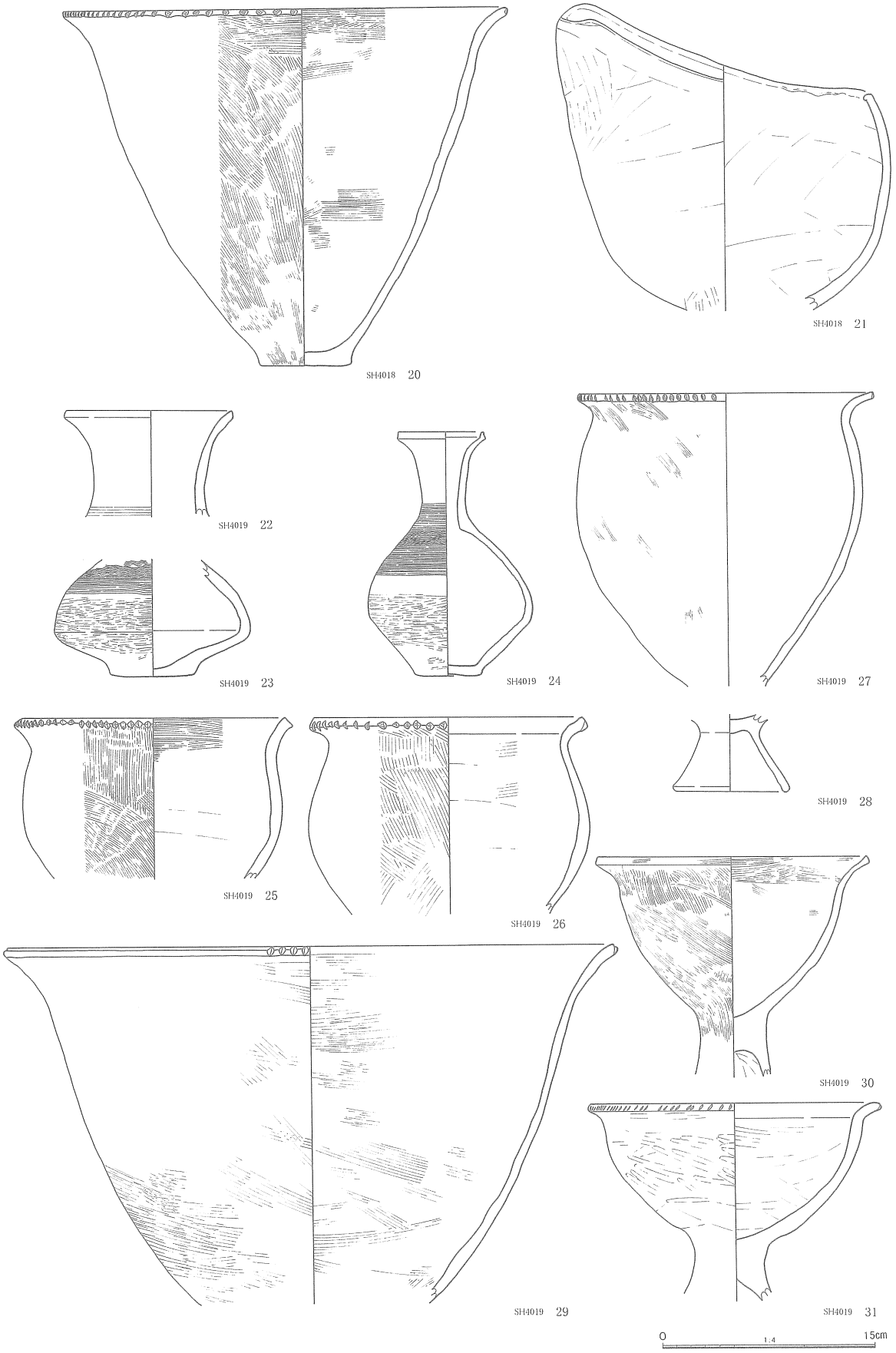
SH4016 10

0 1:4 15cm

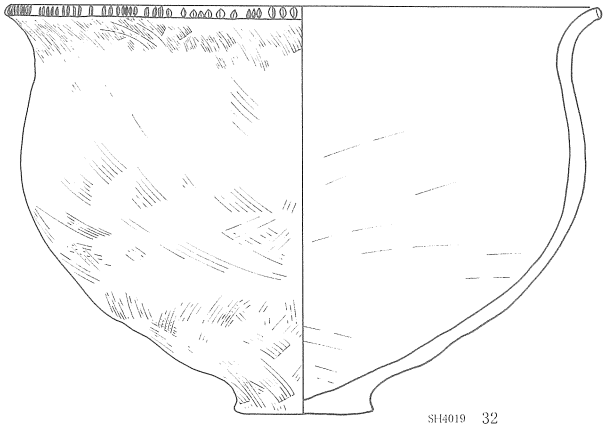
SH4018（1）出土土器実測図

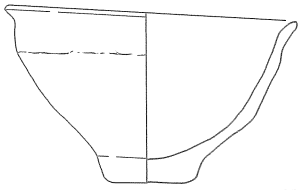


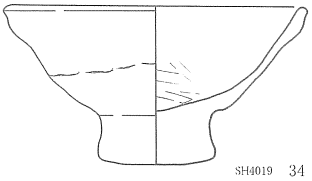
SH4018（2）・SH4019（1）出土土器実測図

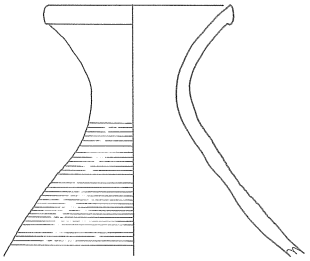


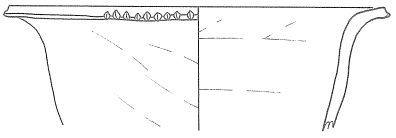
SH4019（2）・SH4020（1）出土土器実測図

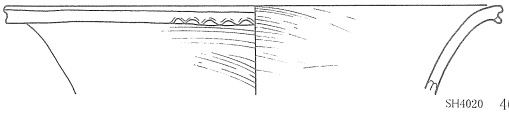

SH4019 32

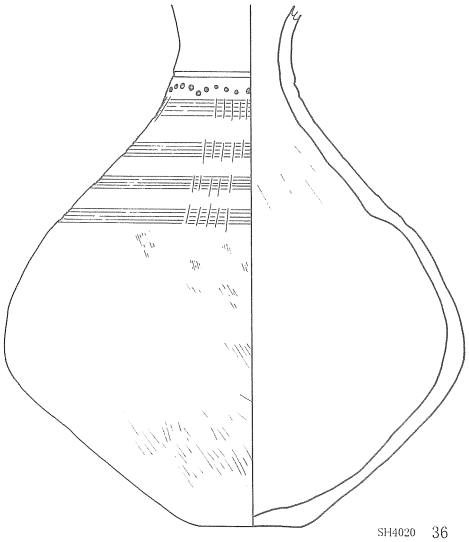

SH4019 33

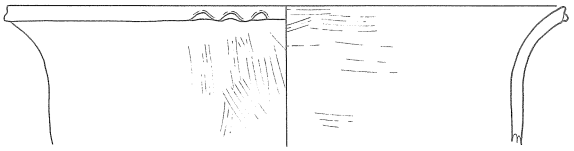

SH4019 34

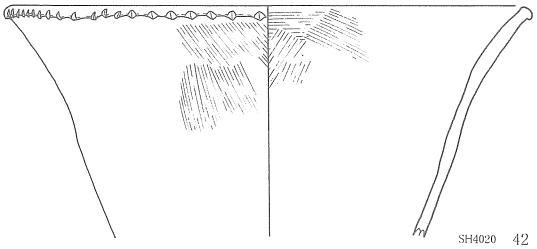

SH4020 35

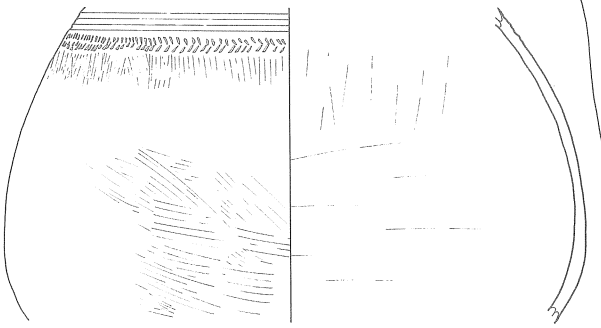

SH4020 39

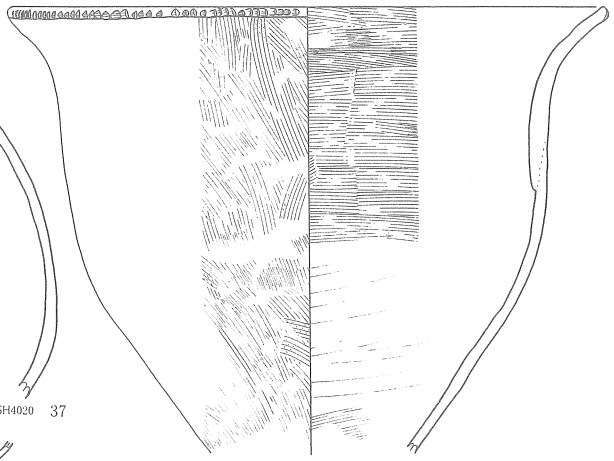

SH4020 40

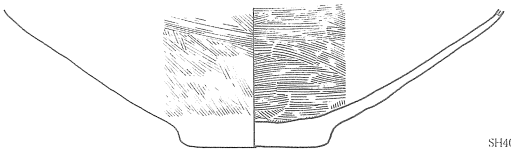

SH4020 36


SH4020 41


SH4020 42

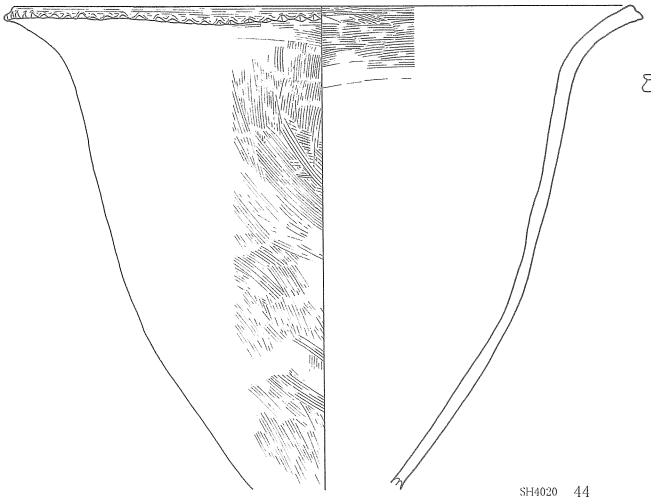

SH4020 37


SH4020 43

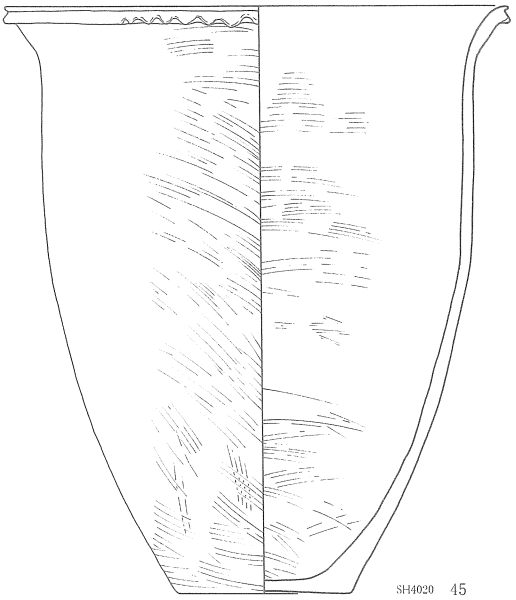

SH4020 38

0 1:4 15cm

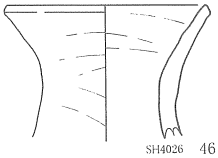
SH4020（2）他出土土器実測図



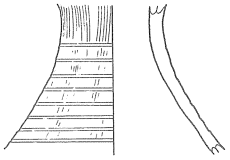
SH4020　44



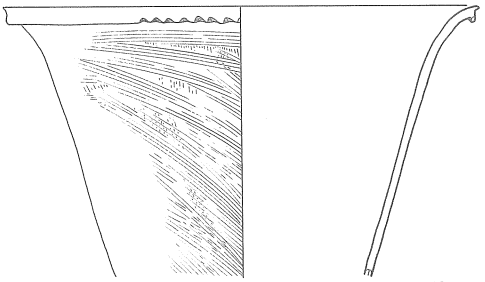
SH4020　45



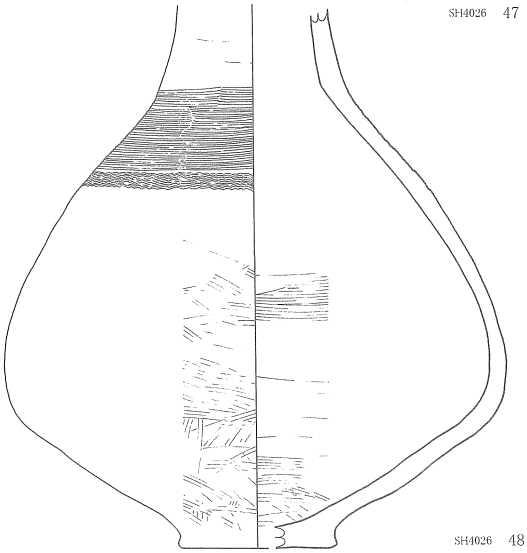
SH4026　46



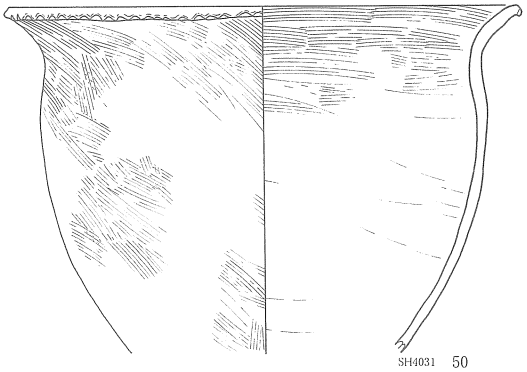
SH4026　47



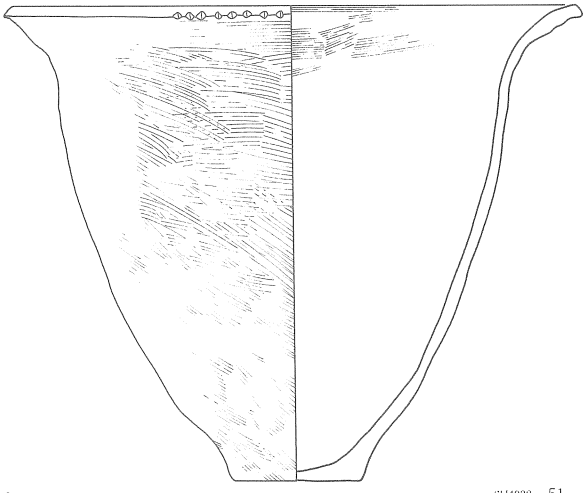
SH4026　49



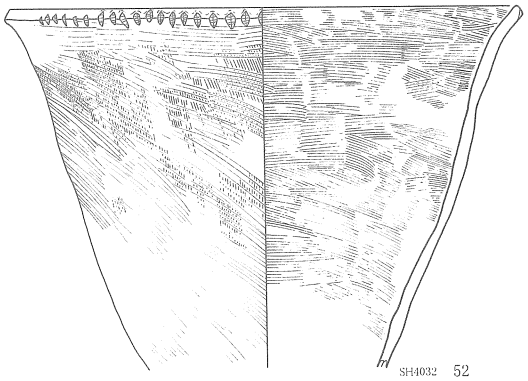
SH4026　48



SH4031　50



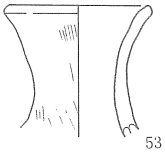
SH4032　51

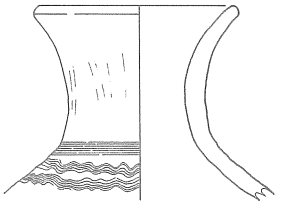


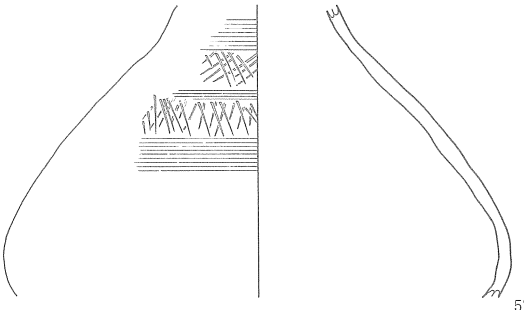
SH4032　52

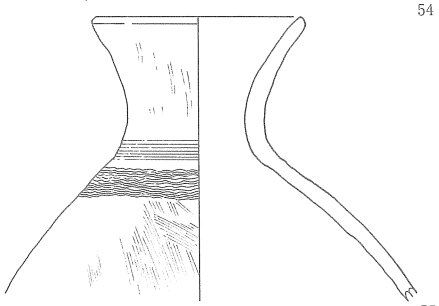
0　1:4　15cm

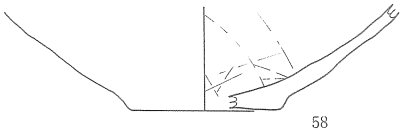
SH4037出土土器実測図

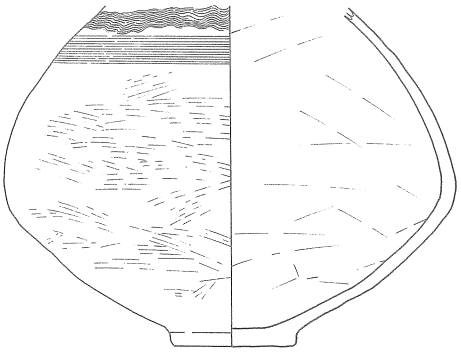

53

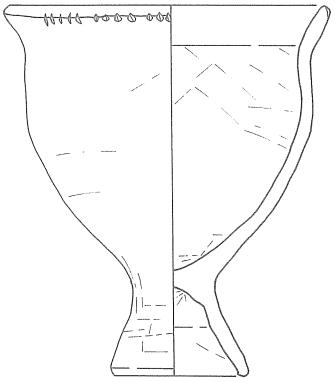

54

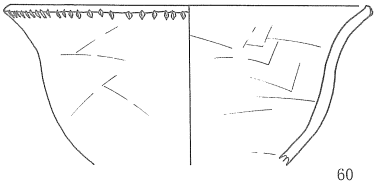

57

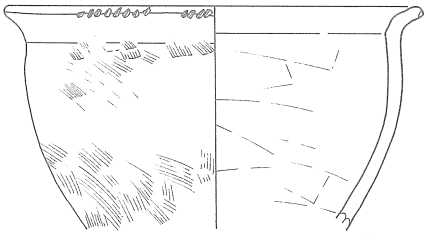

55

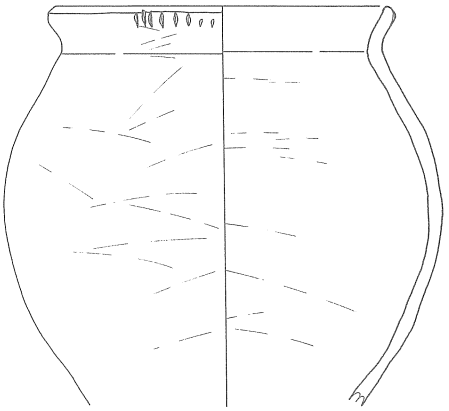

58

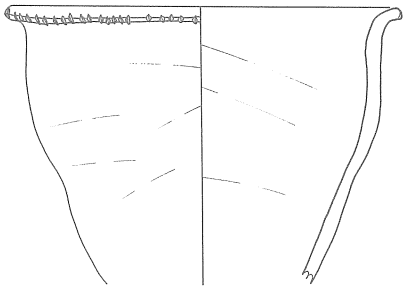

56

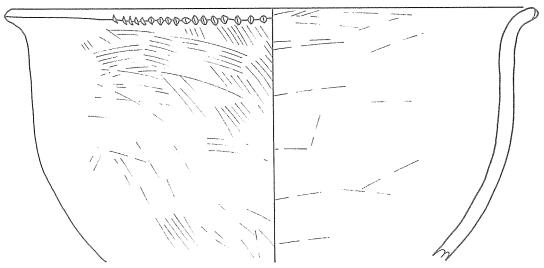

59


60


61

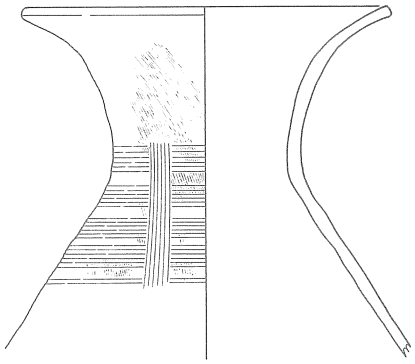

63


62

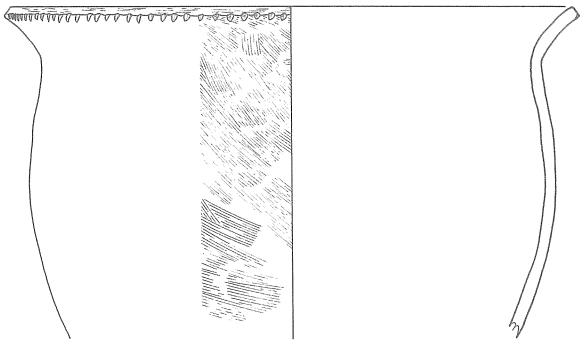

64

0 1:4 15cm

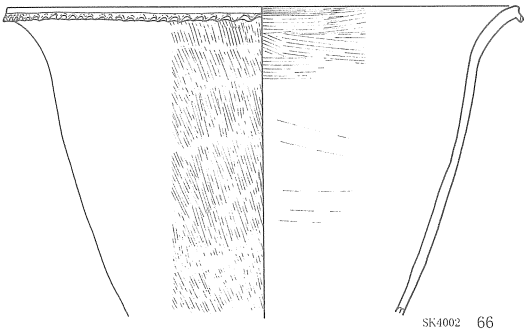
SK4002他出土土器実測図



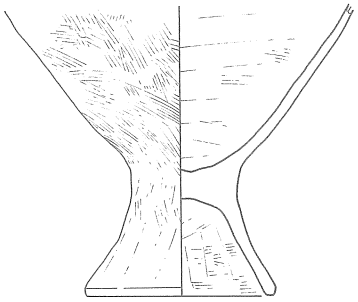
SK4002　65



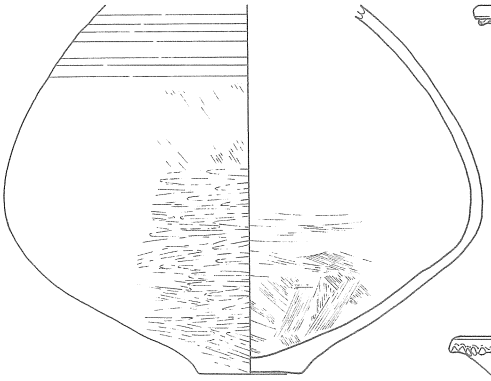
SK4002　67



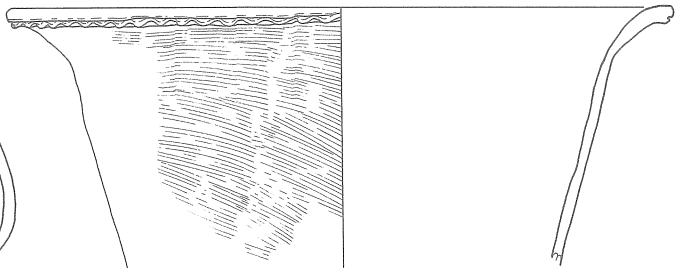
SK4002　66



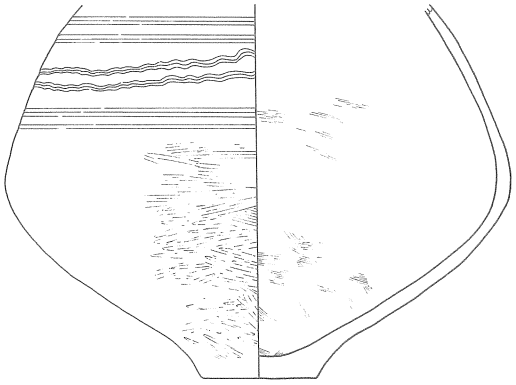
SK4002　68



SK4004　69



SK4005　71

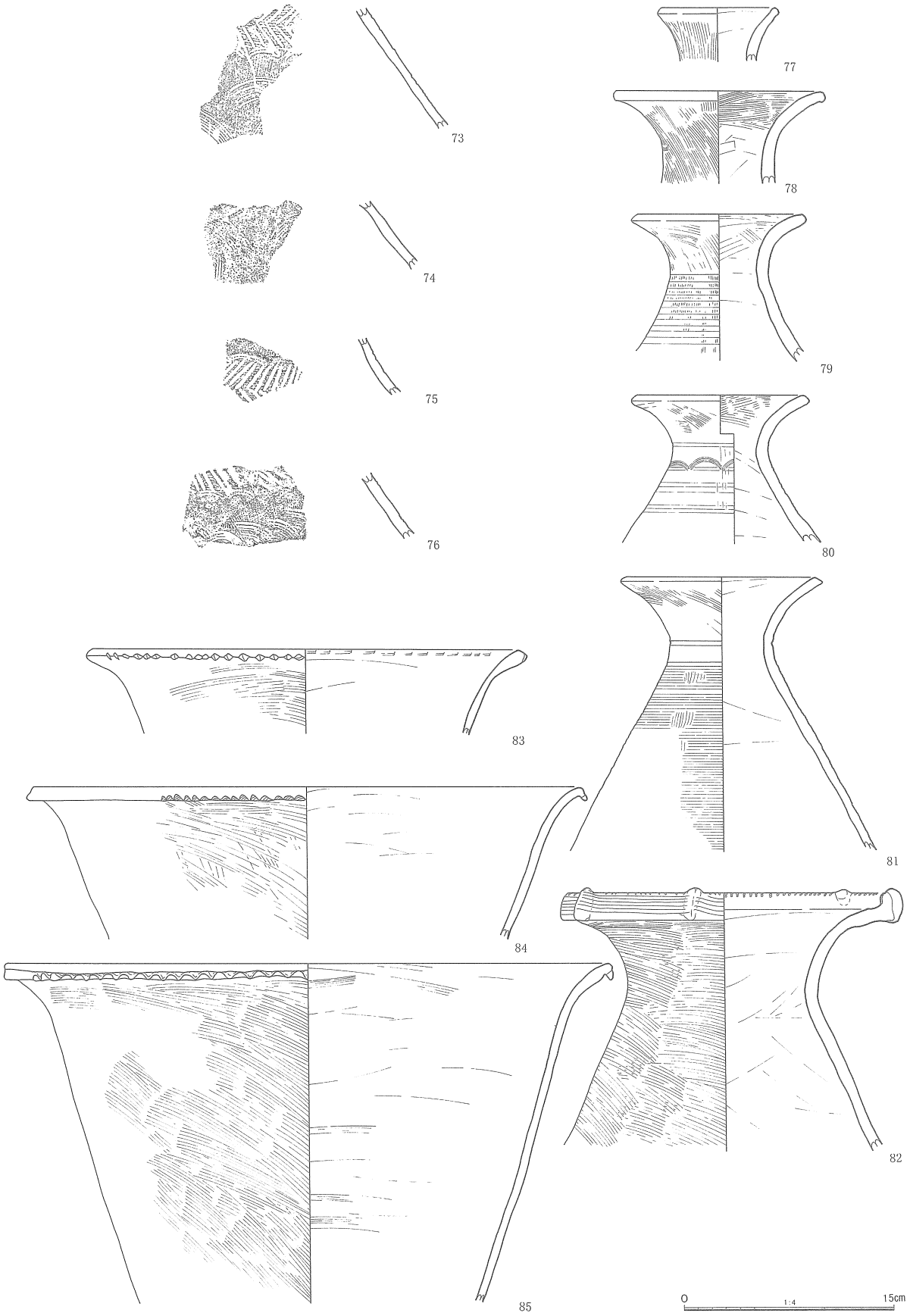


SK4004　70

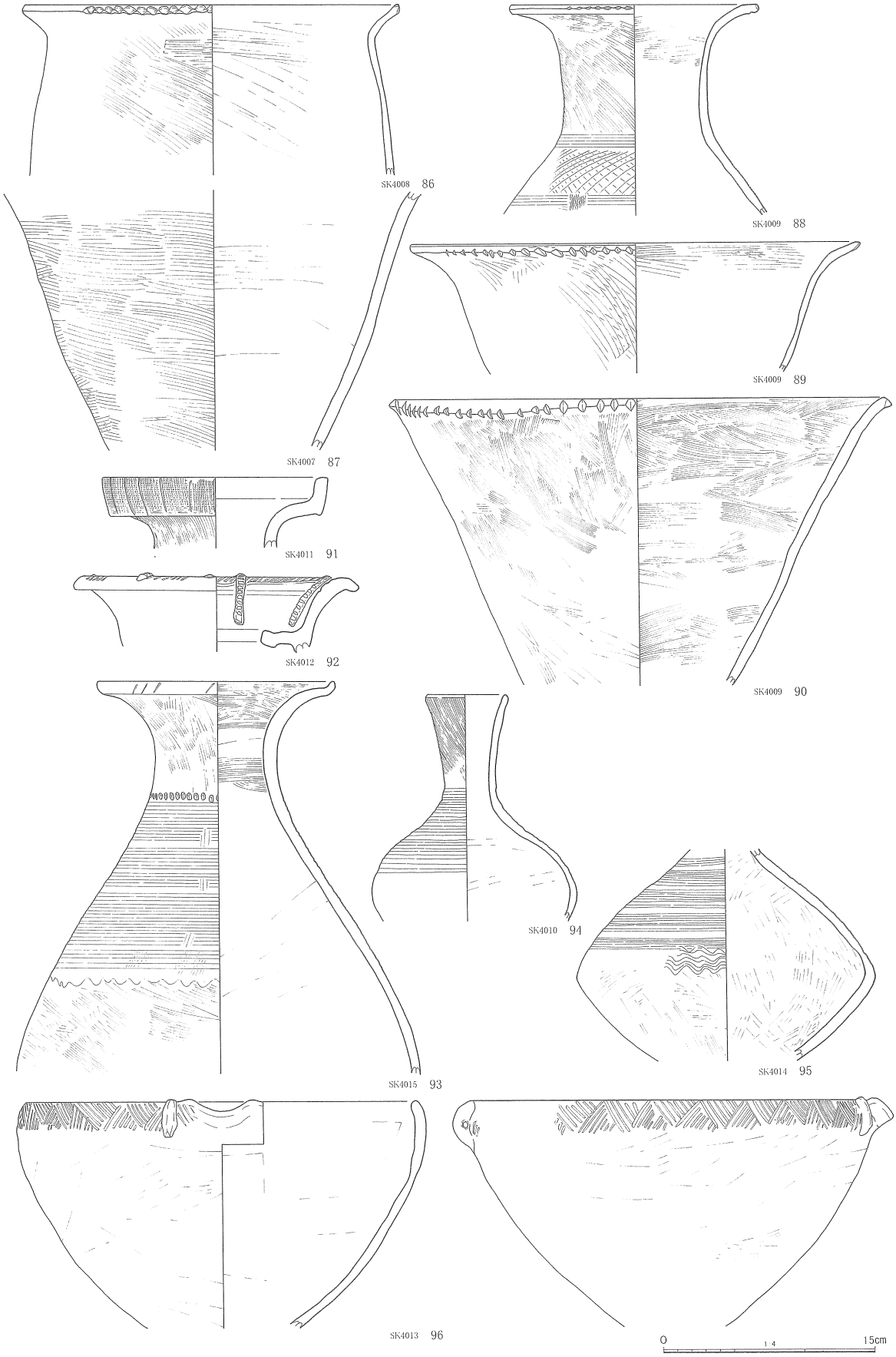
SK4005　72

0　1:4　15cm

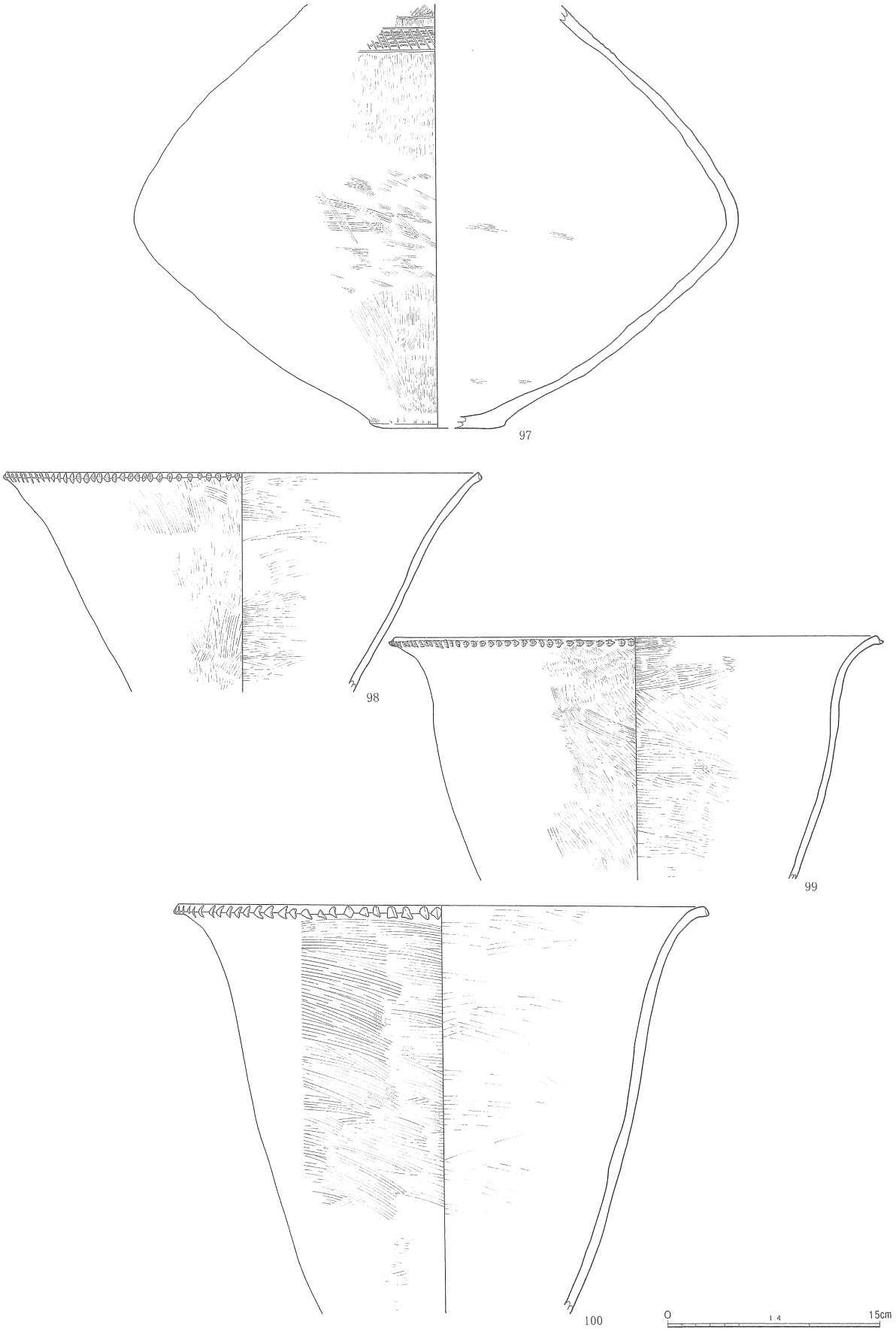
SK4006出土土器実測図



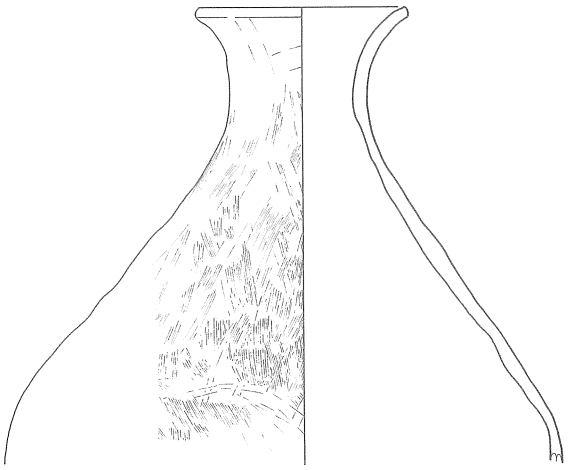
SK4008他出土土器実測図



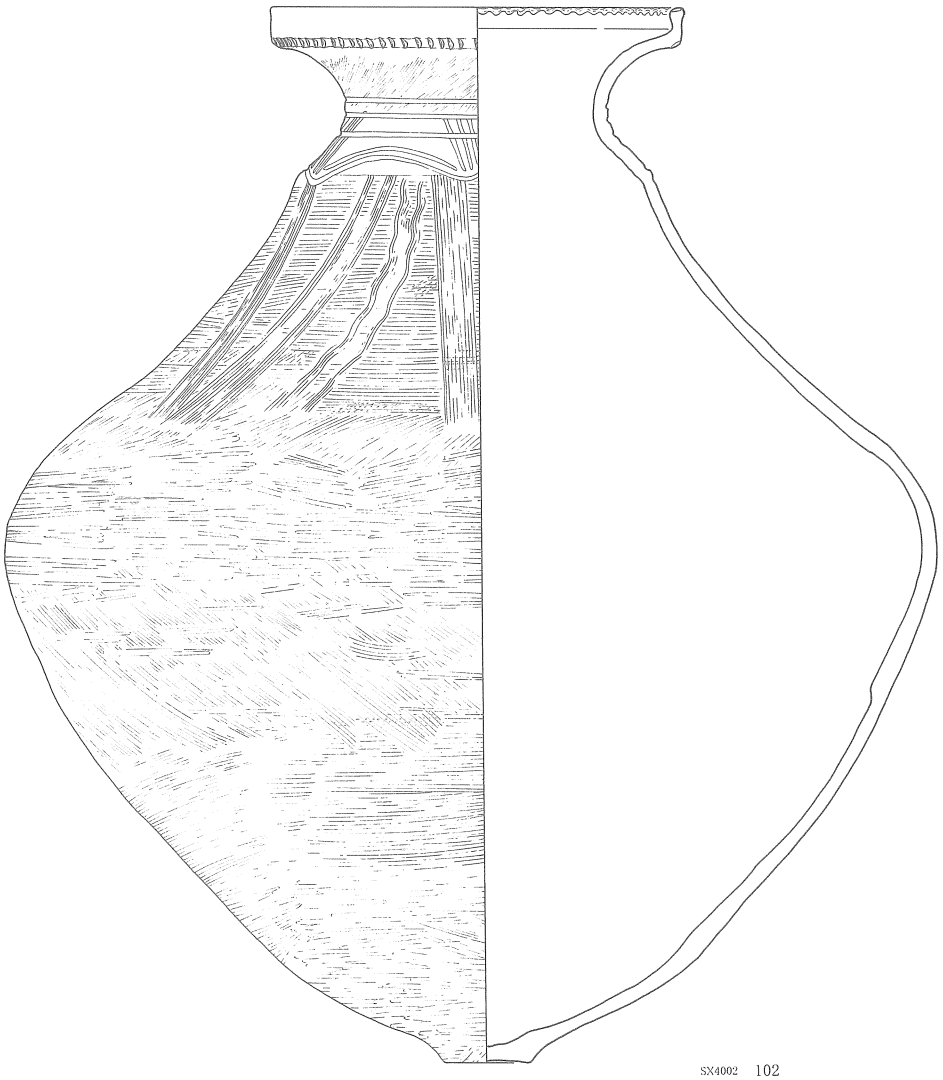
SD4002出土土器実測図



SX4001・4002出土土器実測図



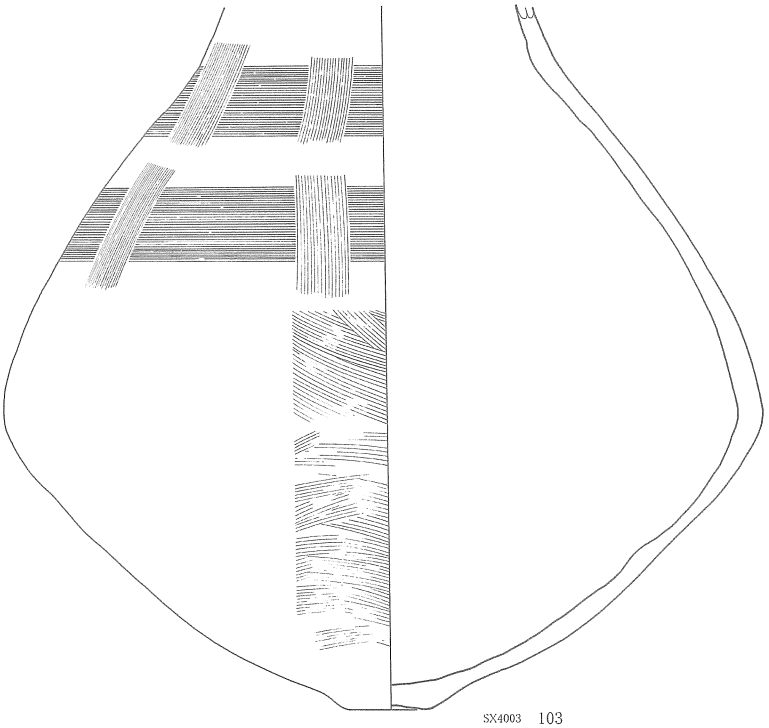
SX4001　101



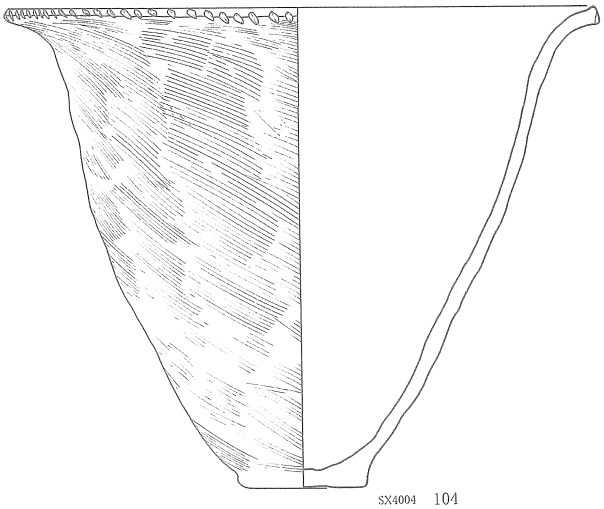
SX4002　102

0　1:4　15cm

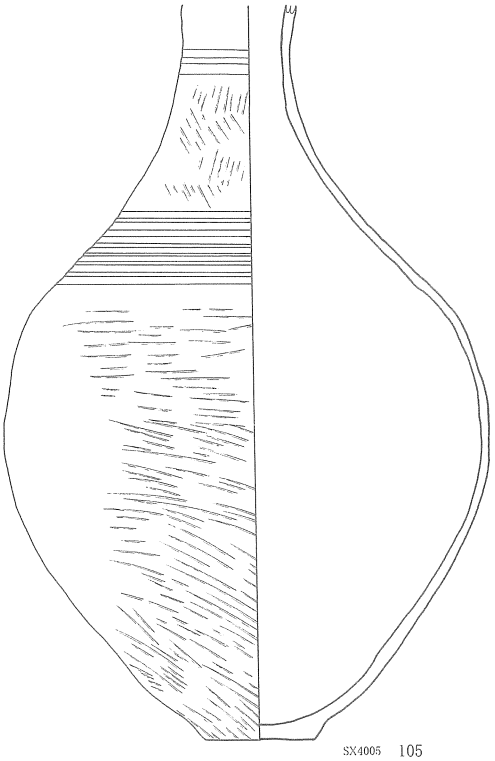
SX4003他出土土器実測図



SX4003 103



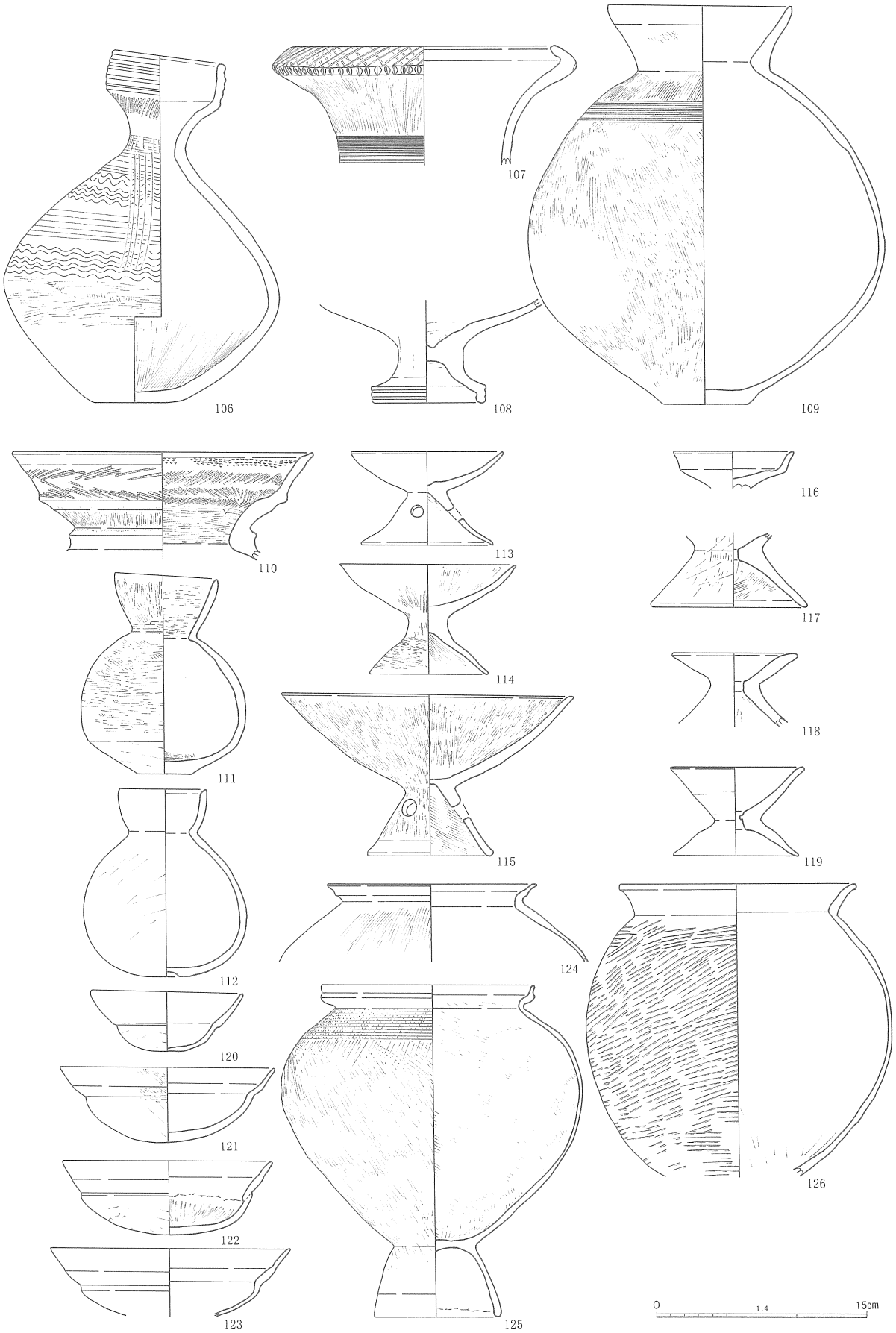
SX4004 104



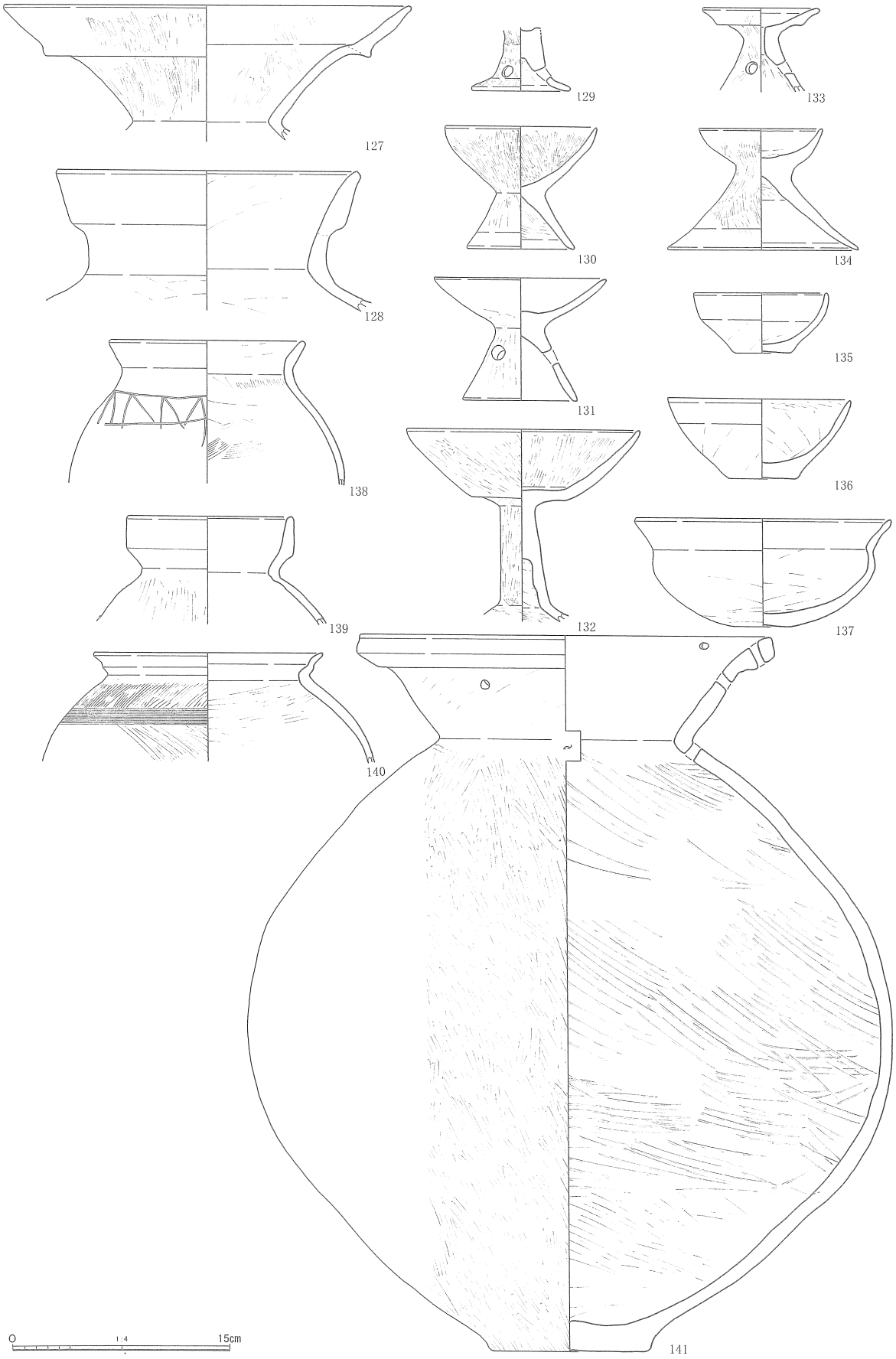
SX4005 105

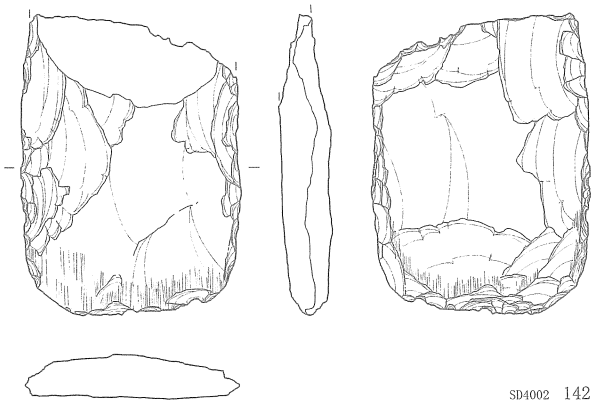
0 1:4 15cm

包含層出土土器実測図（1）

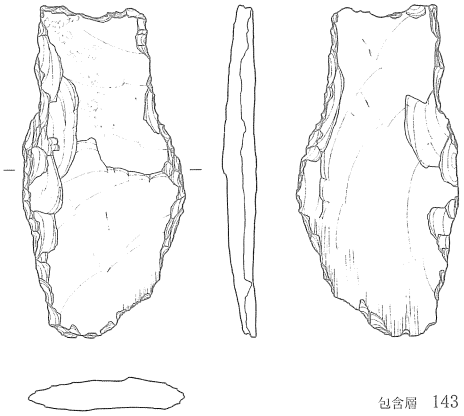


包含層出土土器実測図（2）

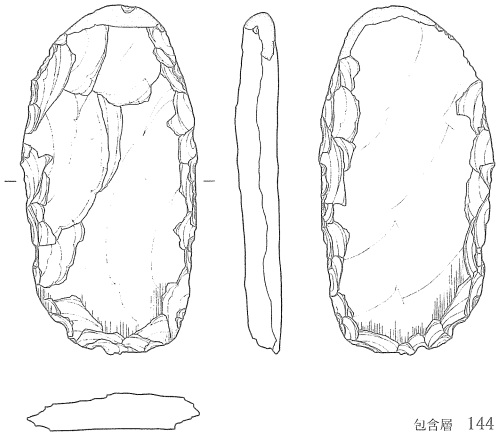




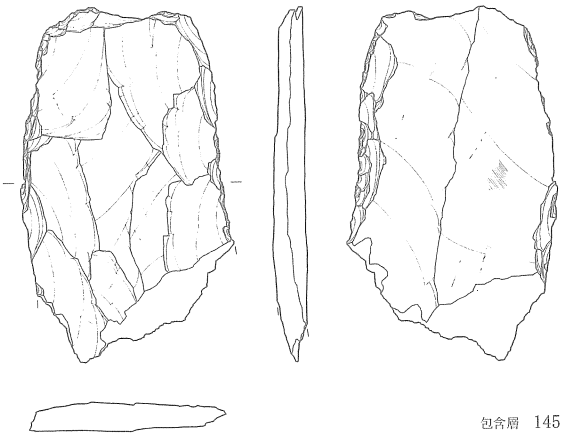
SD4002　142



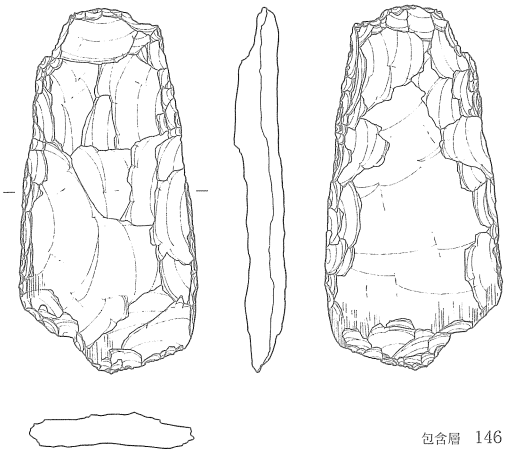
包含層　143



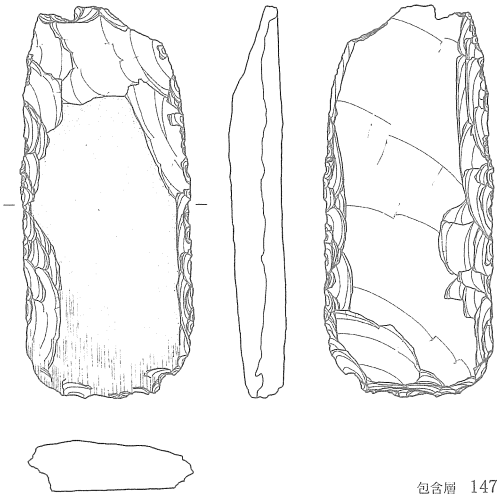
包含層　144



包含層　145



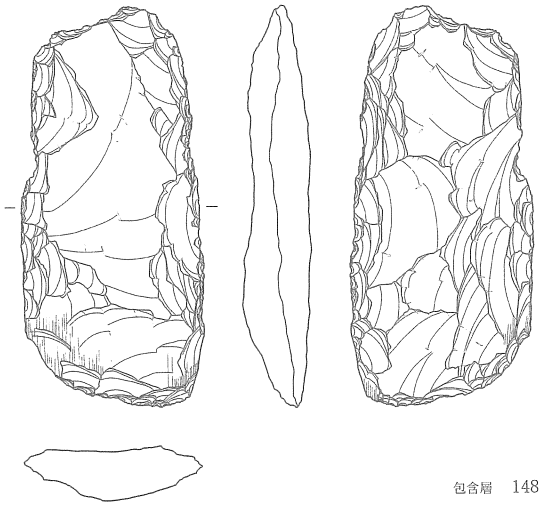
包含層　146



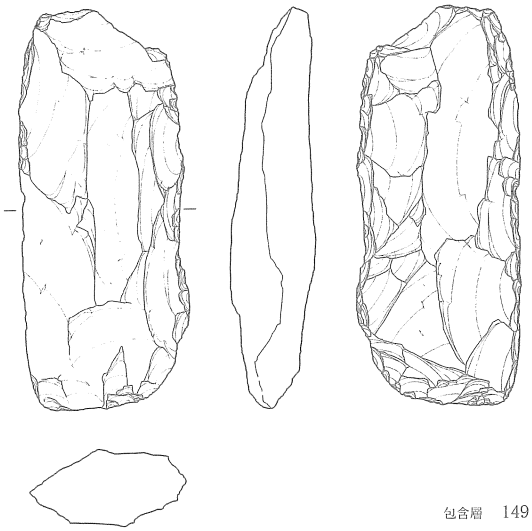
包含層　147

0　1:2　5cm

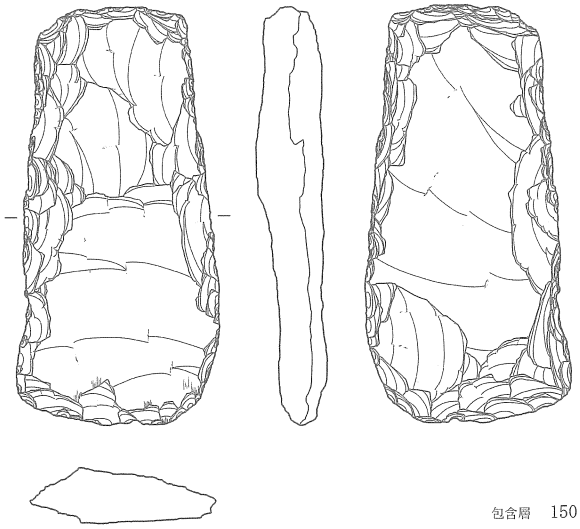
石器実測図（2）



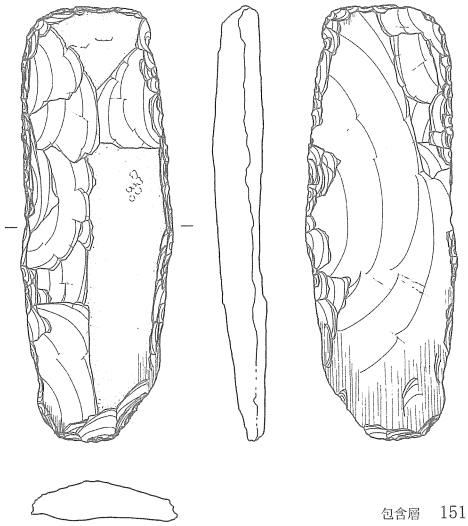
包含層　148



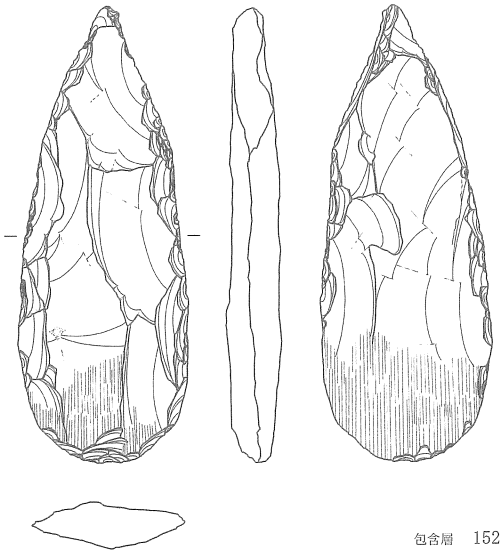
包含層　149



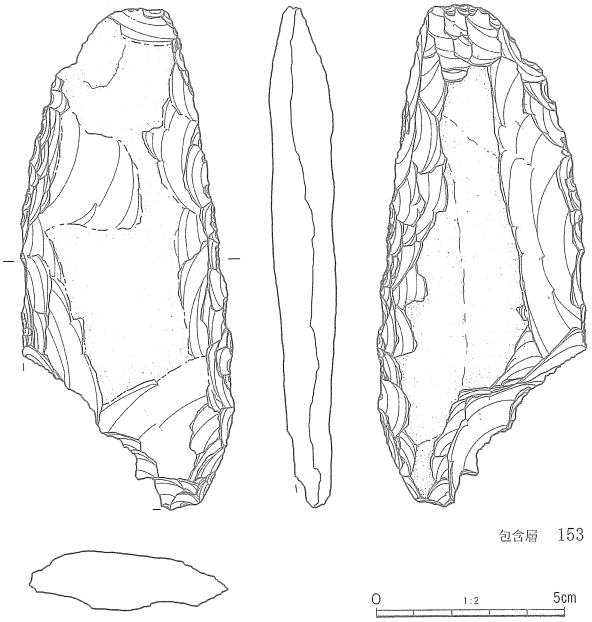
包含層　150



包含層　151



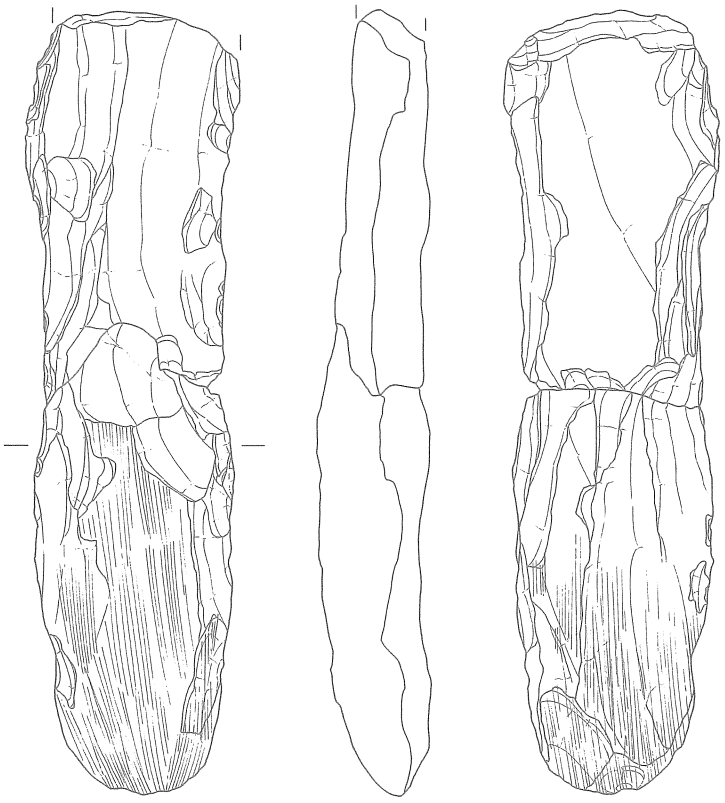
包含層　152



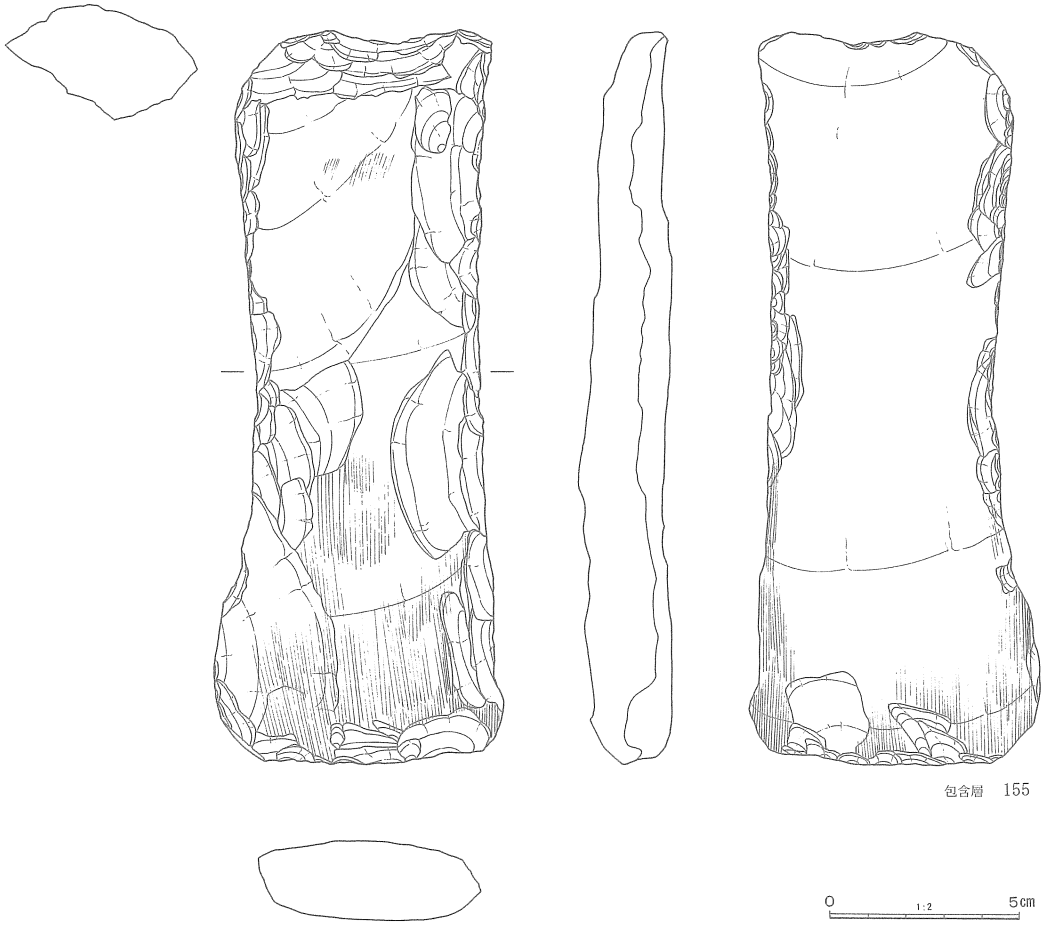
包含層　153

0　1:2　5cm

石器実測図（3）



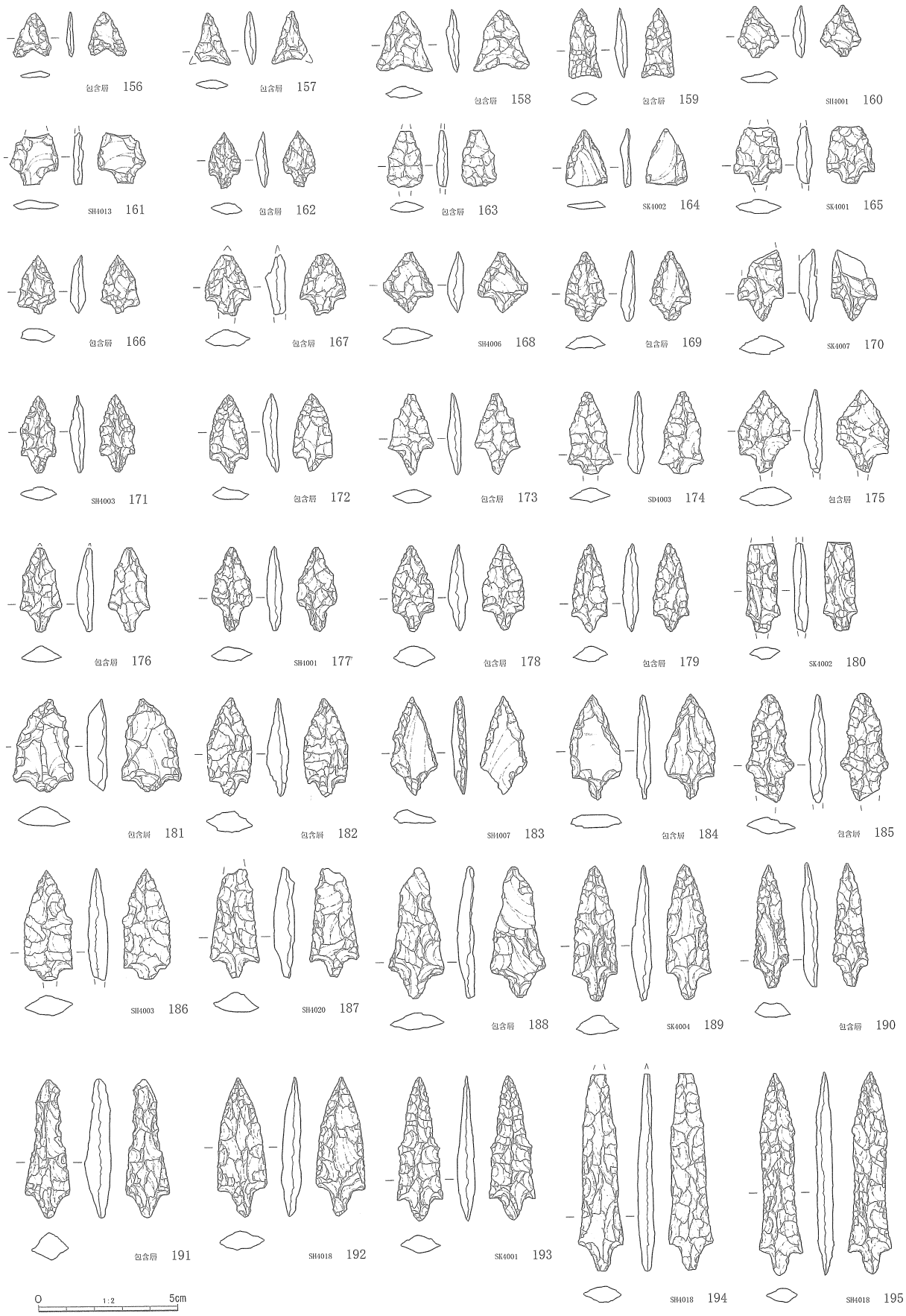
包含層　154



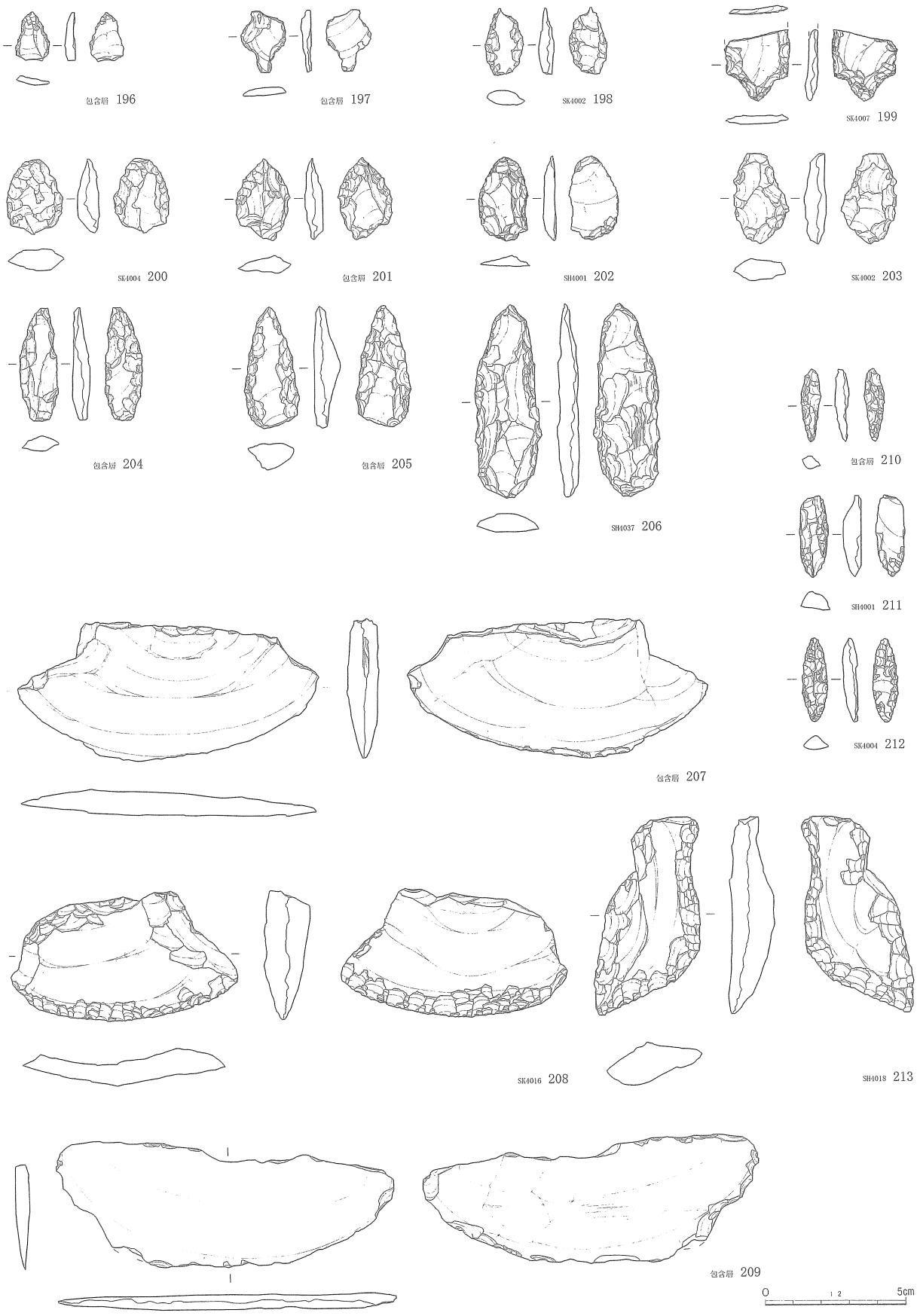
包含層　155

0　1:2　5cm

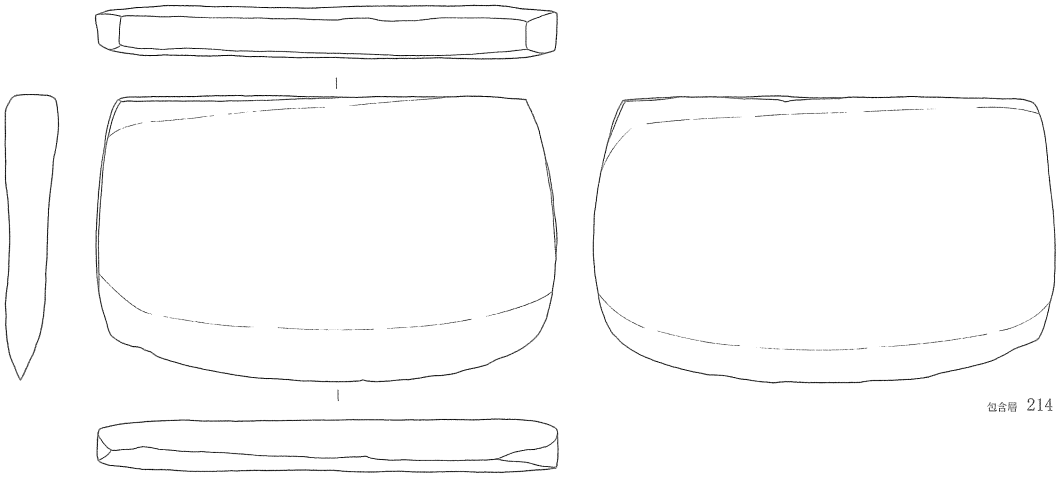
石器実測図（4）


包含層 156
包含層 157
包含層 158
包含層 159
SH4001 160
SH4013 161
包含層 162
包含層 163
SK4002 164
SK4001 165
包含層 166
包含層 167
SH4006 168
包含層 169
SK4007 170
SH4003 171
包含層 172
包含層 173
SD4003 174
包含層 175
包含層 176
SH4001 177
包含層 178
包含層 179
SK4002 180
包含層 181
包含層 182
SH4007 183
包含層 184
包含層 185
SH4003 186
SH4020 187
包含層 188
SK4004 189
包含層 190
包含層 191
SH4018 192
SK4001 193
SH4018 194
SH4018 195
0
1:2
5cm

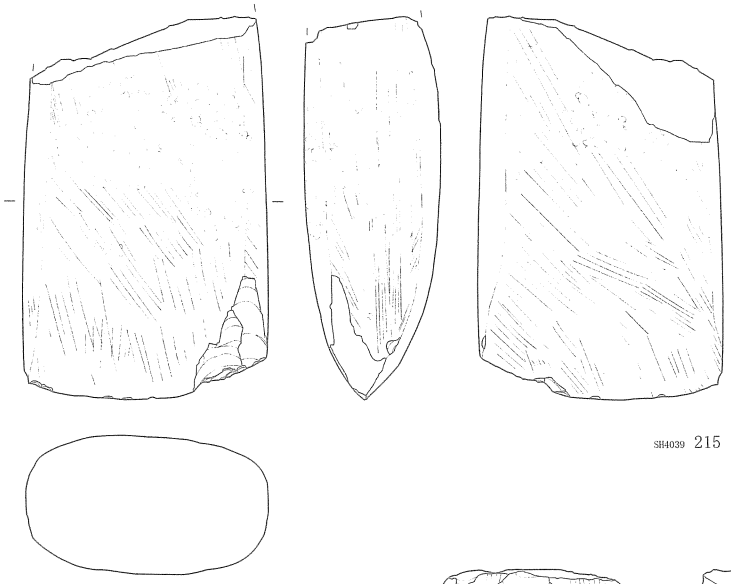
石器実測図（5）


包含層 196
包含層 197
SK4002 198
SK4007 199
SK4004 200
包含層 201
SH4001 202
SK4002 203
包含層 204
包含層 205
SH4037 206
包含層 210
SH4001 211
SK4004 212
包含層 207
SK4016 208
SH4018 213
包含層 209
0
1 2
5cm

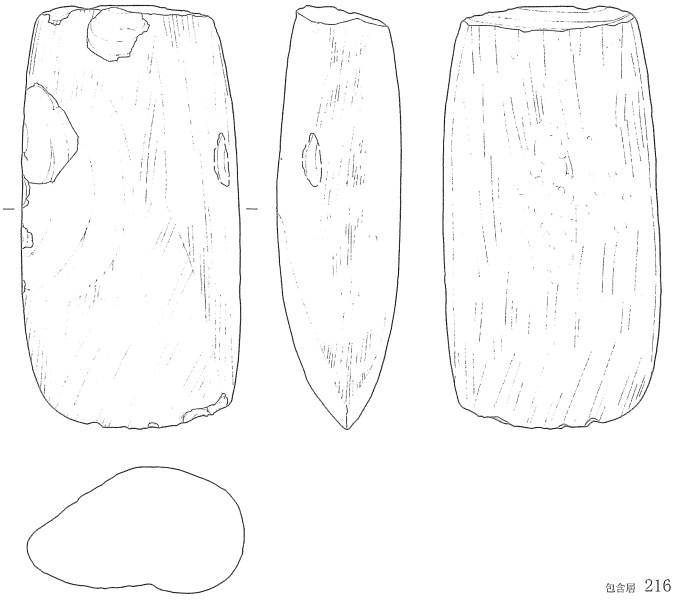
石器実測図（6）



包含層 214



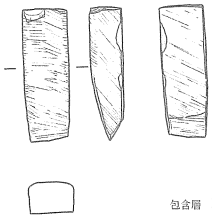
SH4039 215



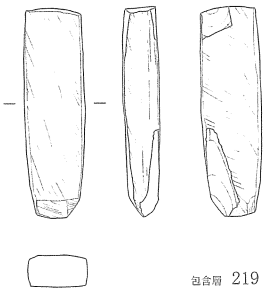
包含層 216

0 1 2 5cm

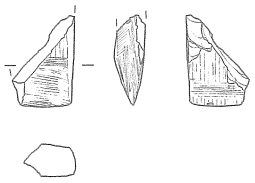
石器実測図（7）



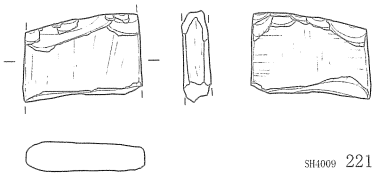
包含層 217



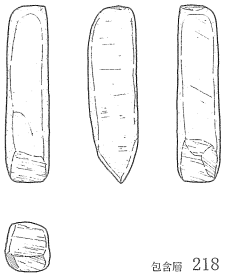
包含層 219



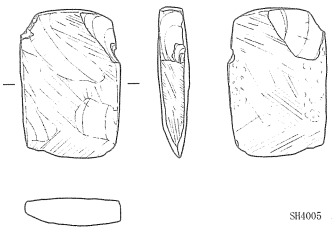
包含層 220



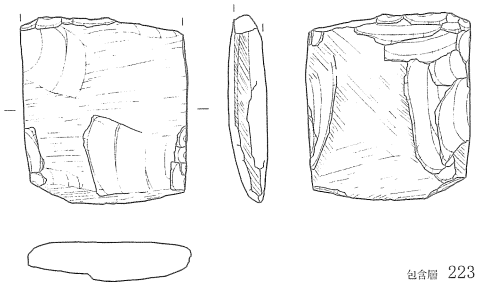
SH4009 221



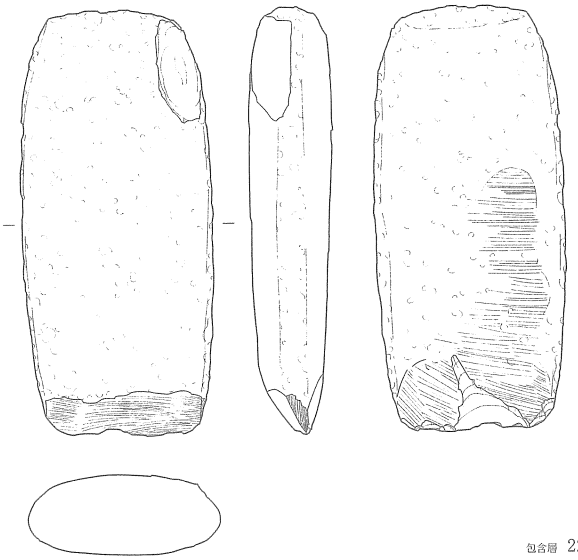
包含層 218



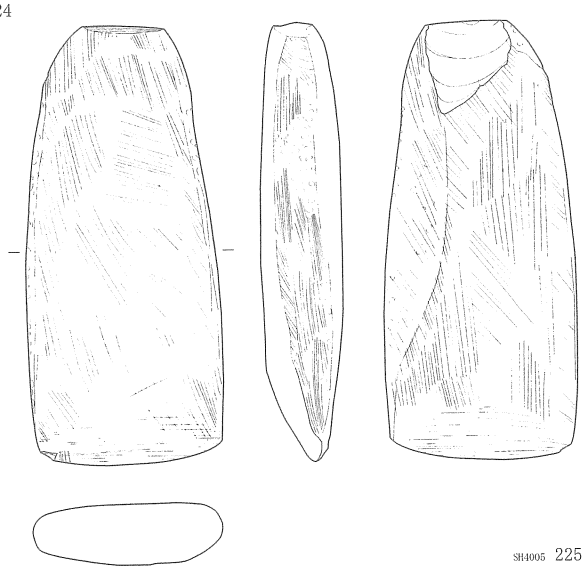
SH4005 222



包含層 223



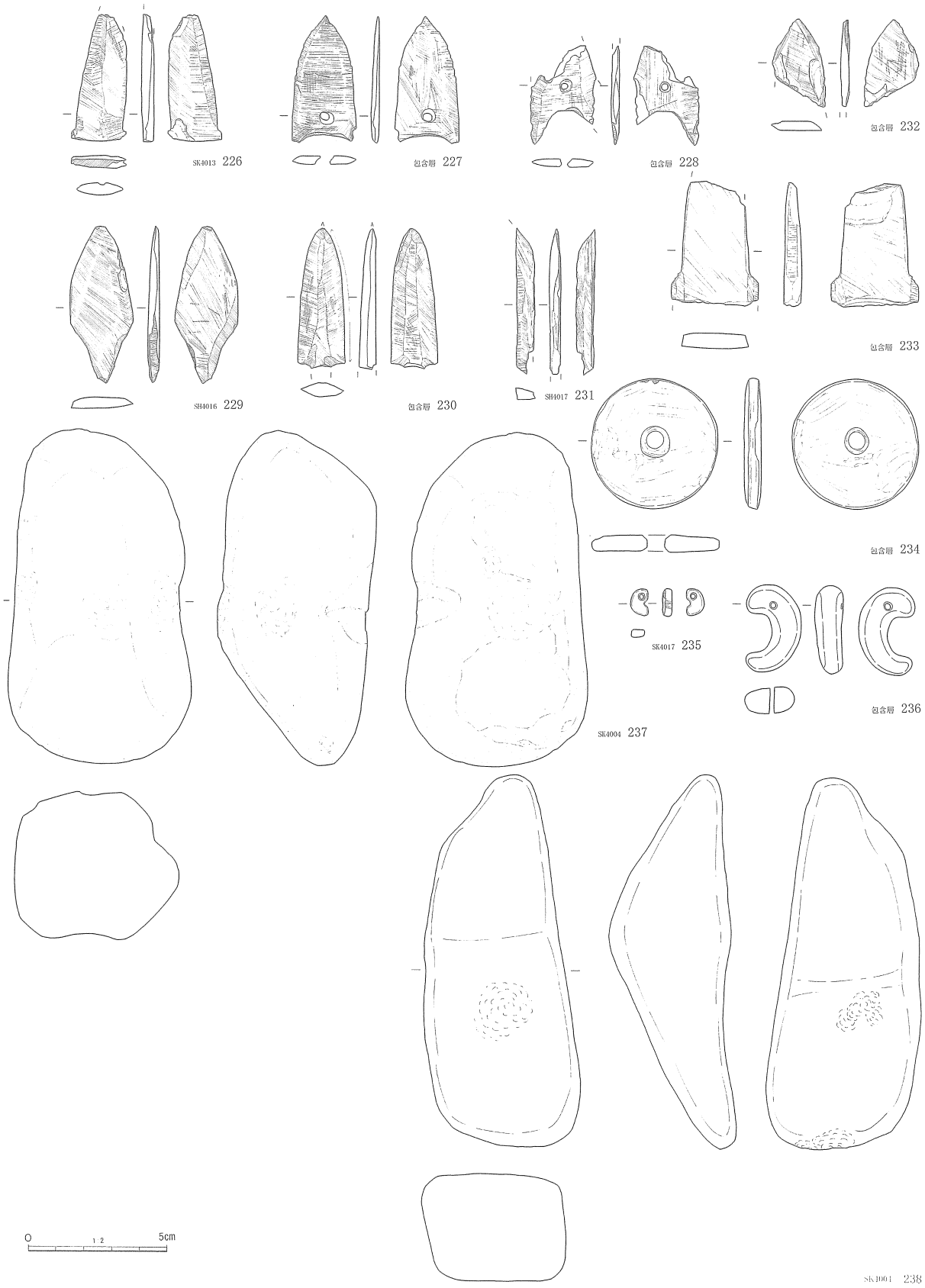
包含層 224



SH4005 225

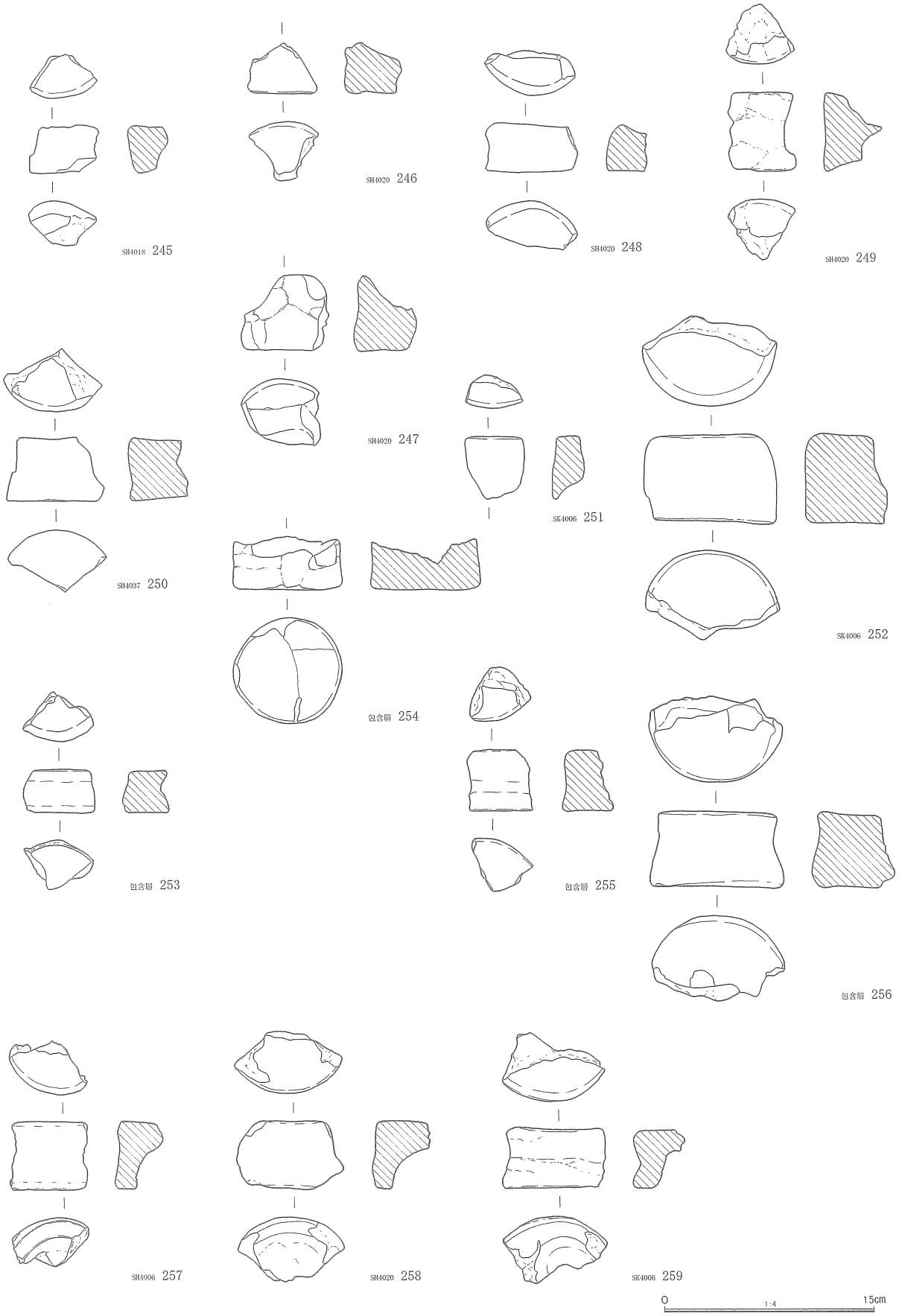
0 1 2 5cm

石器実測図（8）

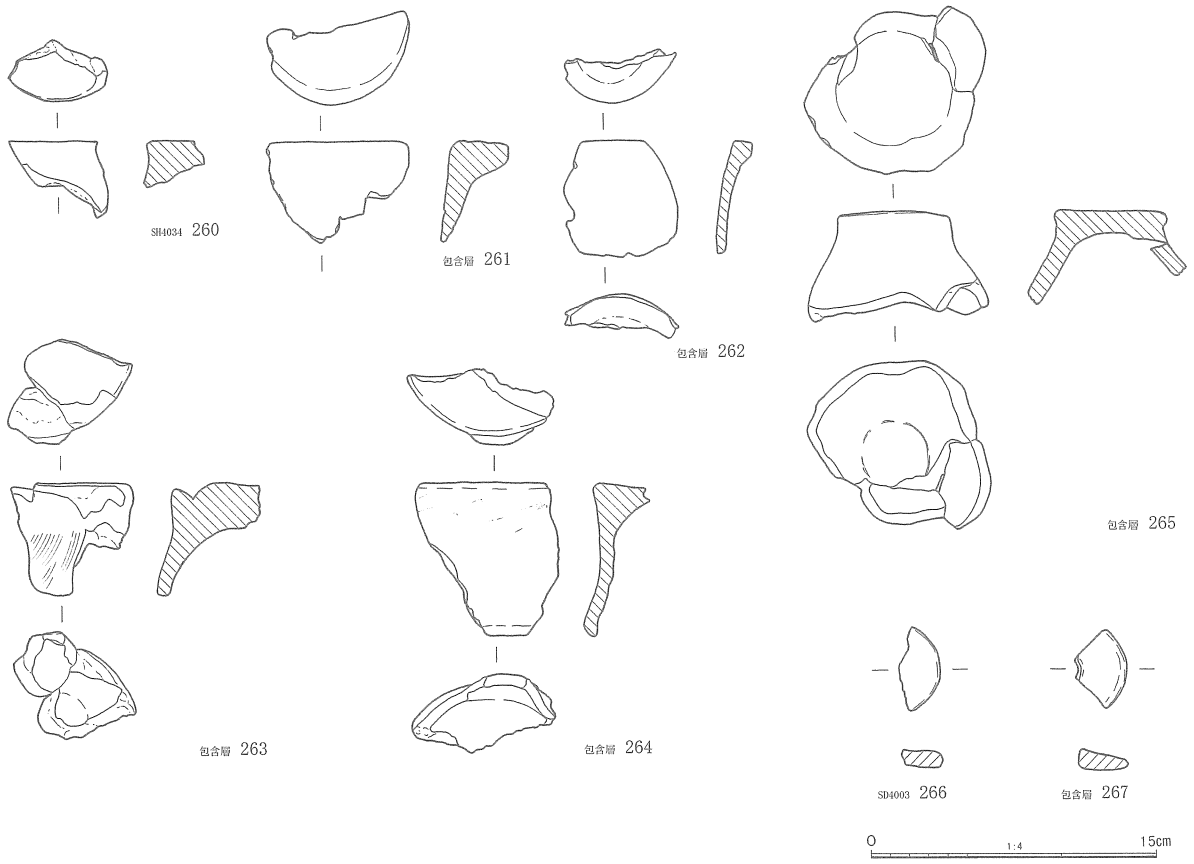

SK4013 226
包含層 227
包含層 228
包含層 232
SH4016 229
包含層 230
SH4017 231
包含層 233
包含層 234
SK4017 235
包含層 236
SK4004 237
0 1 2 5cm
SK1001 238

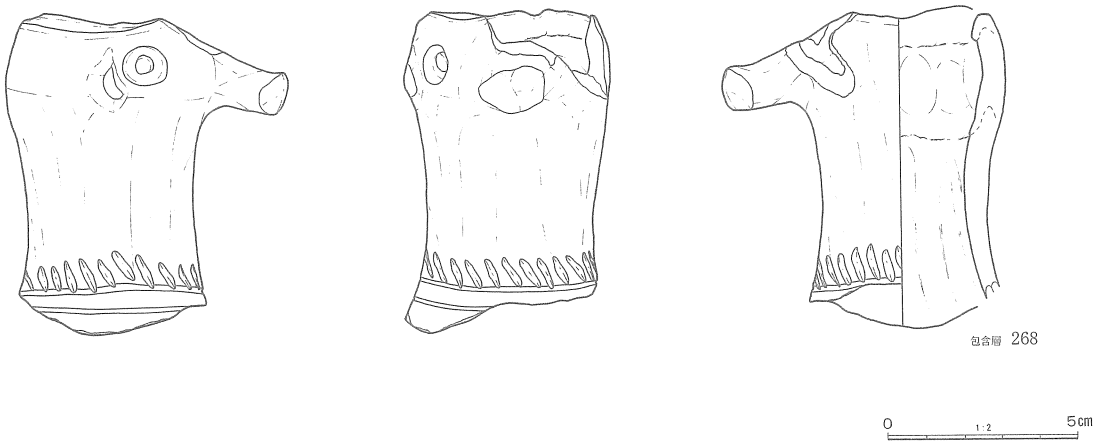
包含層 239
SD4002 240
SH4017 241
0 1:2 5cm
包含層 242
SH4026 243
0 1:3 10cm
SH4018 244

土製品実測図（1）


SH4018 245
SH4020 246
SH4020 248
SH4020 249
SH4020 247
SH4037 250
SK4006 251
SK4006 252
包含層 254
包含層 253
包含層 255
包含層 256
SH4006 257
SH4020 258
SK4006 259
0
1:4
15cm

土製品実測図（2）


SH4034 260
包含層 261
包含層 262
包含層 263
包含層 264
包含層 265
SD4003 266
包含層 267
0
1:4
15cm


包含層 268
0
1:2
5cm

写真図版

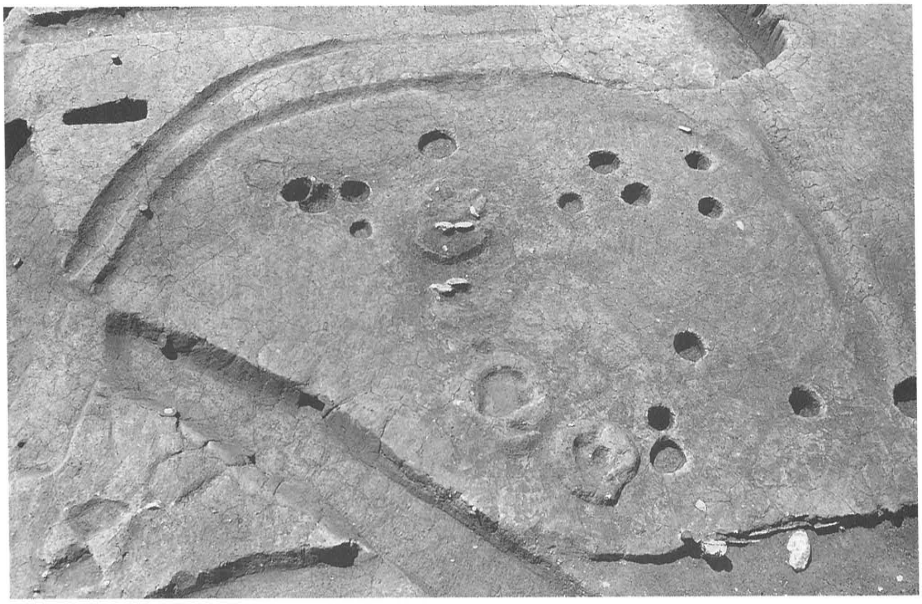
1　井通遺跡と浜名湖（南西から）

2　調査地区遠景（南から）

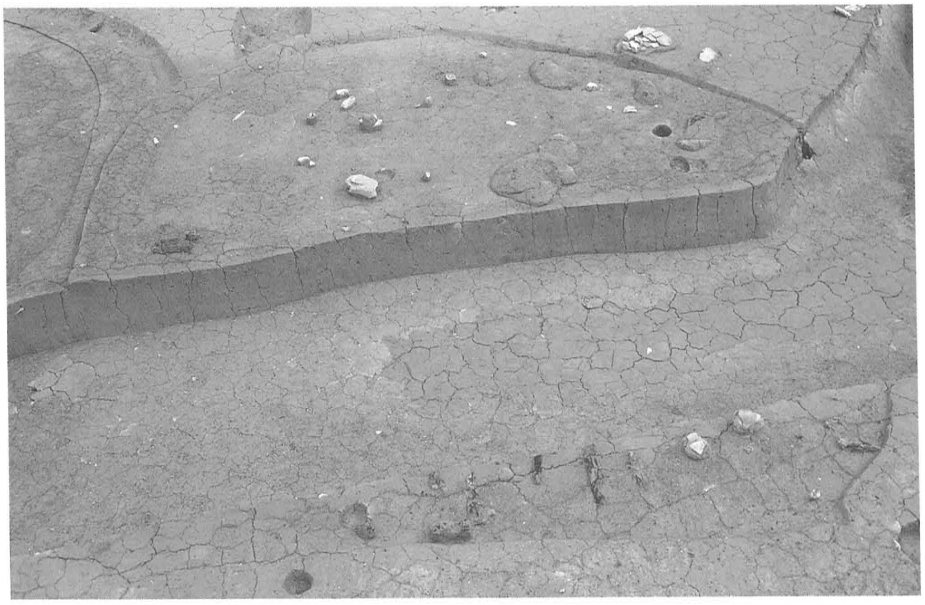
1　井通遺跡　北部全景（北から）

2　井通遺跡　南部全景（北から）

1　ＳＨ4001・4003（西から）

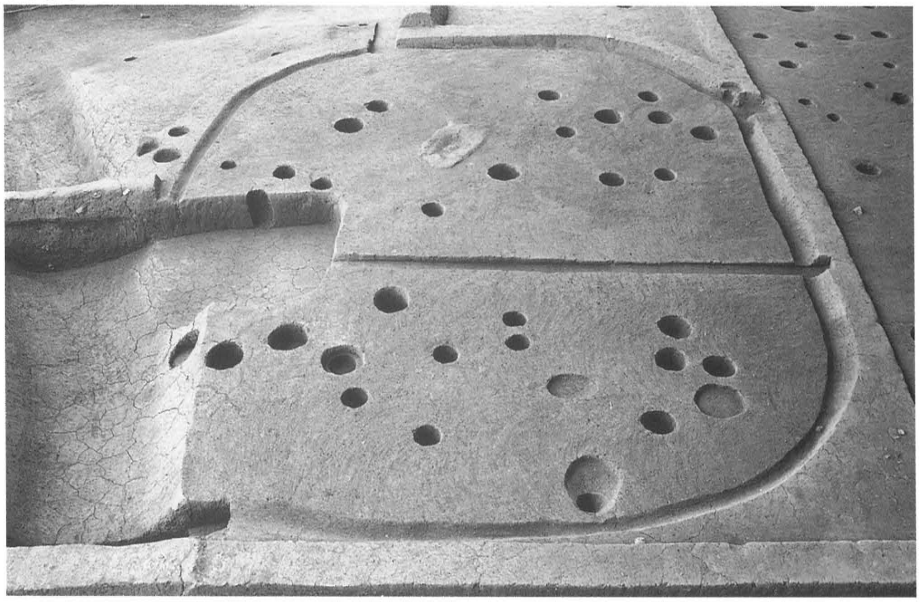


2　ＳＨ4005（東から）



3　ＳＨ4006（北から）

PH.4

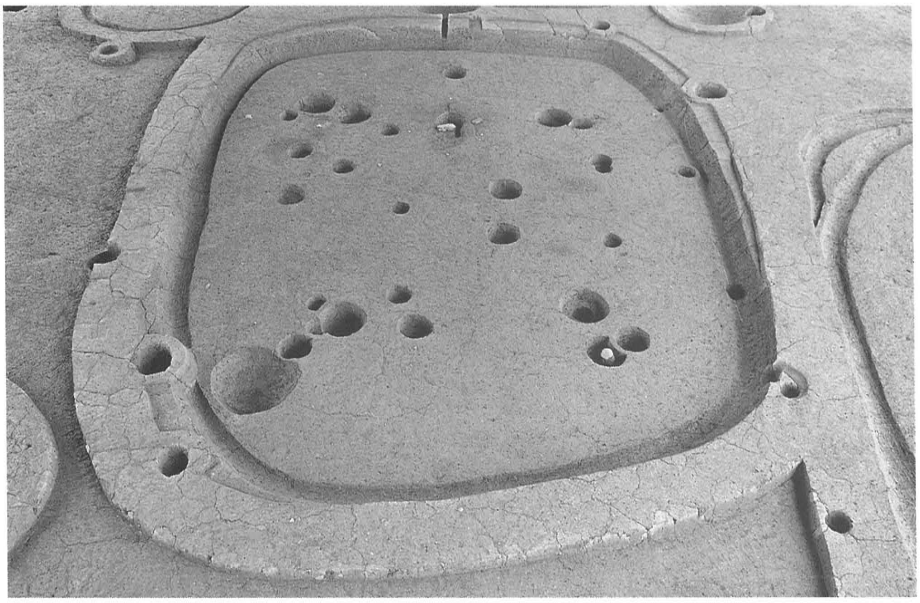


1　ＳＨ4007（東から）

2　ＳＨ4008（東から）

3　ＳＨ4009（東から）

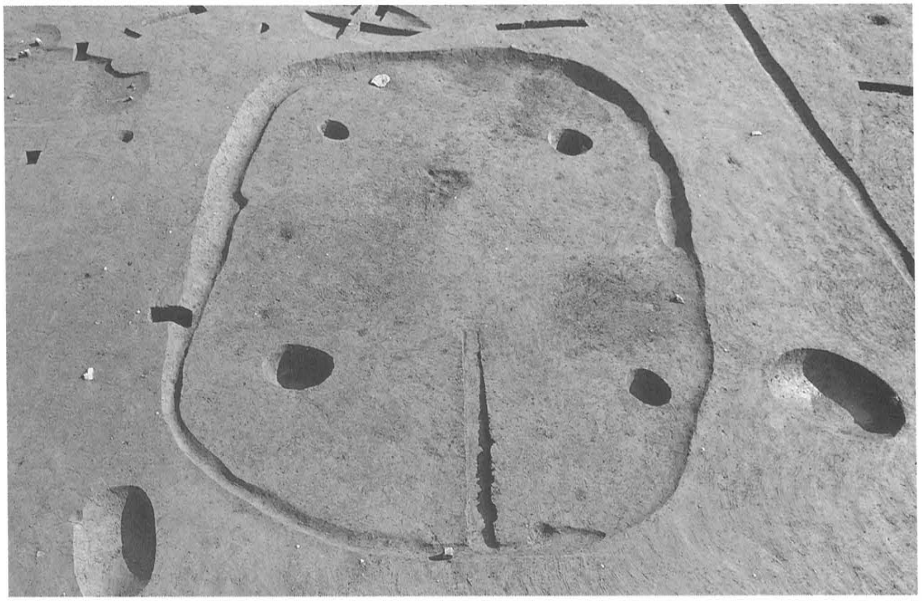
1　ＳＨ4013
検出状況（東から）



2　ＳＨ4013（東から）

3　ＳＨ4015・4016（西から）

PH.6



1　ＳＨ4017（西から）

2　ＳＨ4018
検出状況（東から）

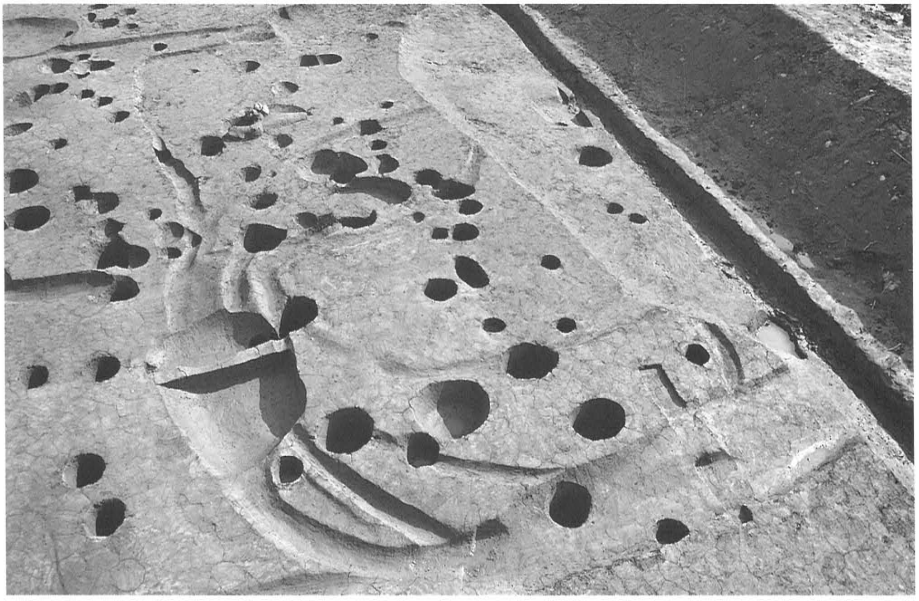
3　ＳＨ4018（西から）

1　ＳＨ4019
検出状況（東から）

2　ＳＨ4019（東から）

3　ＳＨ4020（西から）

PH.8



1　ＳＨ4022・4023（北から）

2　ＳＨ4022～4025（北から）

3　ＳＨ4022～4025（東から）

1　ＳＨ4022～4025（西から）

2　ＳＨ4026
検出状況（西から）

3　ＳＨ4027（西から）

PH.10

1　ＳＨ4027（東から）

2　ＳＨ4030（西から）

3　ＳＨ4031（西から）

1　ＳＨ4032（東から）

2　ＳＨ4033（北東から）

3　ＳＨ4034～4036（北から）

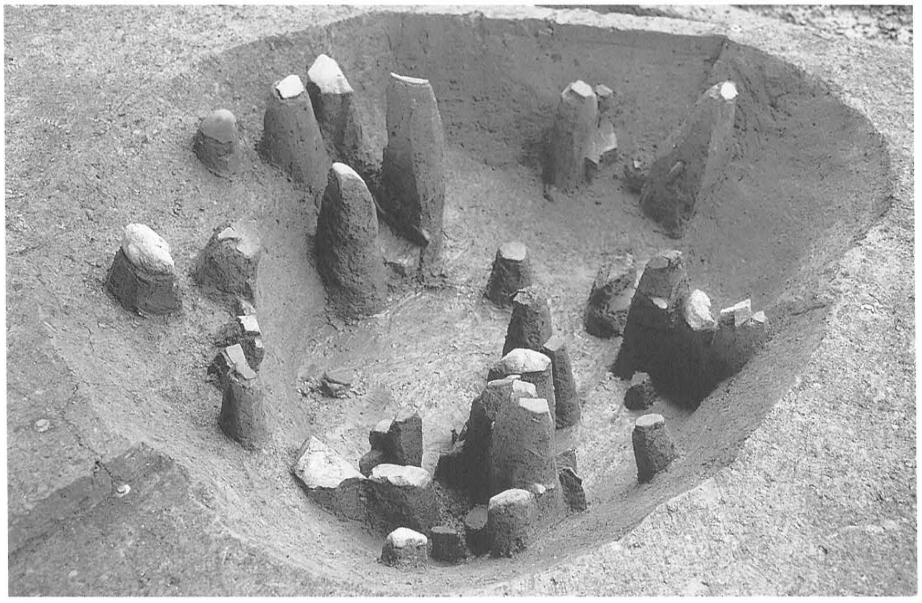
PH.12

1　ＳＨ4037
検出状況（西から）

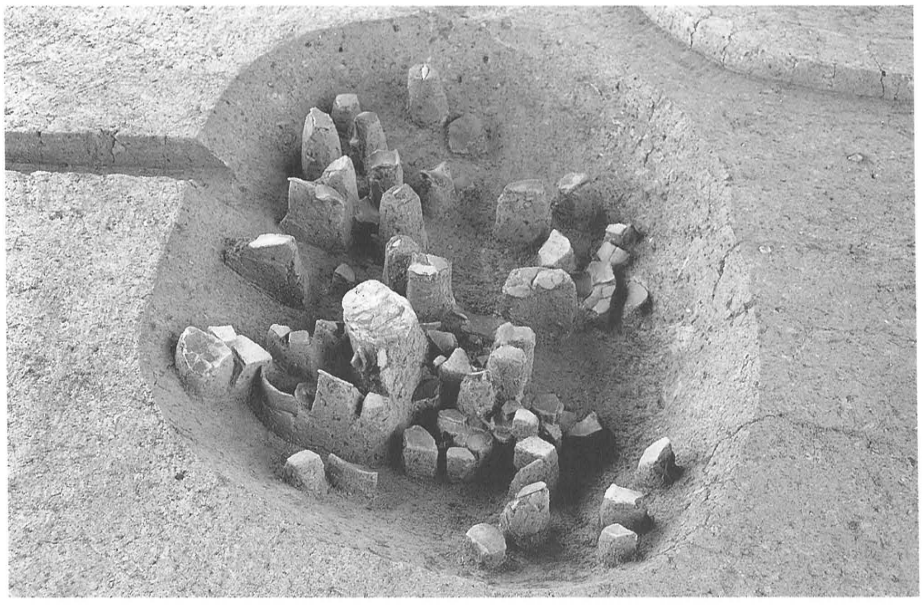
2　ＳＨ4037（西から）

3　ＳＨ4039（北から）

1　ＳＫ4002
遺物出土状況（北から）

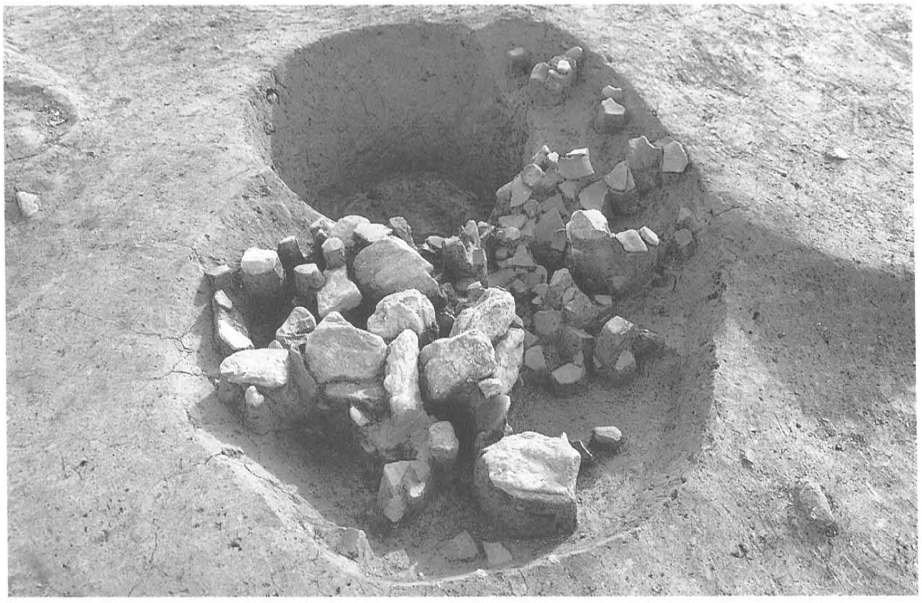


2　ＳＫ4003
遺物出土状況（南東から）



3　ＳＫ4004
遺物出土状況（東から）

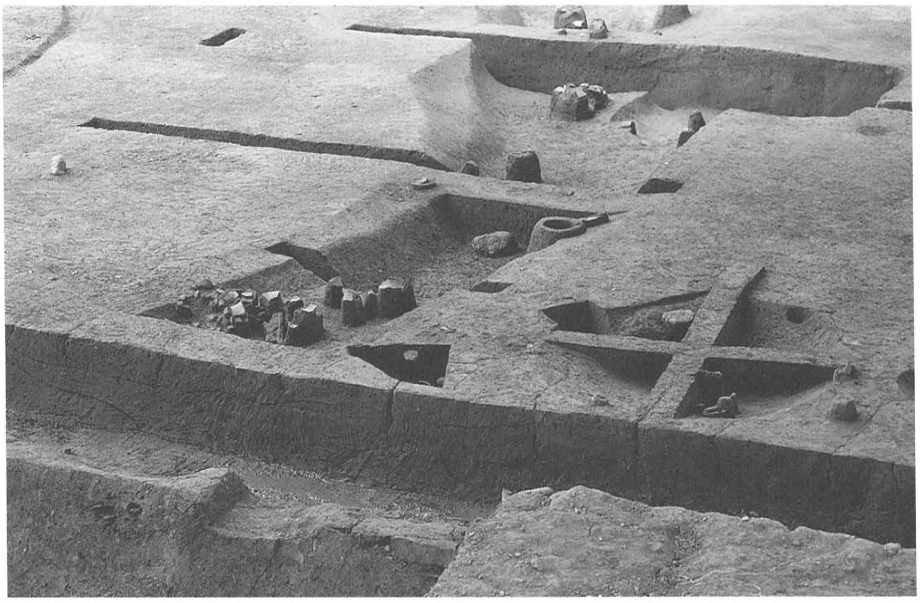
1　ＳＫ4006
遺物出土状況（東から）



2　ＳＫ4008
遺物出土状況（北東から）

3　ＳＫ4009
遺物出土状況（南から）

1　ＳＤ4001（東から）

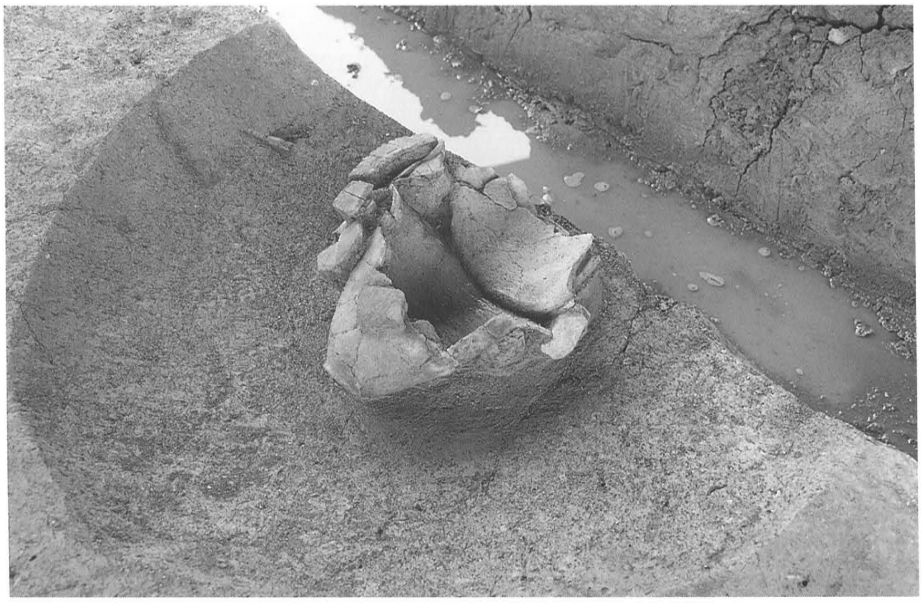


2　ＳＤ4002（東から）

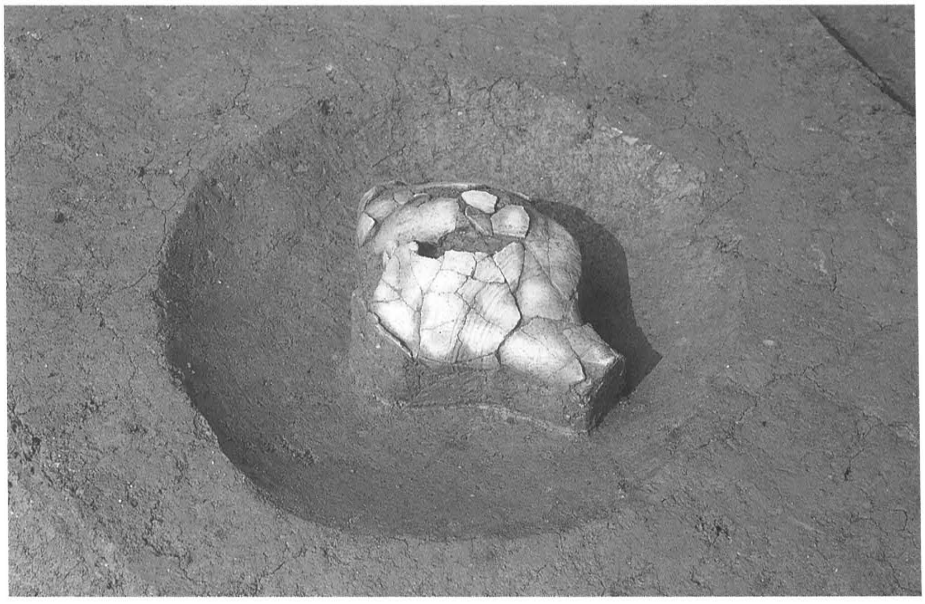
3　ＳＤ4003（東から）

PH.16

1　ＳＸ4003（北東から）

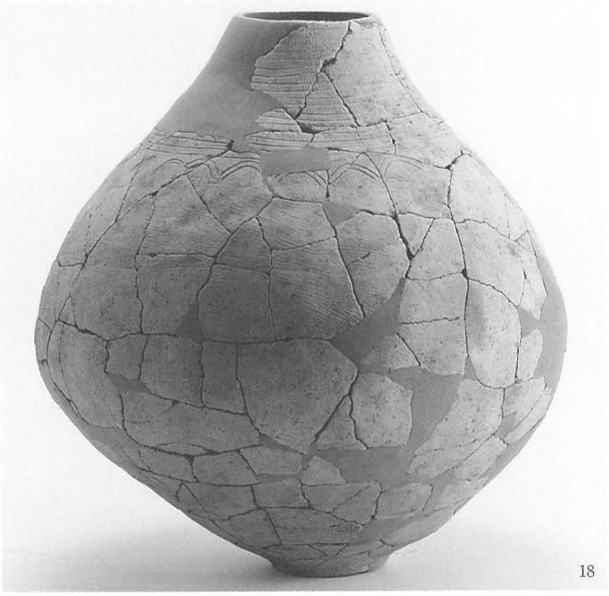


2　ＳＸ4004（南西から）



3　ＳＸ4005（東から）

10



18

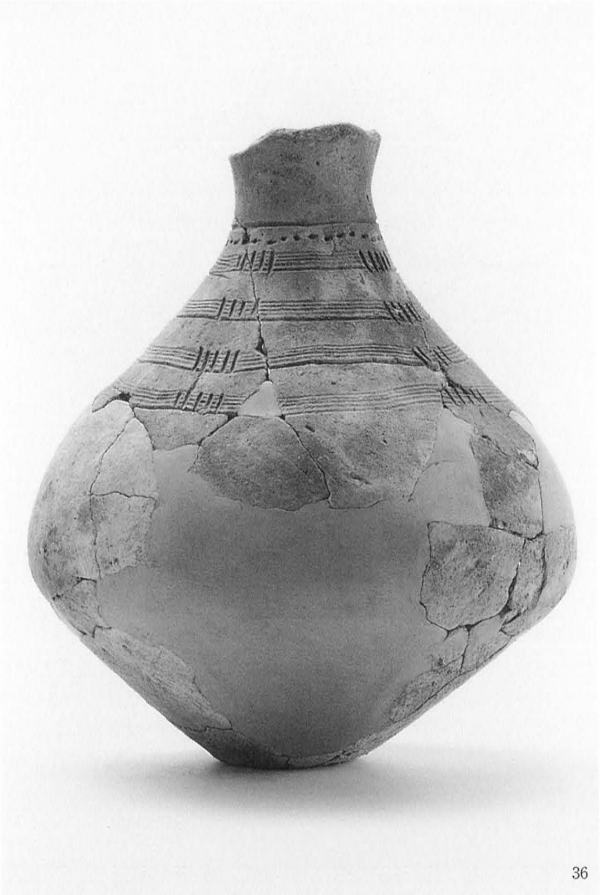
17

20

21

30

出土土器（1）


36

55

72

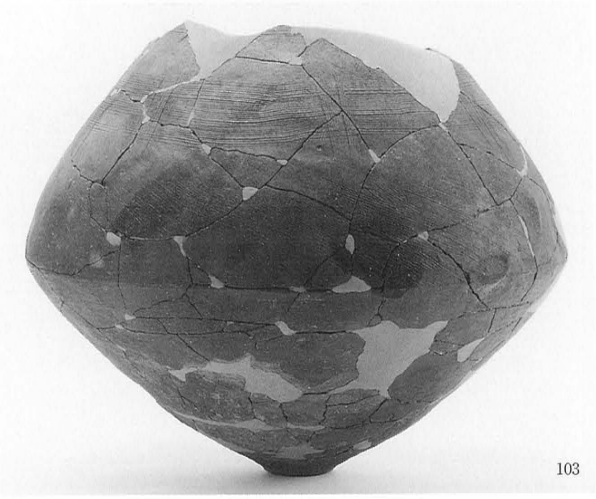
59

81

出土土器（2）

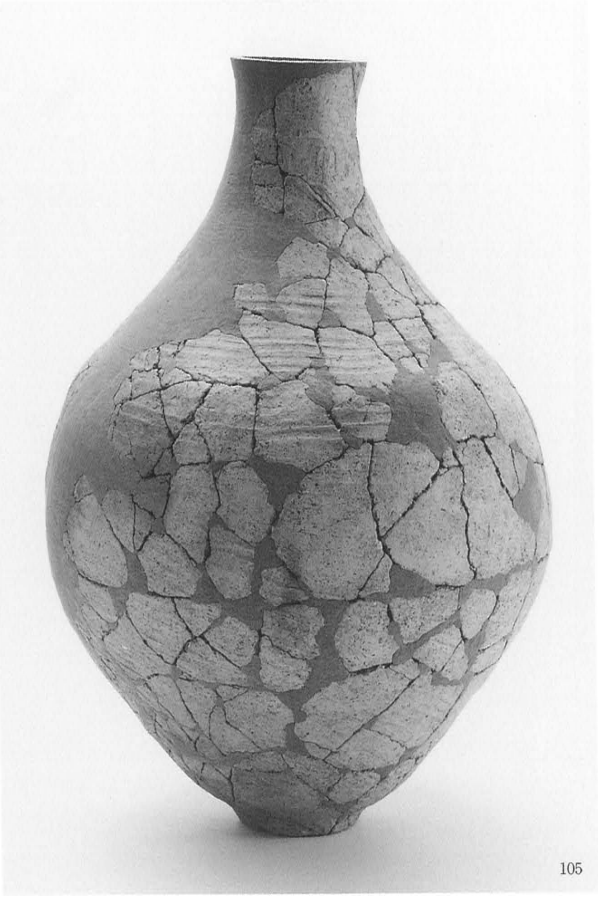
82

96


103

88

93

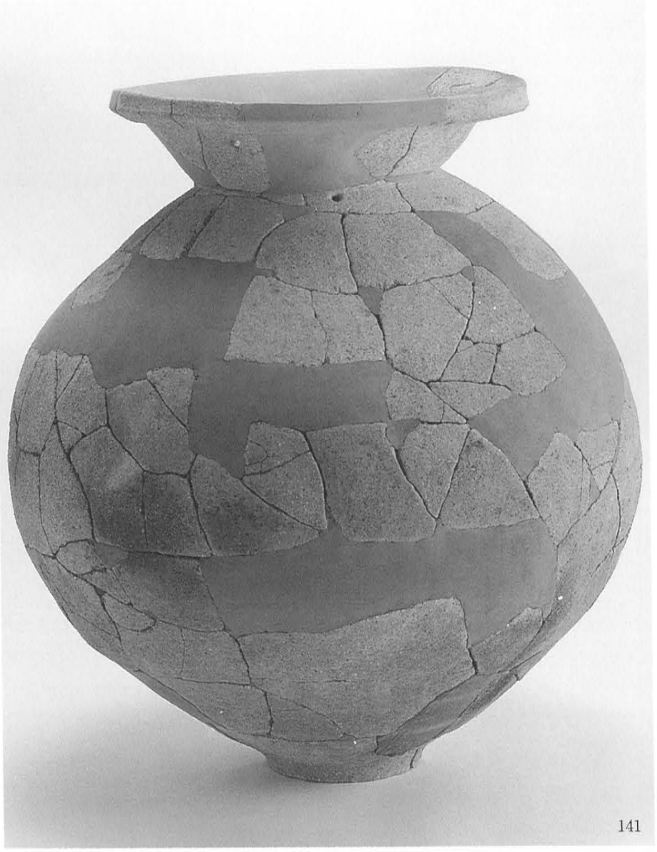

105

出土土器（3）

PH.20

出土土器（4）

115

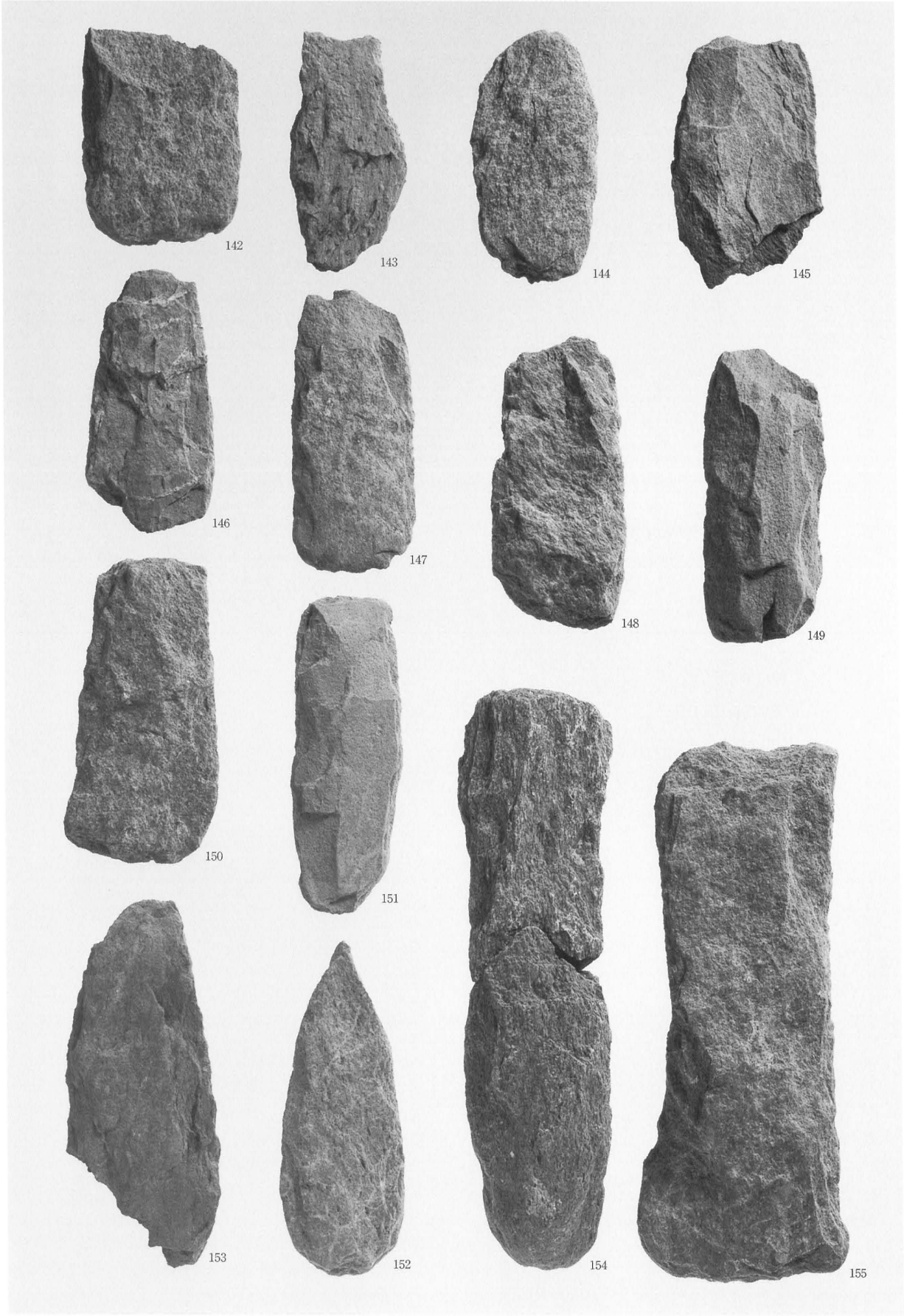

141

126

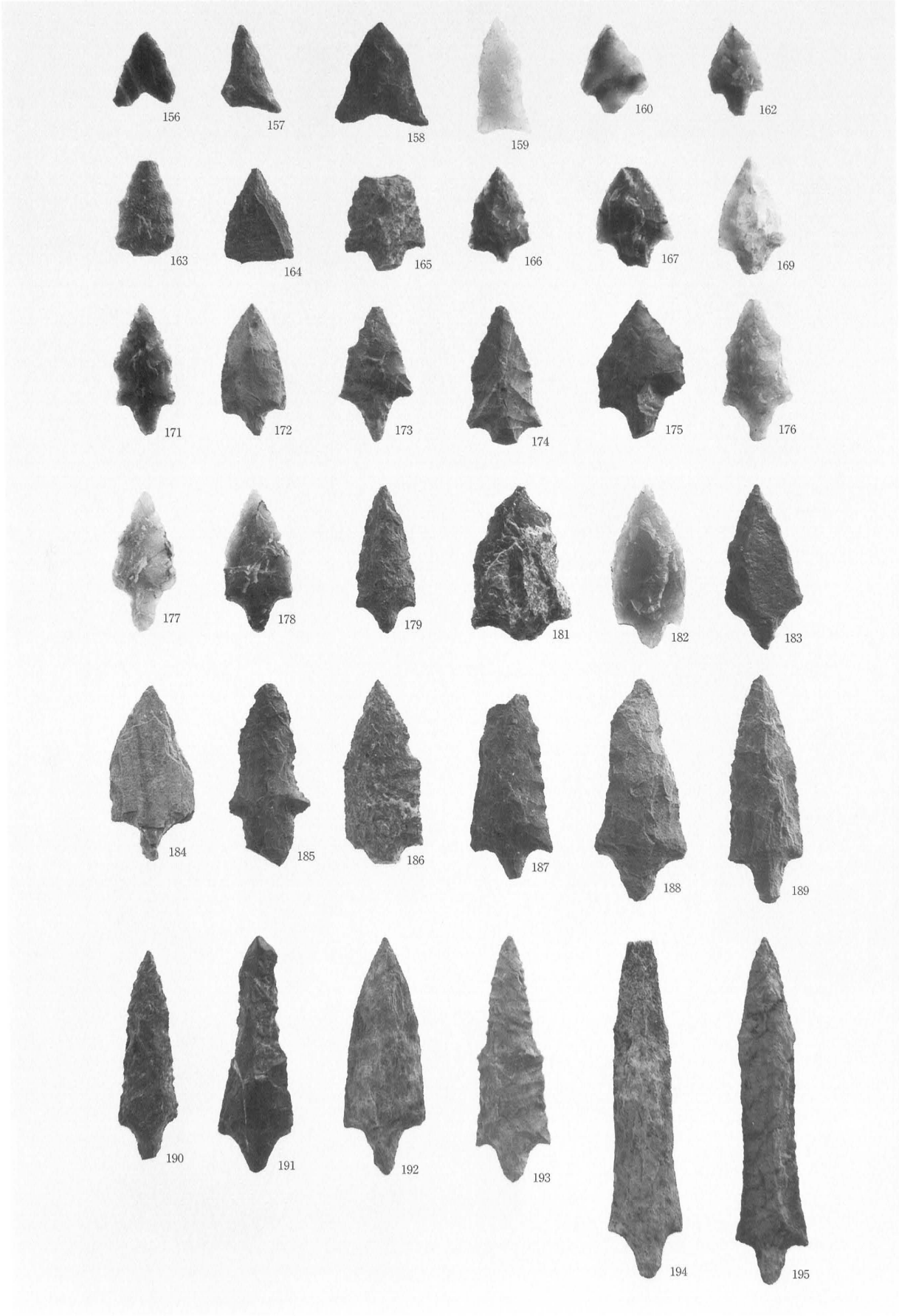
139

268

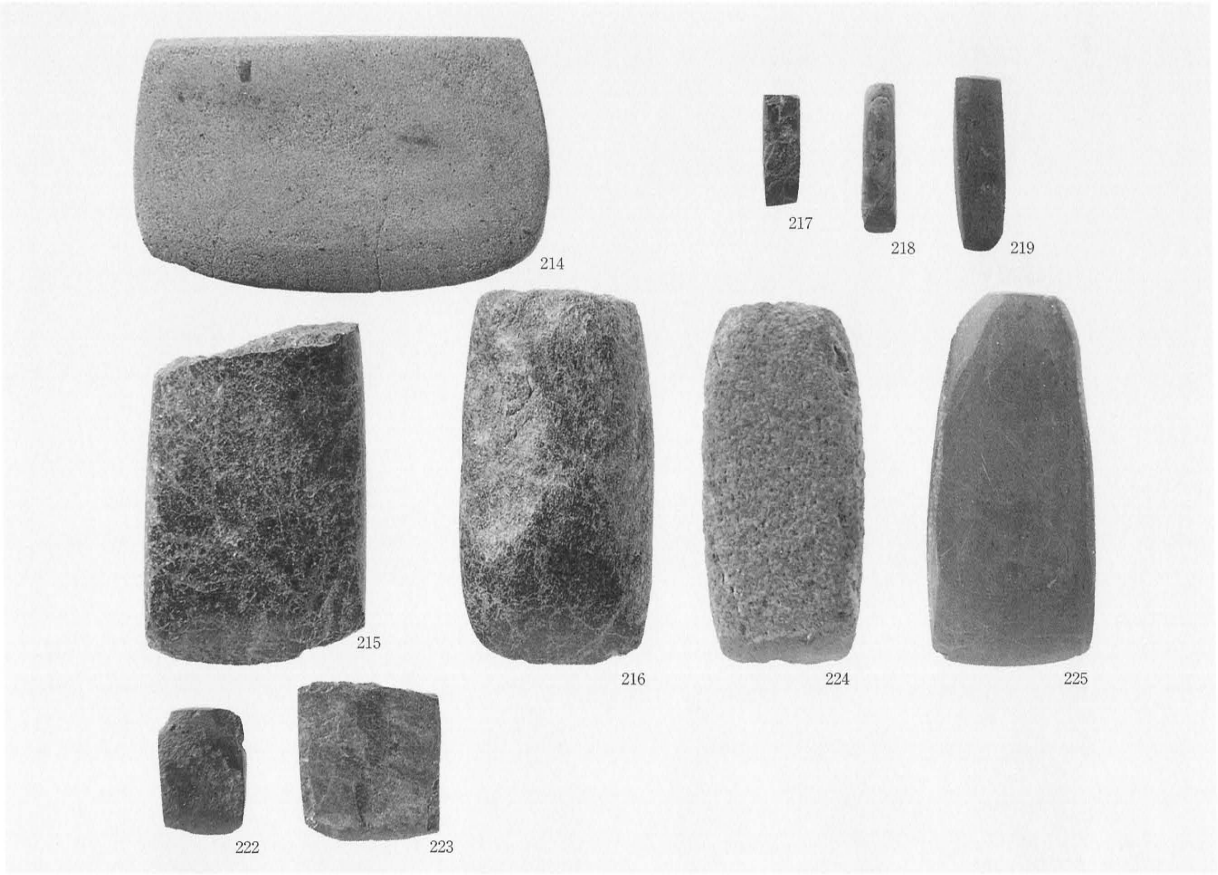
出土土器（5）



出土石器（1）


156
157
158
159
160
162
163
164
165
166
167
169
171
172
173
174
175
176
177
178
179
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195

出土石器（2）



1　出土石器（3）

2　出土石器（4）

報告書抄録

ふりがな	いどおりいせき2
書名	井通遺跡Ⅱ
副書名	平成８～19年度　井伊谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第181集
編著者名	丸杉俊一郎／平塚智久
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20　TEL　054－262－4261（代表）
発行年月日	2008年３月19日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経調	調査期間	調査面積	調査原因
井通遺跡（いどおり）	静岡県（しずおかけん）浜松市（はままつし）北区（きたく）細江町（ほそえちょう）広岡字（ひろおかあざ）井通（いどおり）	22135		世界測地系 34°48′36″	137°39′27″	20010701～20020331 20020401～20030331 20030401～20040329 20040401～20041029	8,350㎡	河川改修（平成８～14年度井伊谷川河川改修）に伴う事前調査
				旧日本測地系 34°48′24″	137°39′37″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井通遺跡（いどおり）	集落	弥生中期	竪穴建物40軒・土坑・溝・土器棺墓	弥生土器・打製石斧・磨製石斧・石鏃・有孔磨製石鏃・台盤状土製品・鳥形土器	都田川流域に展開した弥生時代中期後葉の大規模集落
	集落	弥生後期～古墳前期	自然流路	弥生土器・古式土師器	

要約

井通遺跡は弥生時代中期～中世にわたり集落が営まれた複合集落遺跡である。
弥生時代中期後葉に集落が形成され、都田川流域における本格的な農耕社会へ移行する様相を確認できる。
なお、井通遺跡の古墳時代中期以降の調査成果は、本書とは別に報告している。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第181集

井通遺跡Ⅱ

井伊谷川流域の遺跡　Ⅲ

平成８～19年度　二級河川井伊谷川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年３月19日

編集・発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054-262-4261（代）
印刷所　中部印刷株式会社
〒422-8037　静岡県静岡市駿河区下島426-1
TEL　054-237-9133